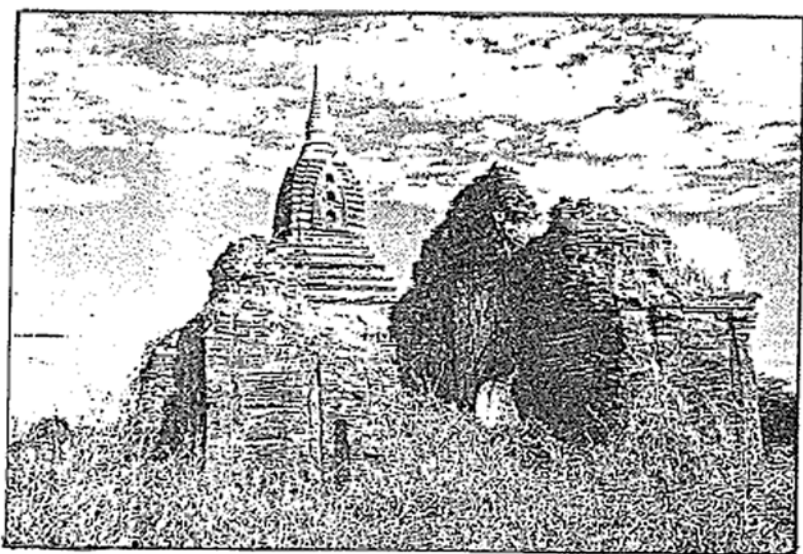


人生最後の旅路

ビルマ戦跡巡り と 慰霊巡礼紀行

(下の写真は古都パガンの仏教遺跡)



平成10年1月7日～17日
(1998)

石川県加賀市山代温泉神明町7～3
寺前信次

目	次
まえがき	1
戦友の眠るパゴダの国へ飛翔	4
援蒋ルート遮断 (断作戦と呼称)の思い出	5
モンユの戦闘	8
ナンパッカの戦闘	9
陸軍の反省	16
シポウの戦闘	17
ビルマの概要	20
ビルマの独立	22
ラングーンの概要	25
ラングーンの市内観光	26
シュエダゴンパゴダ	27
独立の父	
アウン・サン将軍と廟	28
チャウッタッチーパゴダ	31
アウン・サン	
スーチー女史	32
スーレ・パゴダと繁華街	35
ハイホ～インレー湖の旅	37
インレー湖の概要	39
インレー湖遊覧	40
タウンヂー～ハイホ～ ピンダヤの旅	43
ピンダヤ	46
シポウ～ライカ～タウンヂー ハイホの戦闘	48
ハイホ～タウンヂーの戦闘	53
龍56師団長から賞詞受領	56
英印軍からも逆に賞賛	56
ピンダヤ～カロー～サジ～ メークテーラ～ポッパ山～ バガンの旅	57
カロー	59
サジ	60
メークテーラ	61
ポッパ山	62
ナツ神	64
メークテーラ会戦	65
メークテーラ失陥の状況	66
メークテーラ攻撃	66
我が大隊の行動	68
バガンの歴史	70
バガン仏教遺跡の観光	71
バガン～ニャンウ 付近の戦闘	78
アマラプラ	79
マハガンダーヨン寺院	79
小乗仏教	80
ウー・ペイン橋	81
アハムニ寺院	82
マンダレーの歴史	82
マンダレーの観光	84
旧王宮	84
シュエナンド寺院	85
クドードオパゴダ	86
チャウットーギー パゴダ	87
マンダレーヒル	87
マンダレーの戦闘	89
ビルマの昔ばなし	91
ゼージョマーケット	92
インワ観光	93
サガイン観光	94
サガイン付近の戦闘	98
インパール作戦の回顧	99
ビルマの昔ばなし	104
ベグーの歴史	106
チャイティーヨ	107
メークテーラ開戦以降の戦闘	112
ビルマ方面軍司令部の 総退却とラングーン放棄	112
第56師団の行動	113
鳳集団の防衛戦闘	113
鳳集団の防衛戦闘と 第28軍への対策	114
南方総軍命令	115
第18軍命令	115
第28軍のシッタン河 突破作戦	116
我が寺前大隊の終戦と 泰緬国境通過	118
ビルマの竖琴	120
ベグー市内観光～ ラングーンへ	124
シュエモドーパゴダ	124
チャイプーンパゴダ	125
シュエタリオンパゴダ	125
ラングーンへ	126
菊兵団ビルマ巡礼 慰霊団と握手	128

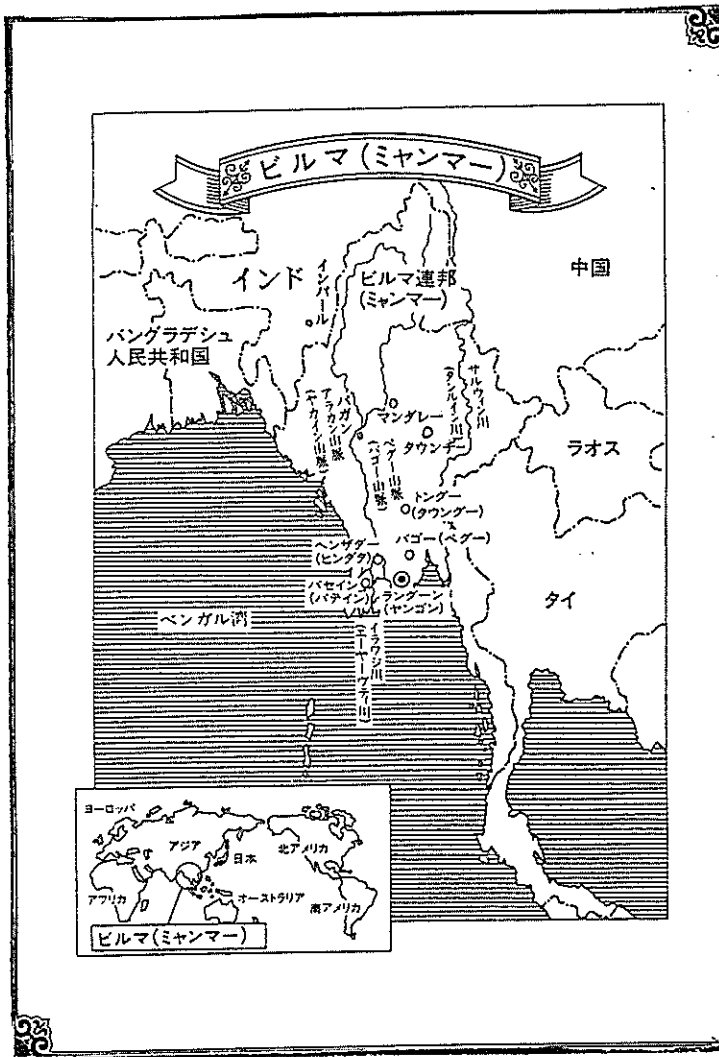
日本人墓地参拝
ショッピングと物価

・・・129
・・・133

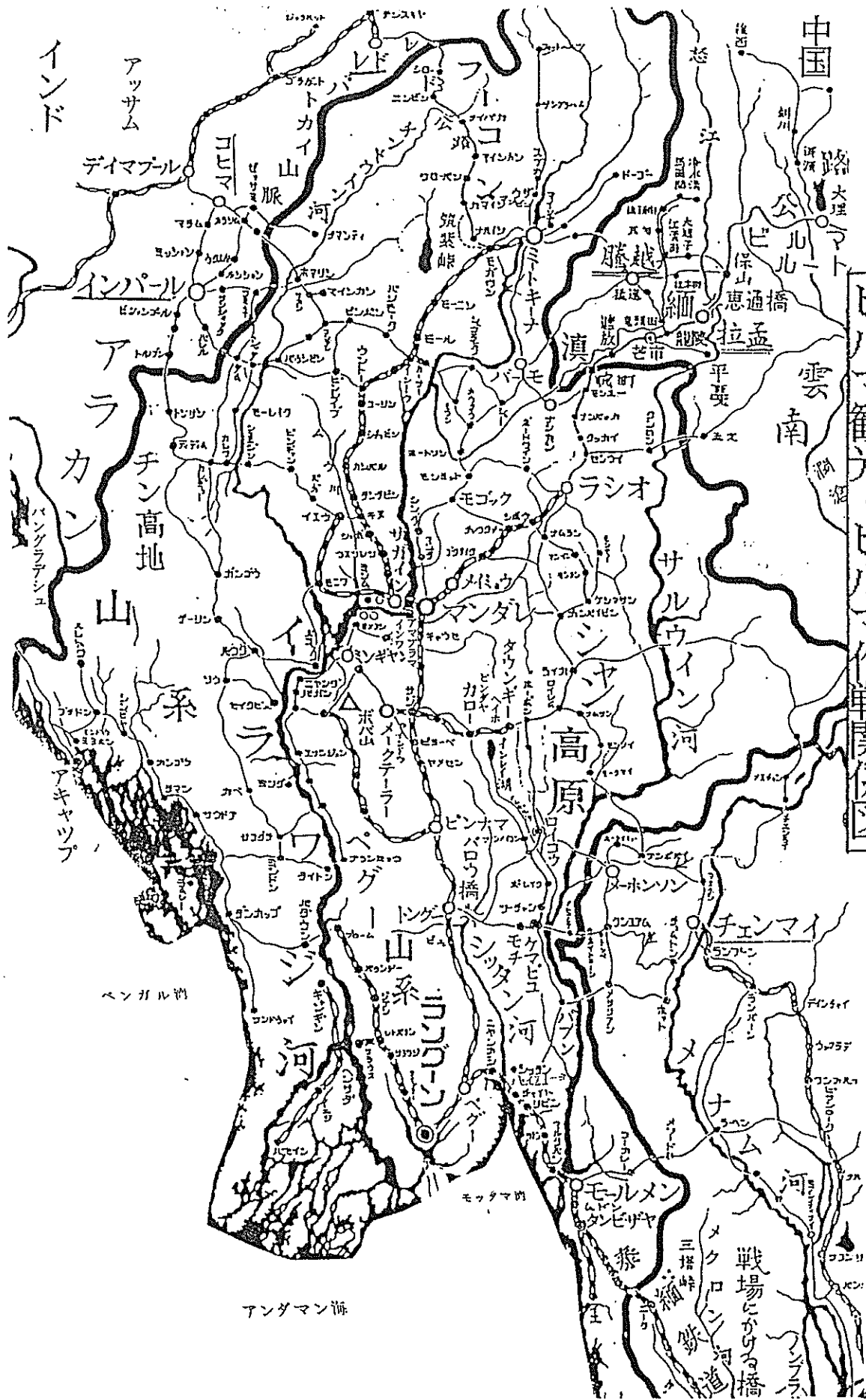
永遠の別れ
あとがき

・・・136
・・・137

ビルマの位置図



ビルマ観光・ビルマ作戦関係図



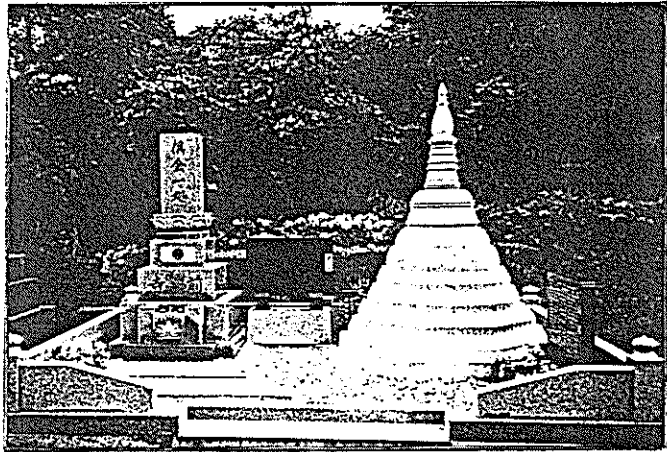
アングマン海

戦場にかける橋

まえがき

他人の死にも自分の死にも神経が反応しなくなって戦っていた、極限状態のビルマの地で敗戦を迎え、魑魅魍魎（チミウリョウ、様々な化け物）の落武者のようにボロボロの精神状態になり、終戦の翌年、浦賀に上陸して復員した。あれから52年の歳月が流れた現在の日本人は皆、戦争を知らない者ばかりで、我が孫たちも祖父の戦争体験などはどうでも良いことで、激しかったあの戦争は滔々と流れて、忘却の彼方に埋もれてしまった感じがする。

一昨年（平成8年）春、何を思ったのか自分自身でも分からないが、妻と合意の上、20年前に購入した加賀市中央霊園の墓地に（約2坪）墓を建立することになった。偶然にも同年8月、胃癌と診断されて入院手術となったが、建墓は別に我が死を意識したものではなかった。



生存中に墓を建てることを寿塚、寿墓、寿陵などと呼んでいるが、寿は長生きすることとか、長寿を祝う意味がある。しかし私の建墓はそのような深い考えがあった訳ではない。ただ我が遺骨は激戦して多くの戦死者を出したビルマの大河と、中国河南省を流れる黄河に撒骨するよう遺言していたから、墓地の敷地内にビルマのパゴダと中国の黄河を造形し、とこしえに亡き部下の鎮魂が建墓の目的であった。（上の写真の左は我家の墓、右はビルマのパゴダとその下を流れる黄河）

我が家の「俱会一処」と刻んだ墓石よりも、数段も立派に建立されたパゴダと黄河の完成を見ると、妻は夫が死を賭して戦ったビルマの地を是非とも見たいと言い出し、両膝関節痛に悩む私に同行を求めてきた。

一昨年の胃癌の手術の前に医師に依頼して、念願の一つであった日露戦争の激戦場・203高地や東鷄冠山北堡壘を訪れた。そして、この旅を人生最後の海外旅行と決めていた私は、体力の限界を感じて悪疫瘴癘の地ビルマ行には同意を渋った。

古希を過ぎた妻は女性特有の土地勘は至って鈍く、私が同行して詳しく地理の説明をしなければ、我が遺言の撒骨はできないとまで言い出した。20年前にも慰霊巡礼の旅にビルマを訪問したものの、老躯と病躯の体力以外には断る理由もなく、今度こそ人生最後の旅路だと同意したのである。

日をあけずに満身創痍となって戦った波瀾万丈のビルマ戦線から、九死に一生を得て帰還した人たちは、誰しも戦没した部下や戦友の霊を弔う心を持っている。しかし諺にあるように「去る者は日々疎し」と云うのも自然なことかも知れない。

親しい人でも遠く離れていると次第に情がうすれるのと同様に、死者に対しても月日がたつにつれて忘れられていく。だが大抵の人たちは何かの祈りの時に戦友を思い出し、思い出せば感無量の気持ちになるだろう。しかし口で言うほど、生き残ったことを英霊に対して申し訳がなく思ったり、戦後を本当に付録の人生だなどと思ったりしているかどうか。

歳月は生々しい過去を薄めてしまうから、それを思い出すためにパゴダと黄河を墓石の横に造った。今回はまた老骨掉尾の勇を奮い、戦鼓を鳴らして血の河を渡ったような思い出の多いビルマ行は、死を強要されて幽明境を異にした人たちへの慰霊一心の旅だと思つと、人生は再び来たらず最後の機会だと心身は亢奮し、雲が湧き血圧が上昇するような心境になってきた。

戦後、茫々50余年の歳月の流れは世も人も変えてしまった。彼の日本軍の、くたびれたゴムが伸びきったような状態で戦った戦闘が、本当にあったのかどうか、夢だったのか現実であったのか、判らないように感じてくることさえあるのだ。事実、自分が経験したことが他人事のように感じるのも、それが自然と云えば自然かも知れない。

最近では戦闘を思い出す時間が少なくなってきた。そして忘れてはならない戦争の悲惨さが、少しずつ呆けていくような気もする。それが歳月というものであり、人間というものかも知れない。喉元過ぎれば熱さを忘れるでは戦没者の皆さんに申し訳ない。

負傷すること3回にも及んだ人は極く僅かだが、現在の私はその痛ささえも忘れ呆けてしまった。生命の運勢は強運だと自負していた私も、胃癌の手術後は体力気力ともに消耗が甚だしく、今ではかすれた老後を如何に過ごすかという問題は、既に通り過ぎてしまった。

ビルマ行を決意し、20年前に初めて上梓した「両忘」（生と死の両方を忘れて戦った意）を繕いてみると、劣悪さあまる文章ながら、彼の戦闘は昨日のように鮮やかに思い出されてきた。そして花吹雪のように散華した戦友のことを思うと、身の毛がよだつように感奮の炎は胸中をかきたて、我が心臓は万力で締め付けられたような痛みを感じていた。

ビルマにおける作戦は3年有半にあたる激闘ののち、日本軍の敗退をもって幕を閉じた。この間、日本軍は20万人に近い損害を被り、勝者である中国、米国、英国もまた莫大な死傷者を出した。しかし、8万人のビルマ人が亡くなったことを述べる人は少なく、この点は誠に申し訳がないとお詫びしなければならない。

歴史はやがて勝者が敗者を裁いて日本は解体し、ビルマは戦争が集結すると間もなく、英国は再び総督をラングーンに派遣して民政を布いて植民地を

復活させた。しかし独立の志士アウンサンたちの反英運動が功を奏し、僅か2～3年でビルマやインドは英国の羈絆から脱して独立した。

不思議なことにもビルマやインドを防衛して戦った英国は、戦争には勝ったが植民地は共に失ってしまった。米国もまた英国と同じ轍を踏んだ。中国問題で日本と戦い、大きな犠牲を払ってようやく勝利を掴みながら、戦後の中国は共産国になり、米国は日本と安全条約を結んで同盟国となった。

これらの結果を見ると、関係各国は果たして何のために今次世界大戦を戦ったのか、そもそも勝負とは何ぞや、と反問せざるを得ないのである。

戦後の日本人にはビルマに関する知識はない。多くの日本人には大東亜戦争（太平洋戦争）時の激戦地として、或いは故竹山道雄氏の名作「ビルマの豎琴」に描かれた、敬虔な上座部仏教国（小乗仏教）としてのイメージ以外に、ビルマを表現することと云えば、アウンサン・スーチー女史の自宅軟禁に象徴される、人権無視の「軍事独裁国家」だったことぐらいであろう。

ビルマの正式な国名は「ミャンマー連邦」と云う。英語では「バーマ」と呼ばれてきたが、ビルマ政府は1989年6月、国名を英語ではなくビルマ語のミャンマーを使うよう要請した。しかし日本ではビルマのことを英語のバーマではなく、ビルマと呼んできた。そして彼の地で戦った我々には、懐かしい旧名のビルマやラングーン（現ヤンゴン）などの方が馴染みが深く、この紀行文では旧名を使うことにした。

紀行文は個人史の一部である。個人史の特質は自分の人生を振り返り、最も密度の濃い部分に焦点があてられている。だから戦争・戦闘について書くことは自らを語ることだと言えるだろう。そしてこの紀行文は拙著「両忘」の補完的な記録で、詳細な戦闘記事は両忘を参照されたい。

文中に出てくる「聯」という字は戦後の日本では抹殺されたが、「聯」の耳の右にある「つくり」は「糸」（糸は戦後の略字）である。これは昔、敵兵を殺した印にその耳を切り取って紐を通したことに由来している。即ち「つらなる」「くみあわせる」ということで、牛耳るの意味も含めて「聯隊」に使用された。

「連」は連山、連中、連日、連名、連夜など、同じ「つらなる」でも「つづく」という意味である。今日の自衛隊では「聯」が使えなくなったから、便法で「連」を使用しているようだが、漢字の本国である中国では「連」は中隊のことである。

以上のようなことから、この紀行文では旧軍隊用語であった「聯」を使用することにした。

戦友の眠るパゴダの国へ飛翔

関西空港が開港されてからラングーン（現ヤンゴン）へは週3便の直行便が運行されるようになった。20年前にビルマを訪問した時は泰のバンコクに一泊しなければならなかったから、現在は至極便利になり時間も極端に短縮され、往路は6時間半、帰路は5時間半の飛行時間である。

今から54年前、陸士60期の教え子と共に戦局の前途に憂慮を感じながら、無気味な死臭の漂う悪戦苦闘のビルマ戦線の真っ直中へと、屍を馬革に包む覚悟で征途についた。時はサイパン、テニヤン、グアムが陥落した直後であった。

歳月が流れて月日が重なると他人事のような感じがしないでもないが、武人らしく私は最前線の死闘の場に身をさらして彷徨い、死と背中合わせの剣電弾雨の間に立って瀕死の重傷を負った。しかし今こうして生き長らえて、再び戦友の眠るビルマ行に参加できることは、本当に幸運だと喜ばなければならぬ。しかし一方、考え方によれば被害者意識を持つ人生だったとも言えるだろう。

貧しかった我々の青少年時代や軍人時代は、日本人は国家や自分自身の人生について真剣に考えた。しかし戦後の奇跡的な経済発展に伴い、日本社会は「考えない日本人」を作り出し、想像もできない凶悪犯罪が増加した。

現在の日本人は如何に生きるかを考えなくとも、普通にしていれば生きていける状態に社会は変化した。昔は考えも及ばなかったことだが、今は老人は老後を楽しみ、如何に安楽に死ぬるか考える時代となり、隔世の感がする。しかし平均寿命を過ぎた私らの老後は余すところ極めて僅かである。

男子大学生に「日本が軍事攻撃を受けた場合どうするか」とアンケートを取ったところ、「戦う」に○を付けたのは100人中たった1人、あとの99人は「安全な場所を探して逃げる」だったという。勇気や愛国心の欠如というよりも、彼等は「何も考えない」だけなのである。考える習慣がなくなっていたのだ。経済至上主義のために責任感や自立心に欠け、画一的な価値観を持った現代日本人が生み出した、一つの現象であろう。

このような今昔のことを考えながら関西空港に集まり、一行17名（関東8名、関西9名）は1月7日、全日空NH1181便に搭乗した。

機上の人となると直ぐ、冷酷非情な「鉄と肉の戦い」であった波瀾万丈のビルマの初陣戦、「断作戦」の数々の思い出が悲しく我が脳裡を駆け巡ってきた。

先ず最初に激突した「断作戦」の戦闘経過を記載することにする。

援蔣ルートへの遮断（断作戦と呼称）の想い出

ビルマを訪れる以上は残虐悲惨な作戦の記事を記載して、当時を思い浮かべることが当然のことである。

戦争の末期、征途についてビルマの地に足跡を印して以来、ビルマ方面軍司令部（ラングーン）及び第33軍司令部（ラシオ）に於いて、約1ヶ月半にわたり各参謀の教育を受けながら勤務した後、56師団・龍兵団（司令部はワンチン西南方のジャングル内）への赴任命令を受領し、師団参謀長川道大佐から指導を受け始めたのは、昭和19年の年末頃だったと記憶している。

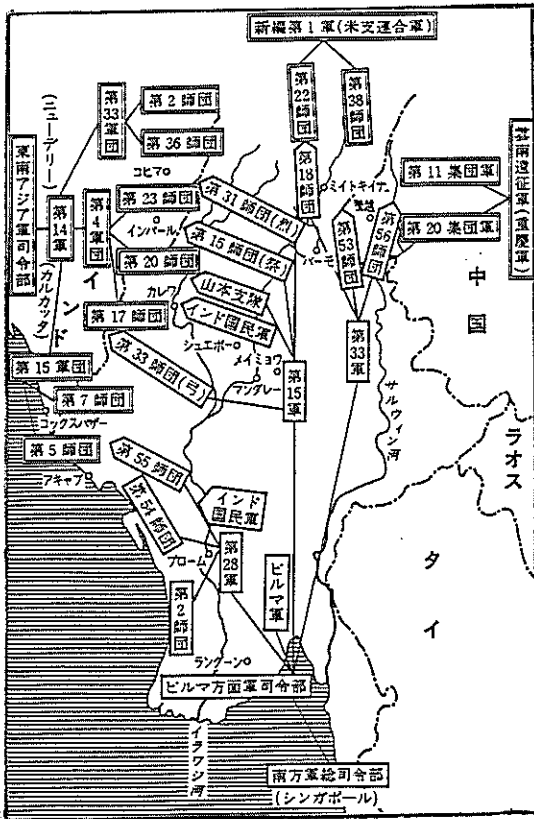
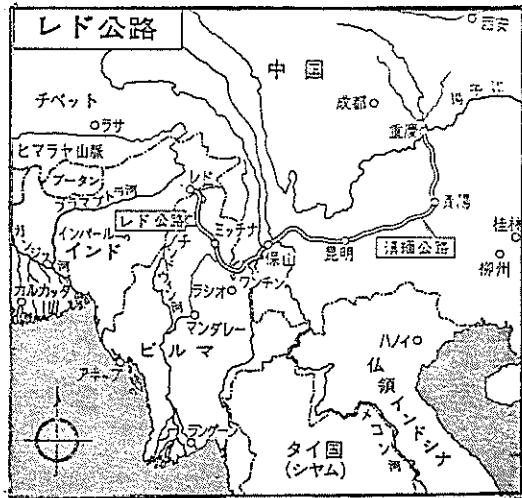
その当時、中国大陸では大陸の米空軍基地から日本本土を爆撃する基地の覆滅のため、北支那から南支那にわたって史上最大の大作戦が展開していた。

第33軍は、蒋介石中国軍の唯一の戦略補給路である「レド公路」と「滇緬公路」を遮断することが最大の任務で、主として龍56師団と菊18師団（ともに北九州編成）がその任に当たり、16倍もの敵と熾烈な死闘を演じていた。

レド公路はインドのレドから北ビルマのフォーコン谷地を通り、ミートキーナ（ミッチナ）、騰越を経て昆明・重慶に通じる援蔣ルートである。

滇緬公路はマンダレー、ラシオを通り龍陵・拉孟を経て雲南省の堡山でレド公路と合流する援蔣ルートで、滇は雲南省、緬はビルマの意である。

（右上の地図はレド公路・滇緬公路の図、右下は彼我両軍の展開図）

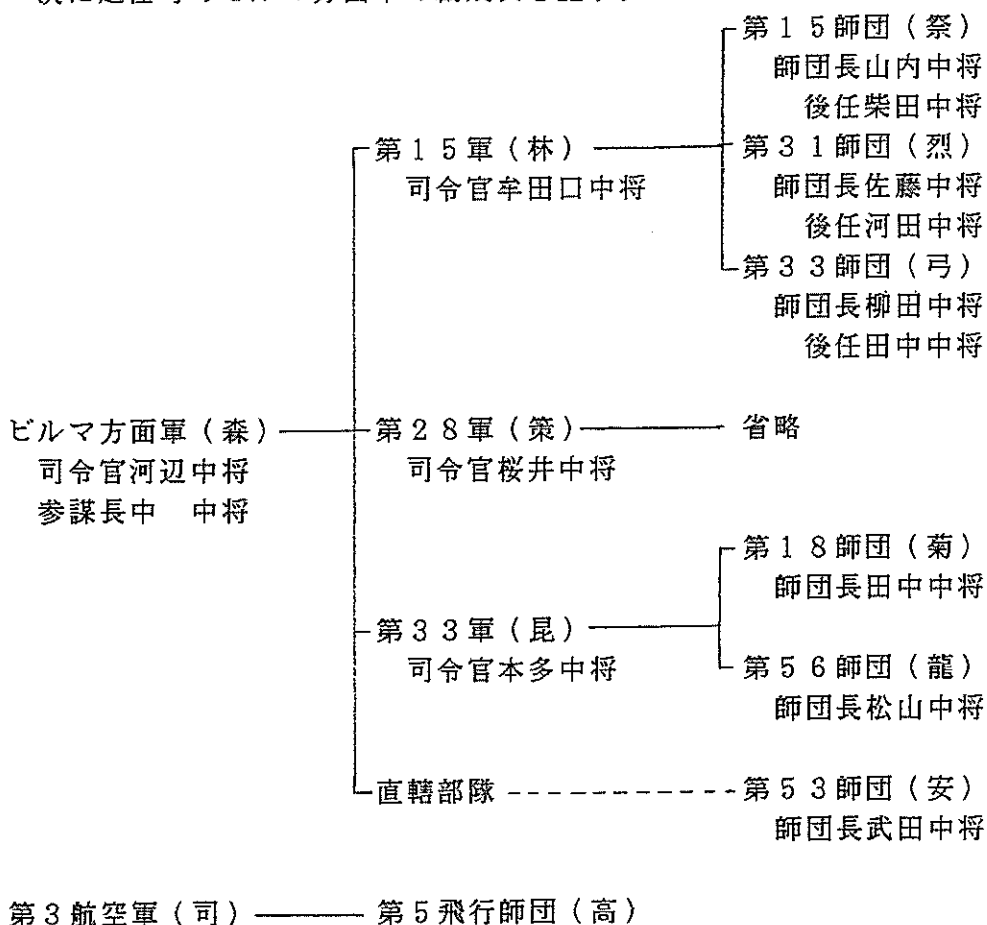


レド公路には石油輸送管が敷設されることになっていた。これによってレド油田の石油を直接、昆明に送って中国大陸の戦力を増加させようとした、最も大規模な恐るべき計画で、北ビルマに実現しようとしていたのである。誠に驚異的な物量作戦であり、日本軍の考えも及ばない計画であった。

数ある援蒋ルートの中で、輸送量が最も多いレド・慎緬両公路の解放は、連合軍にとっては至上命令であり、ビルマの東部、北部、西部から猛反撃を開始したのは当然のことである。

このような状況の時に、牟田口第15軍司令官は連合軍の反攻作戦に対して先にインパールを占領しようと、全く補給を度外視して無謀きわまる作戦を強行した。この計画に対しビルマ方面軍や南方軍総司令部ばかりか、大本営までが牟田口中将の強硬な意見に押され、同意したのは返す返す残念至極である。(インパール作戦については項を改めて記述する)

次に赴任時のビルマ方面軍の編成表を記す。



54年も前の記憶の細い糸を手繰っていくと、赴任間もない昭和20年の正月をジャングルで迎えた龍56師団司令部は、敵の戦闘爆撃機の急襲を受け、犠牲者も出た模様で右往左往していた。

正月気分が無警戒だったのか、炊煙が緑のジャングルの上に立ち昇ったために大部隊が隠れていると判断した敵機の、好餌食の目標となったのである。

中国戦線では3年間も最激戦地で戦闘を続けた私も、空襲を受けたのは今回が初めての体験で、ビルマ・雲南のジャングルは血の匂いが充満し、虎の尾を踏むような、度肝が抜かれる戦場だと決意を新たにした。

当時の龍兵団の第一線であった畹町（ワンチン）周辺の陣地は、守備兵力に比して防御正面が広過ぎていた。そのため正月元旦、どこからとなく潜り込んだ15倍もの衆敵は、我が陣内の砲兵陣地に向かって突入してきた。幸い歩146聯隊今岡部隊の予備隊が駆けつけて撃退したものの、各方面も同様な戦況で龍兵団の布陣も遂に綻び始めていた。

（上図は12月中旬の龍兵団の状況）

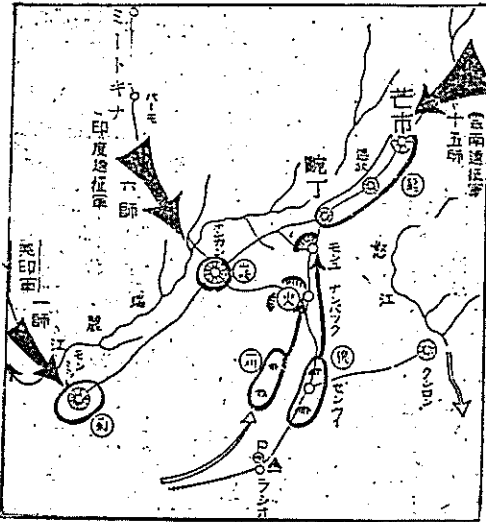
東と西からの21ヶ師団の敵軍は、包囲下の獲物を競うようにしてワンチンとナンカンを目指し、潮の如く攻め寄せている。これらは司令部で入手した情報であり、中緬国境からワンチンまでの戦闘を「第一期断作戦」と称す。

正月も過ぎて何日だったのか明瞭な記憶はないが、師団参謀長川道大佐から歩146聯隊の第二大隊長に下命されたと告げられた。龍56師団長松山祐三中将に申告を終えてからワンチンの南の丘に蕭然と立ち、後退してくる聯隊長今岡宗四郎大佐を待った。

ビルマ方面軍司令部付勤務の時、我が遠戚にあたる方面軍高級参謀の佐孝大佐に、私は第一線歩兵大隊長を希望するから、是非とも宜敷と願っていたことが実を結び、憧れの歩兵大隊長に就任できたのである。久しぶりに戦場に立った私は身震いするほど緊張し、心身ともに引き締まる心境であった。

これから以降の私が直接体験した詳報は、20年前に2ヶ年の日時を費やして上梓した拙著「両忘」に記載した。しかし才能がなくて嫌気がさし、校正もせずに輪転機を廻し、誤字脱字が多いうえに句読点もなく、誠に極まりない拙文で忸怩たるものがある。但し若かったために文章には熱意と新鮮味が窺われ、それが表現力や文章力を補っていると思っている。

前任大隊長の脇山博雄少佐（49期、55師団参謀に栄転）から指揮の責



任を受け継ぎ、歩146聯隊第二大隊長を命じられた私は、現在だけがあつて明日の命がわからない、苦難の運命が待ち受ける立場に立った。

それ以来終戦まで、敵の冷酷非情な砲爆撃の弾煙が、天日までも隠すような血生臭い怒濤の中で、魂は天外に飛んで死を覚悟し、天に泣き地に哭しながら刀折れ矢尽きた感じで敗戦を迎えた。

前任者と交替してビルマ・雲南省の国境の町・ワンチン南方の散兵壕に立つと、将に想像に絶する「肉と鉄量の戦い」であつた。15倍以上の兵力で我が軍を十重二十重に包囲する雲南遠征軍は溢れるほどで、この猛攻を阻止する我が方は殆ど徒手空拳に近い状態であつた。

雲南遠征軍も米支連合軍（新編第1軍）も大軍を擁しながら、日本軍のようなイチかバチかの肉弾突撃は決して敢行しない。先ず砲撃と爆撃で攻撃目標を徹底的に破壊し、日本軍の抵抗力を皆無にしてから歩兵を進める戦法である。もしも前進した歩兵が思わぬ反撃に遭遇すると、彼等は無理をせずに後退して陣容を立て直し、再び砲爆撃を加えるか、或いは迂回して退路に迫ってくる。（雲南遠征軍、米支連合軍は5頁の地図参照）

このような彼等の兵器や兵力の差を計算した必勝の戦法に、私はビルマの初陣戦から兜を脱がされてしまった。対する日本軍は成り行きの必勝の信念だけで戦わされたのである。

砲爆撃で丸裸にされ荒々しく掘り返された陣地を確保し、一発撃てば千発も打ち返される状態のワンチンの陣地は、遂に追撃する敵に抵抗する術もなく、夜半に撤退のやむなきに至り、命令によってビルマ領モンユ（次頁地図参照）に後退した。先の見通しが全くない戦闘ばかりが続き、常に緊張した精神状態に立たされて心の安まる暇もない。

【モンユの戦闘】（次頁地図参照）

早朝から敵の観測機が頭上を旋回するモンユの戦闘で想い出されるのは、生まれて初めて戦車攻撃に見舞われたことである。心臓をえぐり取るような凄まじい戦車砲の轟音と、雷鳴に似た砲爆撃の中に四日間も陣地にへばりついていた。しかし1月中旬頃、急遽、敵機の跳梁する昼間にかかわらず、早急に撤退するよう命令を受領した。

当時の我々日本軍は一つの地点で数日間、敵の攻撃・追撃を阻止し、いよいよ持ちこたえられなくなると、上の命令によって次の抵抗線に百鬼夜行のように隠密に後退し、これを繰り返して持久戦を続けていた。

風前の灯火のような地獄絵さながらの最前線歩兵部隊の指揮官は、部下将兵の悲惨な光景を冷然と見捨てなければならなかった。その心境を表現する言葉も知らず、今も尚、慚愧の思いがしている。

ここで戦時編成の歩兵聯隊の構成を記しておく。聯隊は歩兵三ヶ大隊と聯隊砲中隊（山砲四門）、速射砲中隊（四門）、通信中隊（無線・有線）、本

部から成る。歩兵大隊は一般歩兵4ヶ中隊（1ヶ中隊は軽機・擲弾筒を含む約200名）、機関銃中隊（重機関銃12）、大隊砲小隊（2門）、本部（副官、情報将校、軍医2、獣医将校、主計将校、行李、通信）等から成り、戦時編成の定員は約1000名程度である。しかし私が任務に就いた時は、其れまでの犠牲のために半減していたと推定している。

中国戦線では歩兵1ヶ大隊の戦力といえども実に大きい存在であった。しかしこの戦場の大隊長は実に哀れで地図さえなく、紙も鉛筆もないという、無い無いづくしの状態で戦っていた。従って陣中日誌も書けず、戦闘の日時も概略しか記憶していない状況であった。

数十門の敵の放列から発射される激しい咆哮も、間断なく投下する敵機の爆撃の雷鳴も、威圧するような戦車砲の炸裂音も、すべてを感情の外に置かなければならなかった心境で、ただ任務の達成を祈って壕内生活を送り続けた。やがて敵機も去り、戦車は引き上げ、砲撃が止むと、稲妻のように我が将兵の脳裡をかすめてくるのは、「今日も命があった」という一語に尽きるのであった。

命によりモンユの陣地を撤収して国道に出た途端、聯隊長は、我が大隊に列をなしているトラックに至急乗車せよとだけ命じ、任務も目的も一切指示せず、危険さわまる真っ昼間の街道を南進した。

草原を通過して山岳地帯にさしかかった途端、右前方の丘から急襲射撃を受け、間髪を入れず下車して部隊を掌握した。後日になって此の地帯はナンパッカ地域であることが判明した。

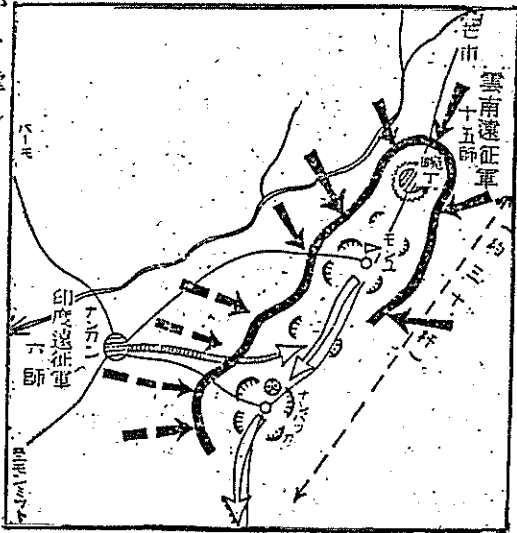
【ナンパッカの戦闘】（右図参照）

断作戦の戦闘で私の最も悔やまれる戦闘は、1月下旬の「ナンパッカの戦闘」であった。

敵の不意急襲射撃を受けて下車し、直ちに公路沿いの高地を占領して、後続部隊を待っていたところ、突然日本軍の将校が現れた。彼は33軍参謀長山本清衛少将（28期）の命令だと伝えて、陣地占領した我が大隊を総て引き上げて、彼の誘導に従った。（上はワンチン、モンユ、ナンパッカの図）

敵に遭遇して脅威に怖じ気がついていた軍参謀長は、寺前大隊は本夜夜襲を決行して敵陣を奪取すべしと下命した。そのために慌てて我が大隊を自動車輸送したのであった。

どこに敵陣があるのかも示さず、敵陣が不明のまま夕刻が迫っていた。私



何と云われようと腹をくくり、三度にわたる攻撃の延期を具申したに拘わらず、山本軍参謀長は我が大隊に無謀無知な夜襲を決行させ、松崎、島田両大尉の中隊長以下41名の戦死者を出したのであった。

その怨みは骨髓に達しており、拙著「兩忘」には私の胸中を詳しく記述してある。「餅は餅屋に任すべし」と云うとおり、歩兵の戦闘は歩兵に任すべきで、憤懣やる方なしである。

夜間攻撃奏功の必須の絶対要件は、攻撃地区の地形及び敵陣地に通曉して準備の周到なことである。ところが命令の到達が終わった時は薄暮に近く、攻撃の進路さえも偵察する時間は少ない状態であった。歩兵の夜襲は列車を運転する鉄道聯隊のように、いかに彼は無知であった。

敵は公路上の峰を直接占領していた訳でなく、歩兵は何時でも通行は可能で、自動車も隠密に進行すれば夜間運行には支障はなかった。ただ迫撃砲と重火器で威嚇射撃をするだけであり、公路から離れた峰の天辺付近を占領中の敵は、敵等自身の恐怖心から盲射しているに過ぎない。それを右往左往して大騒ぎする必要はないのであった。

鉄道兵科出身の軍参謀長山本少将は、我が聯隊長今岡宗四郎大佐と陸士同期(28期)で、当時の私とは親子ほどの年齢の差があった(52~3才)。しかし現在の私の年齢は反対に彼とは親子ほど違う年長者になり、人生経験も積んでいるから忌憚なく言えるのである。

彼がもし歩兵科出身者であれば、時間的に一日以上の時間的余裕があった筈だから、当然地形偵察も行って夜間の進路標識も設置し、少しでも突撃する歩兵部隊に協力していたと思うのだ。

人を信じない輩には人を統べることは出来ず、我々歩兵指揮官は他人の鼻で息をするような真似は出来ないのである。自分で確かめる以外に正確な状況を把握する術はないと、常に最前線に出ていた積もりで、鉄道兵科とは日を同じくして語ることは出来ないのであった。

彼は陸士時代に鉄道兵科に飛んだ怨みから、臥薪嘗胆して猛勉強し、陸大に合格してエリートコースを歩んだに過ぎない。私も初めて受験資格が付いた年に聯隊長の命令で、中国戦線の陣地から軍司令部に出頭して陸大を受験し、まぐれ当たりで合格した。しかし実戦を積まなければ総て空論である。

馬鹿の一つ覚えのように「攻撃は最大の防御」と云っているが、中国戦線で戦っていた時分から私は実戦の体験上、反対の意見であった。特に今の第一線各部隊は戦うことよりも、自滅を防ぐことを第一義としなければ、持久作戦の断作戦の目的は達成できない。

一寸先は闇の状態に夜襲に出陣し、山脚に進む将兵の影は死に向かう姿であった。願わくば武運が彼等にあるようにと祈りつつ、暗闇の道なき道に消えていく部下を見送り、41名の戦死者を出した無念さを想起して、憤懣をぶちまけながら紀行文を書いていると、落涙は紙面を濡らしていた。

的確な情勢判断と洞察力・先見性はペーパーでは学習することは出来ない。これは戦場で体験して肌で覚えるもので、机上では地獄絵そのもののような戦闘が展開することは予想できないのだ。陣地占領した敵は速やかに螺旋鉄条網を張り巡らし、各所にマイクロホンを設置することも知らず、将棋の駒を動かすように命令されては、無駄死にを強いるようなものだ。だから歩兵のことは歩兵に任すべきであると、喧々囂々と非難するのである。

戦闘上、軍隊指揮官の資質の筆頭は先見性というか、先を読む能力が絶対的である。この先見性という能力は、どちらかと云えば先天的なものかも知れない。

天才的な人と普通の人に分かれるのは已むを得ないが、微かでも先を読める人は更に研ぎ澄まされる可能性はあるだろう。だから実戦の経験の重要性が叫ばれる。しかし、どうしても先の読めないタイプの人には、模倣と調整に努力するしか地位が守れない

旧軍の陸士や陸大で戦術その他の軍事学がいくら優秀で席次が上位でも、最も重要な先見性があるか否かを発見することは困難である。いくら階級が上級であっても、実戦の経験を積んだ歩兵科の者でなければ、判断出来ないことが多い筈であると信じている。

戦場心理は机上では判断できないものばかりで、先見性も亦、戦場では戦場心理に影響されることは論を俟たない。これまでに私は中・小隊長として突撃は3回経験し、突撃で一回だけ敵兵を斬った経験がある。だから上記のような意見を具申することが出来るのである。

戦史叢書には、敵の重囲に沈みきっていた龍56師団司令部は、軍参謀長山本少将の豪勇に度肝を抜かれ、軍参謀長の督戦の効果は大きいと記載されている。これは彼が戦史室で法螺を吹いた戦闘談話であろう。

戦闘を知らない参謀ほど面子や強がりによって、敵を軽視する傾向にあった。それは実際の責任観念が欠如するからで、本当に第一線指揮官として実戦を経験して初めて、戦闘の内容が見えてくる。特に彼等の「栄達欲と巧妙手柄の野心」が、失敗の原因となった例が多いのである。

今の年齢に達した私の考え方では、あの当時、彼の命令に素直になぜ服従したのであろうか、思うこともある。夜襲に自信がなければ職を賭しても反対すべきであったと。しかし当時は階級の上下を問わず、命令が下れば、それを忠実に実行するような人間になっていたのである。しかしながらその反省から、後の持久戦では私が腹をくくり、一兵の犠牲も出さないと決意し、面従腹背主義をとっていたことは事実である。

大隊長を含めて最前線に立つ将兵は、死は怖くなかったとは言わないが、怖がらなくなっていた。それは責任感がそのようにさせたのである。苦しさに喘ぎながら、自分の悲惨にも他人の悲惨にも、一種の不感症になっていた。

しかし戦場には、戦場独特の戦場心理という感情が存在した。それをどの

ように表現すればよいか判らないが、戦闘中は、ただもう無我夢中であつたと云えるだろう。

夜襲不成功の翌日、再び夜襲決行の命令が軍参謀長から下達された。その当時、我が大隊のみが敵前に位置するだけで、敵陣の背後の山岳地帯にいた（菊）山崎聯隊、（勇）一刈聯隊のことは全く知らされず、我が聯隊主力も師団主力も徒歩で退却中のため、なかなかナンパッカには姿を見せない。

成算のない攻撃は徒に損害を出すばかりで、昨夜の肉弾による万歳突撃で約100名の犠牲を出した大隊は、半身不随で満身創痍の「死に体」であつた。ただ条件反射だけで動いていたような私の脳中は、彼我の態勢から今日の夜襲も成功は不可能だと判断し、独り大隊長の私だけの死を以て昨夜の犠牲者にお詫びすると共に、人事を尽くすことも天命だと悟り、軍参謀長に抗議すると言う意味で夜襲決行を決意した。

死ぬまで戦うしかない戦場で生死の境を彷徨った者は、運命論者になつたのではなく、死があまりにも身近にあり過ぎて、死を考える暇も感じも無くなつたのが事実である。そのために死に対して恐怖心を感じないのと、責任の重圧から一刻も早く抜け出したいという、精神状態（死）にあつたと思つている。

若い生命を捨てるのに些かも抵抗を感じない私は、当夜の夜襲の最前線に立ち、敵弾の飛來する中を匍匐もせず立っていた。死を覚悟した死力とは何事にも恐れず、実に偉大なものだと感じていた時、敵弾は我が左頸部から気管及び食道を貫通し、右側上下の歯牙を折損させ、舌まで半分切断する盲貫銃創を受けて、どっと転倒した。

詳細な戦闘記事は拙著「兩忘」と重複を避けるため割愛する。瀕死の重傷を負いながら強運にも命を拾い、その後も波間に漂う難破船のように、日に夜をついで戦闘に従事したが、人生は正しく、くじ引きのようなもので今日に達している。

【戦史叢書から】

戦史叢書を繙くと、敵情判断について山本軍参謀長と辻高級参謀との意見が相反していた。ミートキーナを攻略した米支連合軍（印度遠征軍）の行動判断について、山本参謀長は「モンミット」方面を重視し、辻参謀は「ナンカン」方面を主張して譲らなかつた。（7頁地図参照）

しかし山本参謀長は辻参謀が第一線指導のための不在中、本多軍司令官に対し、「モンミット」方面に至急手当を要する旨を切言した。軍司令官は事は重大で将来の作戦にも大影響を及ぼす問題だから、もう一度辻参謀の意見を聞いた上で決定したいと考えた。

しかし、それでは軍参謀長を軽視することになり、統率上も面白くないと思ひ返し、遂に参謀長の意見を容れ、ナンカンにあつた菊18師団の主力を

モンミット方面に急派するよう軍命令を出した。

辻参謀の意見は、敵も味方もビルマにおける主要な戦略目的は、インドからビルマを経て中国本土に達する援蒋ルート打通と、その遮断に置かれていた。特に中国にとっては、打通を最大且つ緊急の目標として戦っていた。

インドで編成した新編第一軍（印度遠征軍）も雲南遠征軍も共に中国軍であるから、必ず密接に連携してナンカン～ワンチンを共通の目標として進攻し、一日も早くレド公路の打通を図るのが至当である。（7頁地図）

ミートキーナから南進を始めた印度遠征軍は、6ヶ師団のうち4ヶ師団がイラワジ河東岸をナンカン方面に前進し、他の2ヶ師団は西岸を南下していた。従ってバーモに向かっているものと判断された。（7頁地図）

このような時になっても、第33軍は本多軍司令官も山本参謀長も考え方は変わらず、モンミットを即時強化するため菊18師団主力を転用せよと命じた。菊18師団はナンカンに集結以来すでに2ヶ月、日夜陣地を強化して敵の来襲を待っていた。この準備した陣地ならば印度遠征軍の主力を相手にして立派に戦えるが、今モンミットに転用してはその努力が無駄になる。

そのうえ敵の主力がナンカンに出てくる気配が濃厚になった現在、たとえ上司の意図であっても、辻参謀は反対せざるを得なかった。ところが辻参謀が一週間ほど軍司令部を留守にしている間に、菊18師団主力のモンミット転用命令が出されてしまったのである。

以上のような経緯で、菊18師団主力はナンカンを去ってモンミットに急進し、ナンカンには菊の歩55聯隊（山崎四郎大佐指揮の2ヶ大隊）基幹の一支隊を残して、33軍の直轄とした。

その後、印度遠征軍の第1軍（30師・38師）はミートキーナ～バーモ～ナンカン方面に、第6軍（14師・22師・50師）のうち先頭兵団の第22師はバーモ西方からイラワジ河を渡河し、南岸を移動して直路ナンカン方面に前進したのである。

即ち問題の中国軍である印度遠征軍の主力は直接、雲南遠征軍と手を握るため、二方面からバーモ及びナンカン为目标に行動していた。結局、辻参謀の判断が的中したのであった。本多軍司令官や山本参謀長の敵情判断の誤りは、ナンパッカの我々の戦闘にも大影響を及ぼしたのである。

菊18師団がそのままナンカンの守備に当たっていれば、敵の一部がナンパッカまで浸透してくることはなく、大犠牲を出すことも無かった。一人の不的確な指揮官は実に1000人の損害を招いたと言わざるを得ない。

傍受電によると、蒋介石総統は雲南遠征軍及び印度遠征軍に対し、速やかに当面の日本軍を撃破して印支公路（レド公路）の打通を督励している。

要するに20ヶ師団に近い大軍を以て公路打通のため、最後の総攻撃をナンカン～モンユ～ナンパッカに指向していたのであった。辻参謀は中隊長として上海戦に参加しており、判断の差は実戦の経験だと云えるだろう。

ナンバッカ付近の戦闘は戦史叢書によれば、山本33軍参謀長自ら所在の部隊を指揮して夜襲を執行し、軍司令官に代わって56師団を指揮し、1月31日夜、再び敵中を突破して軍司令部に帰還したと書いてある。これは恐らく彼が述べたことを書いたもので、自らの敵情判断の誤りを認めていないばかりか、隷下部隊の犠牲に対して何の責任も感じていない。誠に憤慨に耐えないところで、自己顕示欲のために威勢の良い言を吐いたに過ぎない。

このような無能で識見もない愚劣な人物を軍の要職に据えるほど、日本軍には人物が払底していたのであろうか。第一線部隊を消耗品だと考えるほど人材が欠乏し、勝算のない戦いを強いていたのが現実である。特に作戦担当者の愚かな驕りは困ったもので、秀才か天才か知らないが、参謀懸章を吊すと独りよがりの奇行に走るようである。大まかで荒削りの山本参謀長は3月上旬の移動で中将に進級し、祭15師団長に栄転した。しかし人物の評価は部下が最も知っていることを忘れてはならない。

幕僚の養成は天才を作ることではなく、能率と常識を発揮すべき通常の軍人を作ることである。今にして思えば、出身学校や学校の成績を第一とする陸軍の官僚型体質の弊害であり、適材適所ではなかった。

学校の成績優秀者は、必ずしも第一級の指揮官や参謀ではないのである。学校では学業点だけであるから、抜け目のない点取り虫が評価され、人格、識見、判断力、洞察力、勇気など、軍人に必須の条件の評価はない。そして第一線の聯・大・中隊長として実戦の経験がないため、状況判断や戦闘指導能力が低いのであった。戦闘は第一線将兵がするのである。

そのため人事が重要になってくる。ビルマ方面軍では歩56聯隊長が53師団参謀長に転任し、53師団参謀長が後任の56聯隊長と入れ替わり、又31師団参謀長が山砲31聯隊長転出するなどの例が見られる。

生々しい戦闘を体験した聯・大隊長が参謀職に転出することは、戦況に則した作戦指導が可能となり、時宜に適した人事である。私の前任者の脇山少佐は陸大出身者ではないが55師団参謀に栄転した。このような例は中国戦線でも見られたが、軍参謀以上は陸大出身者が占めていたのは疑問である。

ノモハン事件を指導した関東軍参謀たちは中央の命令をきかずに大敗した。その後、これらの人たちは負けた責任があるのに拘わらず中央に栄転し、太平洋戦争の講和か開戦かの瀬戸際の時でも、当時のソ連よりも数倍もの国力を擁する米英と強引に戦端を開かせている。

大勇（講和）を知らずして匹夫の勇（開戦）に走った最大の愚行を回顧すると、エリートと言われた人たちは必ずしも「知恵袋」ではないのであった。

戦争は、軍隊と軍隊の戦いであっても、その軍隊は国力の産物である。そして軍備には兵器などの「物的軍備」と、それを活用する「人的軍備」があり、開戦までの陸軍部内には下克上の現象があったようだ。上に立つ者が下僚の起案を鵜呑みにし、或いは下僚を甘やかす上層部もいたようであった。

【陸軍の反省】

私の出身聯隊・札幌歩25聯隊の先輩（42期・陸大卒・陸軍省勤務）である加登川幸太郎氏の著書「陸軍の反省」には、陸軍大学校の功罪として次のように述べている。（脱線するが参考のために掲載する）

日清・日露戦争に勝利をおさめた陸軍における陸大の貢献は、大なるものであったが、その反面、同校は陸軍統制上は相当大きな害をなした。同校は原則として各兵科中少尉（我々の時は中大尉少佐）の優秀者を試験を以て入学せしめ、卒業者の多くは所定最小限の年数だけ隊付勤務をする外、中央官庁の要職、参謀勤務や幕僚勤務に就き、その進級は非卒業者に比して著しく速く、将官への進級が約束された。（42期時分は軍縮の真っ最中）

上記の如く陸大卒が非卒者に比して進級が速く要路要職に就き、上級に進むことが約束されたという事になれば、非卒者の嫉妬を招くことは当然で、対立的感情が醸成されることも当然である。

陸海軍は軍隊・艦隊あつての中央官庁であり、軍隊・艦隊が軍の主であり、従ってそれに従事する者が重視されるべきに拘わらず、中央官庁に勤務する者が重視されると云うことは、結局は軍の発展を歪曲することになった。

そのため陸大卒者の中には、部隊指揮者としての能力に欠ける者が少なかつた。かようなことも太平洋戦争の敗因の一つに数えることができる。

氏は陸軍の小学閥「幼年学校閥」に就いても次のように述べている。

陸軍将校に幼年学校出身者の一派あり。中学校出身者（加登川氏は中学出）は数は多いけれども常に敗者の位置に立てり・・・前者は同じ釜の飯の団体であり、士官学校の区隊長、中隊長には幼年学校出身者が多く、常に幼年側の肩をもっていた。

士官学校の区隊長は青年将校の熱望する地位で、これらが閥族的精神をもって後進を引き立てるなり、・・・多大の経費を投じて幼年学校を置く必要ありや、将校の品性上必要といふべくんば海軍にも必要にあらずや・・・

加登川先輩の意見には全く同感である。僅か数年ばかり学校に進んだだけで、その人物の能力が判断できるものではなく、軍隊は実戦に強い軍人を必要としていることを思えば、絶対に第一線の聯・大隊長を経験さすべきだ。

加登川先輩の意見にも出ていた陸士の区隊長の件について、その区隊長を経験した私を感じたことは、頭脳、体力、信望等の凡てに優れた人材を配置したのかも知れないが、惜しむらくは戦闘の経験者は実に少なく、偉い軍人の子息が多数を占め、空論教育に過ぎなかつたのではないだろうか。

中・区隊長ばかりでなく上層部の人たちも、特権のようにして軍の学校を盟廻し（タリマツ）に回って歩くだけで戦場には縁は遠く、外地に勤務したとしても危険度の低い後方勤務ばかりであつた。

自分の幻想にとりつかれた上級者とは、陸士の戦時教育の点に於いて衝突した私などは、特異中の特異人物であつたようである。

将来、出世しようと思えば上司に直言してはならない、と云う鉄則があったようだ。しかし、私は実戦の体験者として臨場感が溢れる実践的教育改革を唱えたから、煙たがられたことだろう。

随分と脱線した記事を述べたが、胸が搔きむしられる思いのナンパッカの第2日目の夜襲で頸部に重傷を負った私は、敵弾が飛来する際の中で3日間激痛に唸されながら過ごした。食道・気管が貫通されているから、発声も唾を呑み込む事さえできず、死ぬ時は死んだという心境になっていた。

4日目に漸く戦傷者輸送のトラックに乗せられ、余り遠くない後方のジャングル内に運ばれた。ここは龍56師団の野戦病院だったが、何一つ医療施設はなく、治療は行われず、患者は死を待つ状態で悪臭が漂い、蛆がうごめいていた。

大隊長といえども一人の患者に過ぎず、治療を受けられないジャングル病院(?)よりも、部下の軍医に治療をさせた方が余程よいと判断した私は、野戦病院に15日間ただけで第一線に復帰し、首に包帯をぐるぐる巻き付けて戦闘の指揮に立った。何よりも強い責任観念に生きようとする若さと、敵弾下の戦闘体験なくして何が参謀長かと奮い立っていたのである。

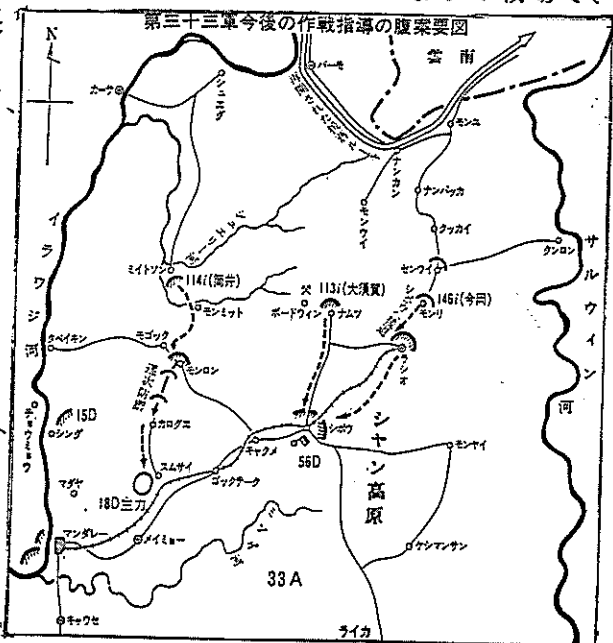
大隊長に復帰して以来、激戦を続けていたセンウイ〜ラシオ等の戦闘記事は割愛する。このラシオでもって「断第2期作戦」(下図参照)が終了した。

【シボウの戦闘】(下図参照)

あの歴大な砲銃弾や爆弾の嵐のような鉄量に圧倒されっぱなしの戦場で、敵の落下傘投下による補給を恨めしく眺めながら、恐怖心を自覚する余裕さえもなくなるほど、歩兵部隊は日に夜を継いで無我夢中で戦っていた。

「遠ざかるものは日々疎し」の諺の通り、記憶が薄れて書くべきことも書けなくなりました。しかし次々と脳裡に浮かんでくる書きたいことも、書きたくないことも山ほどあるから、死ぬまで戦争の苦痛から解放されないようである。

戦後50年以上を経過して各種の戦史や戦記を読めるようになり、当時の我々がどのような



状況下に置かれて戦っていたのか、漸く概要が掴めるようになった。当時は地図も紙も鉛筆もなく、一切の情報から遮断されて戦鬪を強いられていた。

2月26日の33軍命令では、龍56師団は主力をもって3月10日を目途としてラシオを確保すべし、と戦史叢書に書かれている。その後の詳細な日時や命令は判明しないが、師団は我が歩146聯隊の主力を「シボウ」に転進させ、師団主力の同地付近に後退する場合に備えて、持久を準備すべしと記載されている。当時は以上のような師団の動きは全く分からなかった。

シボウで想い出されるのは、私の隷下である第8中隊に転出命令が下達されたことである。戦史叢書で判明したことだが、歩113聯隊長の松井大佐が少将に進級し、ラングーン（現ヤンゴン）防衛を主任務とする独立混成第105旅団編成のため、藁をも掴みたい戦況にあったに拘わらず、師団の各歩兵大隊から1ヶ中隊を引き抜いたのであった。

『編成表を見ると、旅団と称しても独立歩兵大隊（2ヶ中隊編成）3個、野砲6門の砲兵隊が主力で、戦力なき警備部隊に過ぎない。結局は編成できずに遊軍を作ったのである』

果卵の危機に瀕して一兵でも欲しい第一線部隊の実状も理解せず、名称だけの混成旅団を描いて満足する方面軍の幕僚たちは、白昼、夢を見るに耽っているようにしか思われず、我々は血が出るほど唇を噛みしめて悔しがったのであった。

絶対服従の精神のもとに憂国の念に燃えていた若者は、転出者も残った者も有無を云わず犠牲を強いられ、実戦場の様相を知らない方面軍の鈍物たちは、将棋の駒を動かす機関に成り下がっていた感じがしていた。

『英国のチャーチルは第一次世界大戦で、戦争の質が変わったと述べている。これまでの精神主義の騎士道としての戦いでなくなり、机に坐っている一握りの幕僚に命じられるままでは、兵士たちは悲惨を強いられる、と述べている。実際にその後の戦鬪は、そのような形になっている。素晴らしい先見の明である』

3月中旬頃にシボウに後退した我が大隊に対する命令は、ラシオ方面から進撃中の敵をシボウ東方地区で阻止し、併せてナムツ方面から退却中の歩兵113聯隊の側面を援護すべし、であった。（前頁地図参照）

シボウの戦鬪の詳細な記事は、拙著「両忘」に記してあるから割愛する。しかしシボウの戦鬪は、怨み骨髓に徹したナンパッカの恨みを晴らした快勝で、溜飲を下げた想い出は忘れられない。

マングレー～シボウ～ラシオに通じる鉄道橋上を追撃する敵部隊に対し、河を挟んで待ち構える我が大隊は、2方向から不意急襲射撃を浴びせかけ、団子挿しにして大戦果を上げたのであった。ここで特記すべきはその時、待望だった三色刷の立派な地図を敵の遺棄死体から発見し、爾後の戦鬪に大いに役立ったのである。

シボウ戦で戦果を上げたものの、遮断し続けていたビルマ・ルートを解放

してシャン高原のライカ道を南に下がった。すると先行していた歩113聯隊の退路上に、敵の部隊が浸透して激戦を展開していた。ナンパッカの二の舞を踏むのではないかと、進んで大須賀聯隊長に協力を申し入れたが、命によって北側の山間道を迂回して南下し、死山血河の激突がさけられた。

一方、大須賀聯隊長は山間の迂回路は狭く、15糎榴弾砲の牽引は不可能のため砲を破壊して後退した。このことによって数百名の尊い生命が救われたのだが、後刻、川道師団参謀長は聯隊長を激怒したらしい。

この参謀長は工兵科出身で歩兵のことは十分に理解できず、愚かと云わなければならぬ。砲弾の補給も全くない鉄の塊と、兵士の命とどちらが大切なのだろうか。人命軽視も甚だしいと云わなければならぬ。

このような戦闘経過でラシオ〜シイポ間の断作戦は終わりを告げた。1月早々、赴任以来の波瀾万丈だった断作戦を回顧すると、天日までも覆い隠すような砲爆撃や戦車攻撃の弾煙に包まれ、将に阿鼻叫喚の中で、幽明境を異にした部下の骨を拾えなかったことが、残念至極であり、心の中で慟哭していた。

そしてまた、この地獄絵さながらの敵弾飛来の戦場では、お互いに戦友のいかなる哀願も、いかなる悲惨な場合も助け合うことはままならず、残酷だが冷然と見捨てなければならなかった。この心中を言い表す言葉も知らず、戦友の靈魂は天外に飛び散ったのである。戦後半世紀を過ぎた今でも、私は我が体内から沸き上がる悲しみと憤りに、搔きたれられることがある。

作戦指導、戦闘指導というのは、如何にして歩兵を上手に使いこなせるかが根本で、実戦を経験しなければ真の指揮の要諦は会得できない。彼の参謀長は慰安婦を連れて歩くような品性下劣な人物であるから、部下将兵の信頼は地に落ちていたと云う。

我がビルマの戦闘は国力の限界を大きく越えた戦闘であったが、断作戦の終わりに当たり、日本軍最強の部隊だと自他ともに許していた龍兵団は、さながら地獄を見たように死力を尽くし、逆境の中で良く戦ったことを永く後世に伝えたいものである。

符号	記号	説明
HA	□	方面軍司令部
A	○	軍司令部
D	△	師団司令部
B	☆	旅団司令部 (MBs……独立混成旅団)
iR	□	歩兵聯隊本部
ib	○	歩兵大隊本部 (bs……独立大隊)
	△	情報所
So	△	搜索聯隊本部
A	水	野砲兵
BA	水	山砲兵
P	工	工兵

ビルマの概要

関西空港を18:00に離陸して、6時間後の22:15(現地時間)にラングーンに到着した。ビルマの土を踏むことは20年振りである。昭和19年の秋の決戦出陣のときには、当時の戦況から死を覚悟していたが、死地に赴任することが気付かれないように、老母(当時63才)に別れを告げたことが、此の年になった今でも心に刻まれて忘れられない。

ラングーン(現ヤンゴン)に到着した1月7日の夜は、シュエダゴンパゴダの東側にあるエクオトリアル・ホテル(新設・外資系)に宿泊した。翌日からのビルマ各地の紀行文の前に、先ず簡単なビルマの歴史の概要を記す。

ビルマの国土は、その第1はシャン州を中心とした東部の古生代、第2は西部のアラカン山脈の中生代、そして第3はイラワジ河や諸河川の流域平野から成る新生代である。

『ピュー族』

ビルマ中央部を流れるイラワジ河流域には、8世紀頃までビルマ族はまだ姿を現しておらず、代わってそこにはチベット・ビルマ系の言語を話す「ピュー族」が、幾つかの小さな国家を形作っていた。

ピュー族は各地に広く分布して暮らしていた痕跡があり、ピュー語で書かれた金板や仏像、ヒンズー神像などが多数発見されている。ピュー族は中国には「驃」という名で知られている。【漢和辞典では驃は馬の速く走るさま、或いは驍勇(ツヨク)】

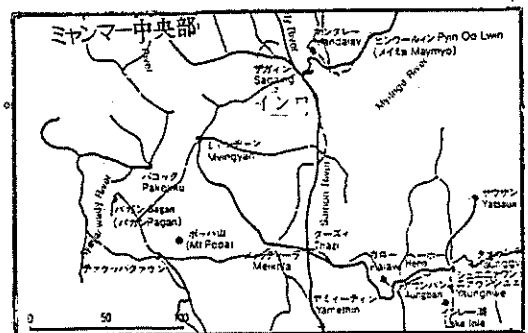
ピュー族は煉瓦で城壁を築き、その外側に濠をめぐらせた防衛的な構造の集落に棲み、水田耕作を行っていた。彼等は文字を使い、仏教やヒンズー教を信仰し、死者を荼毘にするなど高度な文化を持っていた。しかし9世紀の中頃、今の雲南省にあった南詔王国(大理・昆明の2盆地を中心に成立したチベット・ビルマ族の王国)の攻撃を受けて滅亡した。

『ビルマ族によるパガンの建国』(1044~1287)

南詔王国によってピュー族が滅ぼされたイラワジ河の流域に、9世紀の中頃に進出してきたのがビルマ族である。

彼等はイラワジ河の低湿地帯に定着し、騎馬民族から農耕民族に变身し、周辺の異民族を征服して領土を拡張した。こうして築かれたのがビルマ最初の統一国家「パガン」である。

(右図の左側中央部がパガン)



そのパガン王国の基礎を作ったのが「アノーヤター王」であった。象軍団を活用して周辺諸国を次々と征服したアノーヤターは、1057年にモン族（ペグー～モールメンー帯に居住）の都「タトン」を攻撃して、多数の捕虜をパガンに連れて帰った。

ビルマ族はモン族との接触によって文字や仏教を受容した。現在でもパガンの遺跡には2000を越える仏塔（パゴダ）や寺院が残っている。又、現在でもモン族がビルマ137の民族の中で最優秀民族だとされている。

『シャン系王朝の出現』

仏塔寺院の建立には莫大な費用がかかり、その上、完成した仏塔には多数の奴隷や土地が寄進された。その寄進された土地は免税地となって王権の支配外に置かれた。そのために仏塔伽藍の建立が続き、免税地が増えれば増えるほど王国の財政が圧迫された。

こうして13世紀の後半にはパガン王国の国力は疲弊し、王国財政の空洞化が進行した。それと平衡して外からの圧力が加わったが、それはパガンに対する「元」の隷属要求であった。

これを拒否したパガンは1277年から87年にかけて4度の征討を蒙り、漸く隷属を受け入れて王統の存続が認められた。しかし実験はシャン族の手に移っていった。

シャン族は東部のシャン高原からイラワジ河に進出してきた後続民族で、最初はパガンの支配下にあったが、1299年に名目だけのパガン王統を廃絶させた後、1312年に「ビンヤ」、15年に「サガイン」を築城した。

この二つの王権は同じシャン族のマオ・シャンに滅ぼされ、1364年に「インワ」に統合されたものの、北方のマオ・シャンやモ・ニン・シャンの挑戦に絶えずさらされた。

こうしたシャン系部族相互間の争いは、雲南からビルマを経てベンガルへと抜ける陸路の開拓に関心を持つ、明国の策動と無縁ではなかった。

『タウングー王朝による国土の再統一』1551～1752

旧名は「トングー」である。

パガンの崩壊と、それに続くシャン族王朝の出現によって南に逃れたビルマ族が、再び勢力を盛り返してきたのは16世紀に入ってからである。それは城塞がシットン河上流のタウングーに構築されたことから、タウングー王朝と呼ばれる。そしてヨーロッパから導入した火器と、ポルトガル人傭兵とを活用することによって、ビルマの政治的統一を達成した。

1556年には現在のタイのチェンマイ、64年と19年にはアユタヤ、74年には現在のラオスのビエンチャンというように、タイやラオスの諸王国まで征服した。しかしタウングー王朝には中央集権的政治体制が欠けており、国内では血統を地方大守に任命したものの、占領地では現地の旧支配者を再任する間接統治方式を採用した。

その結果しばしば謀反の危機にさらされ、1584年にはアユタヤの離反を招いた。国内でも各地の太守たちが独立を宣言して群雄割拠の状態となった。

こうした混乱は17世紀の初めに収拾され、ビルマの「インワ」(マンダレー西南)に覇権が確立されたものの、北方からマニプール族、南方からモン族に挟撃されて1752年に滅亡した。(ここは観光した)

『最後のビルマ王朝コンバウン』

(1752~1885(マンダレー王朝とも称す))

上ビルマのインワ王朝末代の王チャータバデはモン族軍の捕虜として下ビルマへ連行された。しかしイラワジ河西岸の村長の「アラウンバヤー」は、モン族からの服従要求を拒否し、近隣60ヶ村のビルマ人住民を集めてモン族軍に対抗した。

「アラウンバヤー」が指揮するビルマ軍は54年インワを占領、翌55年にはモン軍の拠点プローム(イラワジ河中ほど)、ダゴン(ラングーン)を陥落させ、56年には難攻不落といわれたシリアム(ラングーンの南方)を、そして57年には遂にモン族の都「ペゲー」(現パゴ)を占領して全ビルマの平定に成功した。(ここも観光した)

アラウンバヤーによって創建されたビルマ王朝(コンバウン王朝という)は一種の征服王朝で、1758年から59年にかけてはマニプール(インド領)に遠征して征服し、60年にはアユタヤ攻撃に向かった。アユタヤは67年に陥落、王宮は焼き払われ、住民たちは捕虜としてビルマに連行された。継いで785年には南西ビルマの独立国「アラカン」も征服されてしまった。

そして首都を「アマラプラ」(観光で僧院を見学したマンダレー西南)からマンダレーへ移した。

ビルマの拡張主義は19世紀に入ると、新たな敵に遭遇した。今度の相手はこれまでの土着勢力とは異なり、新式の武器を持ったイギリスという巨大な勢力であった。

結局、ビルマは1826年、1852年、1885年と3回にわたるイギリスとの戦争の結果、1886年に「イギリスの植民地」となった。

ビルマの独立

当初、英領インドの一省としてスタートしたビルマは、1937年4月にインドから切り離されたビルマ総督に支配される植民地となった。

1941年の太平洋戦争の勃発に伴い、ビルマも戦火に巻き込まれた。3年間にわたる日本の軍政を経て、1945年再び英領植民地に戻ったビルマはイギリスを相手に独立交渉を行い、1948年1月4日遂に連邦共和国と

して独立した。

このビルマの独立は、同時に内乱の幕開けでもあった。独立運動の担い手であった反ファシスト人民自由連盟が内部抗争から分裂し、非主流派の共産党が武装闘争に転じたのである。一方ビルマ独立と平行してカレン国の建設を主張したカレン派は、要求が叶えられなかったことから武装蜂起した。

こうした混乱は1950年頃には漸く收拾されたものの、50年後半には与党の反ファシスト人民自由連盟が、またもや内部抗争から分裂を引き起こした。

今度の分裂は重農主義者の首相ウーヌと、工業開発論者の副首相ウー・バスエ、ウー・チョニェインとの対立に起因するものであったが、抗争が激化したため、1958年にネー・ウィン将軍を首班とした暫定政権が生まれた。

『ネー・ウィン政権とビルマ式社会主義から現在』

暫定政権下の60年に実施された総選挙の結果、ウー・ヌ派が圧勝してウー・ヌ内閣が登場したが、少数民族から突きつけられた自治権拡大要求が引き金となり、62年3月に参謀総長ネー・ウィンがクーデターを決行し、政権を掌握した。

大統領、首相、国会議長ら多数の政治家が逮捕され、ネー・ウィン将軍を議長とし、17名の高級将校で構成される革命評議会が、立法府の役割を果たすことになった。

革命政府は政党政治を否定し、生産資本の国有化、社会主義経済体制の確立を目指す、ビルマ式社会主義を国造りの基本方針として打ち出した。

63年から64年にかけて流通機構が国有化され、68年には製造業が国有化され、64年には既成の政党はすべて解散された。

革命政権が発足後12年たった1974年1月、人民議会の選挙が行われた。これは、その前年の12月に実施された新憲法草案への信任投票が、90%以上もの高い指示を得て採択されたことによる。74年3月、革命評議会は解散され、12年間にわたって続いた軍政は幕を閉じた。

その後ネー・ウィンは政治の表舞台から退き、大統領にサンユ、首相にマウンマンカが就任した。しかしビルマ式社会主義路線は、期待されたような成果をもたらすようには至っておらず、経済の停滞状態が続いている。

またシャン州東部には阿片の取引に従事するシャン系武装組織、テナセリム地方（モールメンからマレー半島にかけての地方）からカレン州にかけてのタイ国境寄りの山地には、ビルマから分離独立を目指すカレン族の武装組織が活動しており、治安は安定しているとは云えなかった。

現在のビルマの政治体制は、軍政当時の性格を基本的に継承したものである。このような政治体制に対して、その打倒あるいは武力による反対闘争を展開している反政府組織には、独立以来、武装闘争を続けているビルマ共産

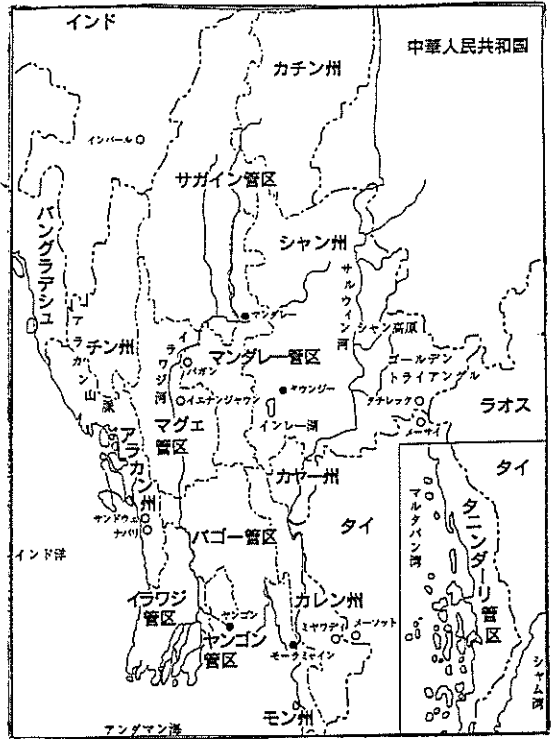
党と、現在の国家体制からの離脱を志向する少数民族の組織とがある。

1988年8月、学生・市民等が大規模なデモを起こし、アウン・サン・スーチー女史が政治活動を始め、民主化、暫定政権の樹立の要求が高まった。

すると1988年9月、国軍はクーデターを起こして全権を掌握し、1989年7月、スーチー女史は自宅に軟禁された。

1990年5月、総選挙を実施して国民民主連盟が圧勝したが、軍事情権は政権を委譲せず、国民民主連盟への弾圧を強化した。

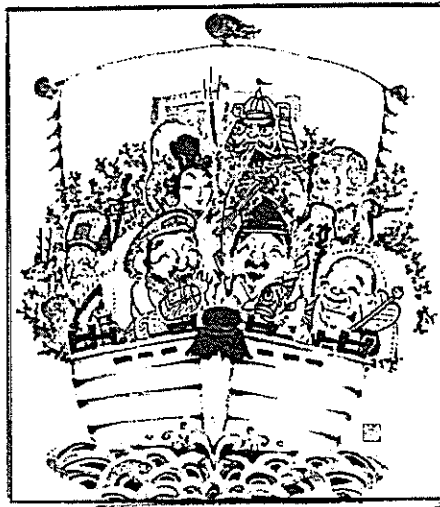
このころから少数民族との交渉が進み、1995年7月にはスーチー女史の自宅軟禁が解放され、1997年7月、ASEANに加盟した。



(右はビルマの州と管区の地図で少数民族の分布がわかる)

ビルマ国軍は現在の国家体制の維持のため、反政府組織に厳しく対決しているが、兵力は約12万の陸軍と6000の海軍、7000の空軍の三軍から成っている。主力は陸軍で9管区、6ヶ師団で編成されている。

国の総人口は4500万人だが、少数民族の人口は明瞭に掌握されていない。



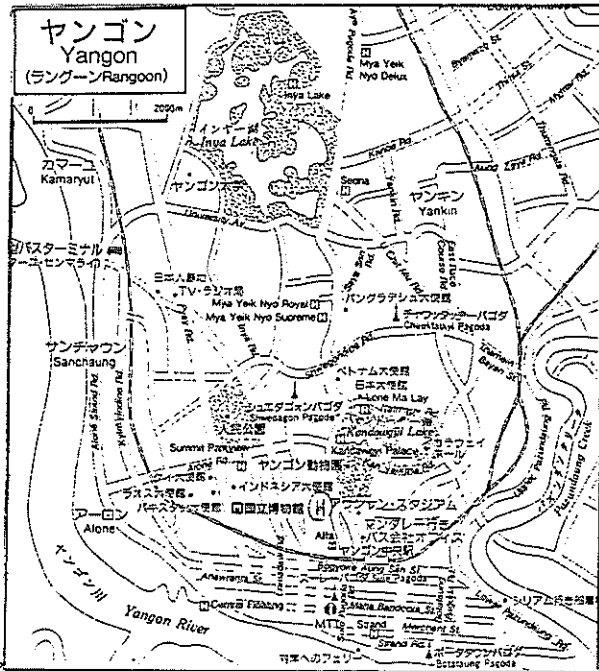
ラングーン（ヤンゴン）の概要

ラングーンはフライン川（ラングーン川）とペグー川との合流点にあり、河口から34キロさかのぼった地点にある。人口は約400万人である。

市街地北部のティンゴウタヤの丘の上に高さ約100呎のシェダゴンパゴダがあり、古くから聖地（ダゴン d a g o n）として知られていた。

このパゴダの伝説によれば、モン族の商人タプッサ兄弟が釈迦からもらった聖髪を、過去に三仏の遺品があったこの丘に安置したのが起源とされている。

最初は高さ数呎の小塔であったがモン、ビルマ両民族の王たちが増築を重ねた結果、現在の高さに成ったと伝えられている。



聖地としてのダゴン（地名）は18世紀の中ごろ、モン族と戦ってこの地を制した、ビルマ族のアラウンパヤー王によつて、新しい城塞に改造された。王は敵の一掃を願って城塞をラングーン（戦いの終わりの意）と命名した。

ビルマ各地がまだモン族の手中にあった当時、ラングーンは専ら軍事基地として機能していた。東側500呎、西側200呎、東西幅約1¹/₂の不等辺四角形をした城塞の周囲には、チークの丸太を打ち込み、その上に銃眼を備えた高さ6呎の頑丈な防御柵があり、その外側には沼や湿地が広がっていた。人口は18世紀末で約3万であったと記録されている。

19世紀に入るとラングーンは港湾としての価値が加わり、ビルマ王国の輸出入の大半はラングーン港を通して行われた。1824年、52年、85年の3度に及ぶビルマ戦争の際、開戦と同時にイギリス軍がラングーンを占領したのは、港湾都市としての重要性によるものであった。

第2次ビルマ戦争後、ラングーンはイギリス領ビルマの中心として再建され、戦火で破壊された市街地は、綿密な設計のもとに縦横整然とした町並みに整備された。

ラングーンの重要性は20世紀に入ってますます高まり、人口も1931年には40万人にまで増加した。48年にビルマが独立すると首都としての

政治、経済、産業、貿易、教育、文化の一大中心地となった。

植民地以降、ヤンゴンはラングーンと呼ばれてきたが、1989年に国の正式名称がビルマ連邦からミャンマー連邦に変更されたのに伴い、ラングーンも旧称のヤンゴンに改められた。但しビルマ語の国語では、ザーとヤンゴンと呼ばれていた。

ラングーン市内観光

関西空港を1月7日18:00に飛び立って予定通り22:30にミンガラドン空港に降り立ち、20年振りにビルマの地を踏んだ。しかし空港の煌々としたライトが眼にしむだけで、何も見えない深夜では一向に回想を蘇らす感慨が湧いてこない。しかし戦友の眠る地の果てだと思つと、少しずつ胸の鼓動が高鳴ってきた。

送迎用の日本製の中古バスに乗車して、市内に向かって南下すること約15分もすると、懐かしく光り輝くシュエダゴンパゴダを右に見ながら、新築のエクアトリアル・ホテルに到着した。

習慣になっているように早速、外資系ホテルのフロントで地図をもらって位置を確認し、部屋に入って窓越しに暗闇の外界を眺めながら、五感全体でビルマの空気を楽しんでいると、時の経過も忘れて就寝は1月8日の午前1時過ぎであった。

生活習慣は怖ろしいもので、我が家に居るように早朝の5時に眼を覚ました。しかし熱帯のラングーンでも矢張り1月の冬の真っ最中では、シャツ1枚では肌寒い朝であった。

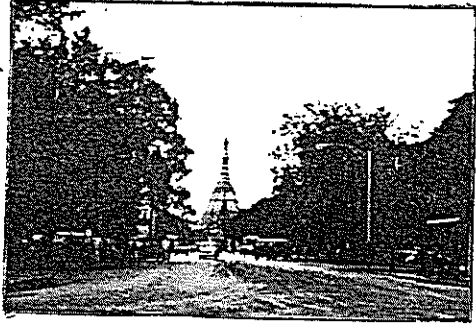
市内観光に発つて先ず最初に驚いたことは、市内全般にわたり自動車が氾濫していることであった。タイのバンコクに引けを取らない車の洪水は、凡て日本製の中古自動車である。日本での姿をそのまま残し、初乗り運賃300円と書いたタクシー、〇〇運輸と車体に書いたトラック、トラックの荷台を改造したトラック・バス、小型タクシーに変造した軽自動車など、どれ一つとっても日本では車検が通らない代物ばかりである。

中古車で質は悪いが、中国の北京や上海よりも遥かに車の数は多く、国連の経済制裁を跳ね返している景観である。ビルマと目に見えない糸で繋がっている我々に、頼母しい感じを与えていた。

ラングーンは戦時中にビルマ方面軍司令部付で赴任した時、幕僚見習いを兼ねて約20日間ばかり滞在した経験があり、その上、20年前にも訪問しているから、私にとっては特別に観光するところはなく、どんなに変化し発展しているかだけの問題であった。

『シュエダゴンパゴダ』

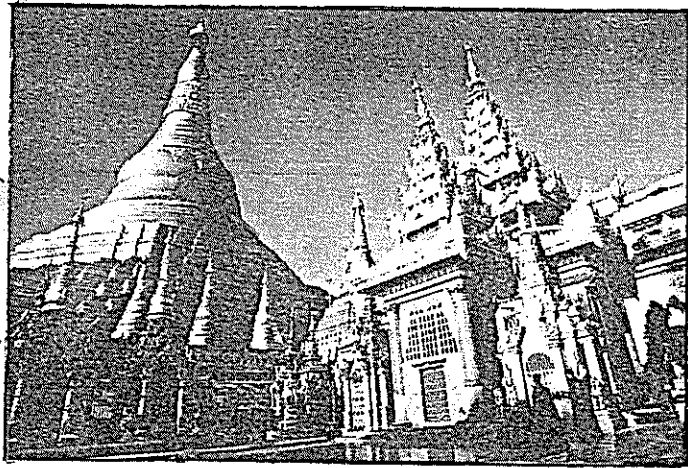
ラングーンを訪れて先ず最初に足を運ぶところは、「聖なる黄金の塔」のシュエダゴンパゴダである。乗車したバスもパゴダ前の大通りに向かって走ると、今日も大勢の善男善女が参拝に詣でており、魅せられる聖なる力は強烈すぎるほど人を引きつけていた。



見上げる壮大な黄金の建造物パゴダは、朝の陽光を受けて鈍い輝きを発していた。この国では権力者といえども、仏教の教えと僧侶は無視することは出来ず、歴史上、数ある政治変動の場面でも、このパゴダは重要な舞台として登場している。（上はパゴダ前の大通り）

今までは南門から108の長い階段を登りながら、参道の両側に櫛比して並んでいた、仏像・仏具・お花・金箔などの土産品店を覗く楽しみもあった。しかし現在はその西側にエスカレーターが設備され、印象の深い昔の味わいは失われていた。足の悪い私には好都合な設備も多分、多くの参拝者を捌ききれないためであろう。

シュエダゴンパゴダの歴史の概要は、ビルマの歴史の項に記したが、今から2500年以上も前、タボックとバックリという兄弟の商人がインドで仏陀と出会い、8本の聖髪をもらい受けて紀元前585年にこの地に奉納したのが起源だとされている。



それ以降、度重なる拡張工事の結果、ついに大小合わせて60余りの塔に囲まれた大パゴダとなった。

何度も地震に耐えてきた現在のパゴダの原型は、15世紀中期に時の権力者であった、ペギー（現パギー）の女王シン・ソービューによって完成されたものである。

ラングーンがダゴンと呼ばれていた頃、やがて東西通商の町として栄え、1755年にアラウンバヤー王に破壊され、後にラングーンとして復活したが、シュエダゴンパゴダはダゴンの丘の上から、このラングーンの幾多の歴史をずーと見守っていたのである。

（右上の写真は大パゴダと釈迦の聖髪を安置したナウンダワズィ・パゴダ）

今回のシュエダゴンパゴダの参拝で、歴史を読み返して十分な見学が出来たところは、伝説で釈迦の聖髪が安置してあるナウンダワズィ・パゴダや1841年にタラワディ王が寄贈したマハ・ティッサダの鐘、第1次イギリス戦争でイギリス軍にラングーン河に捨てられたというマハ・ガンダの鐘であった。

又、今回初めて知ったことだが、パゴダを参拝する上で重要なことは自分の誕生日で、更に最重要なことは誕生日の「曜日」であった。この曜日によって、その人の運命が決まると信じられている。

各曜日の神様を挙げると、月曜日は虎。火曜日はライオン。水曜日は午前と午後に分かれ、午前は牙のある象、午後は牙のない象。木曜日は鼠。金曜日はモグラ。土曜日は蛇。日曜日は鳥で、各神様によってその人の性格付けがされる。だから人々は何処のパゴダに行っても、自分の曜日の神様へのお参りは欠かさない。ビルマでは釈迦の下に神様が存在し、その下に人間がいるという考え方である。

ビルマ人にとってなくてはならない第一は、仏教の教えを説いた釈迦の分身が宿るパゴダである。国内に数え切れないほどパゴダが建立されているが、その中で最も人々に愛され、また信仰の中心になっているのがシュエダゴンパゴダである。

シュエダゴンパゴダはビルマの象徴とも云われ、国の内外から訪れる仏教徒や観光客で賑賑を極めていますが、参拝に来る人の中には若い男女が多いことも驚きであった。ガイドの説明によると、ビルマでは男女が一緒に遊びに行くところが少なく、唯一パゴダだけが堂々と二人で行ける場所である、と。

私もこれでシュエダゴンパゴダを訪れること3回に及ぶが、今回ほど詳しく話を聞いたことはなく、慶びを感じている。

『ビルマの仏教は正式には「南方上座部仏教」と呼ばれるもので、日本に伝わった大乘仏教とは少々異なり、ビルマ、タイ、カンボジア、スリランカが上座部仏教国である。釈尊亡きあと100年ほどすると、仏教教団は幾つかの部派に分裂した。その中で最も保守的であった派を上座部と言い、上座部仏教は「現世での幸せを求める教え」で、現世での信仰がそのまま幸せにつながる、と考えられている』

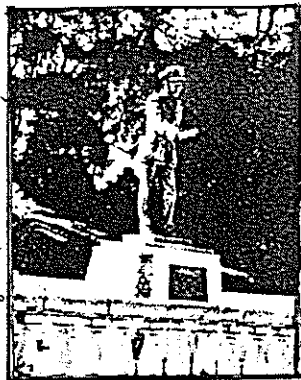
『独立の父・アウン・サン将軍と廟』

長い間の鎖国政策や社会主義体制の影響で観光も発展しなかったが、現在では観光にも力点が置かれている証拠として、交通事情が大いに発展して大変化している。中古車ながら観光バスにも冷房が入り、以前のような旧型のバスは姿を消し、快適な乗り心地の良い観光バスで市内を案内した。

シュエダゴンパゴダのすぐ北側にある静かな丘の上に、アウン・サン廟が見えていたが、残念ながら今回の旅では観光コースから除外されていた。幸い私は前回に訪れることが出来た。1983年10月9日、ビルマを訪問中だった韓国の全斗煥大統領一行が、ここで爆弾テロに遭遇してから、一般の立ち入りが禁止されてしまった。

アウン・サンは我々と同年輩の人物でビルマ独立の父と賞賛され、ビルマ戦線に参加した日本軍将兵では知らない者はないだろう。ビルマでは神の如き存在で全国各地に銅像が建ち、ソ連時代のレーニン、中国共産党主席の毛沢東以上のものがある。

イギリスの植民地として愚民化政策のもとでは、逆にビルマ人の民族主義、愛国心を育てることになった。そして20世紀の初めビルマの人々に影響を与えた二つの戦争があった。(右はアウンサン公園に立つ像)



最初は「ボーア戦争」(南ア戦争とも云う)で、ダイヤモンドと金鉱が発見されると、オランダ系のボーア人(オランダ人と現地人の混血)とイギリスとの間に戦争が始まった。大部隊を侵攻させたイギリスは、ボーア人の国土をイギリスの植民地としてしまった。(私も現地を訪れている)

他の一つの戦争は日露戦争であった。巨大な軍事力を擁する帝政ロシアに東洋の一小国・日本が勝利した。このニュースは同じアジア民族であるビルマ国民に、深い感銘を与えたのであった。ベトナムでも同じで、日本の勝利は「白人優位の神話」を打ち破ったと、喝采を送ってきたのである。

ビルマでは日露戦争の記憶は、現在でも鮮明に人々の間に語り伝えられている。20年前に訪れた際には各地の飛行場で、日露戦争時の日本に就いて我々に話しかけ、尋ねてきたものである。

当時のイギリスは日英同盟を結んでいた関係で、日本の勝利を好意的かつ詳細にビルマに伝えたのであった。イギリスにとっては皮肉な結果となり、血の気の多いビルマの若者たちは、アジアの強国日本、旭日昇天の日本に憧れ始めたのである。

日中戦争が起こって中国の蒋介石政権は奥地の重慶に逃れながらも、インドシナ、ビルマ、ソ連などの援蒋ルートを経由して、軍事援助物資の補給を受け、抗日戦争を継続していた。

中でも昭和14年1月に開通した「ビルマ・ルート」(緬甸公路)は、ラングーンを起点にマンダレー、ラシオを経由し、雲南の山岳地帯を越えて昆明に達する自動車道路で、数ある援蒋ルートの中でも最も輸送量が多く、そのために膠着状態をつづける日中戦争の、早期解決が困難となっていた。

日本にとってはビルマ・ルートの遮断が焦眉の急となっていた。そこで、

対ビルマ謀略工作を開始した日本と、外国の武器や資金の援助を切望していたビルマの民族主義者との提携が、成立する下地ができあがった。

昭和15年6月、参謀本部の命により鈴木敬司大佐(30期)は、読売新聞特派員と名乗ってラングーン入りをした。またアジア民衆との連帯の志を強く胸に抱いた日本人青年3名もビルマに向かった。

鈴木大佐らはビルマ独立運動の闘士の集まりである「タキン党」と接触を続け、アウン・サン、ラミヤインの両名が外国の援助獲得を目的に、アモイ(福建省)にいることを知った。当初、アウン・サンらタキン党員の多くは社会主義者であったことから、ファシスト・ドイツ、イタリアの同盟国の日本を警戒し、中国の援助を期待していた。

しかし昭和15年11月中旬、アウン・サンたちは混血の台湾人として羽田に到着し、翌年、海南島の三亜の海軍基地であった「農業訓練」を目的とした特別訓練所に、タキン党の30名は順次に送り込まれ、軍事訓練が行われたのである。これがビルマ独立の「30人志士」と呼ばれ、代表者はアウン・サンであった。

海南島の三亜訓練所は、この年の10月に閉鎖され、「30人志士」は台湾の玉里に移動し、その後、大東亜戦争開戦とともにバンコクに集結した。(私も足跡を残した海南島は隠れる場所が多く、秘密保持には最適である)

1942年、アウン・サンを頭にした30人志士は、モールメン付近から祖国に侵入し、各地で活発な独立運動を展開した。そして3月8日、30人志士が中心になって編成したビルマ独立義勇軍と日本軍は、ラングーンを占領した。

日本軍の指揮下にあったとはいえ、編成、装備、教育のすべてが整えられたビルマ正規軍は、兵力、装備両面にわたって充実した軍隊に変貌を遂げていた。



創設当初、歩兵3ヶ大隊、兵員わずかに2000名のスタートだったが、1943年4月には新たに3ヶ大隊が追加され、最終的には7ヶ大隊1万5000人にまで増加した。

(右上の写真はアウン・サン将軍の写真が入った5チャット紙幣)

ラングーンの北方(現在のラングーン空港の所在地)のミンガラドンには、「幹部候補生隊」「下士官教育隊」「幼年学校」が設けられ、後日、幹部候補生隊は「ビルマ国軍士官学校」と校名を改めている。そしてビルマ国軍士官学校の成績優秀者は、日本の陸軍士官学校の留学生として派遣された。

1945年3月27日、アウン・サン指揮下のビルマ国軍1万5000人は、「人民独立軍」と改名して全土で一斉に日本軍に「反旗」を翻した。

ミンガラドンのビルマ国軍士官学校のビルマ人教官も生徒も姿を消していた。インパール作戦で失敗した日本軍には勝ち目はなく、植民地の宗主国であったイギリスが、必ずビルマの地に復帰してくると判断したアウン・サンは、その復帰前に対日蜂起を断行して実績をつくり、イギリスとの独立交渉の有利な材料にしようとする魂胆であった。

1947年7月19日、粘り強い独立交渉をすすめていたアウン・サンは、閣議の最中、軽機関銃で武装した政敵4人のテロリストによって、6名の同志とともに一瞬にして暗殺されてしまった。

ビルマではこの日を「殉難者の日」と呼んで記念日とし、毎年この日にはシュエダゴンパゴダと、それに隣接する殉難者廟（アウン・サン廟）で、政府主催の追悼式典が行われている。

悲劇的な死を遂げたアウン・サンは、32才の若さのビルマ国軍少佐であり、末娘のアウン・サン・スー・チー女史はわずか1才と1ヶ月であった。将軍と呼称するのは尊称である。

1948年1月4日、独立国「ビルマ連邦」が誕生した。しかしその喜びも束の間で、ビルマは長い混乱と内戦の時代を迎えた。

独立ビルマは少数民族と反乱軍という、宿命的な二つの問題を抱えて船出した。そのころ（1949～50）のビルマは首都ラングーンを除く国土の殆どは、各種の反乱軍に制圧されていた。

この時期に日本の陸軍士官学校留学生や、ミンガラドンにあったビルマ国軍士官学校出身者の力が必要になってきた。そこで先ずネーウィンが立ち上がった。彼はアウン・サン将軍に次ぐ30人志士の一人である。

1949年4月、当時のウー・ヌー政府は、国軍最高司令官ネーウィン将軍を副首相に任命して体制を整備すると共に、イギリス連邦諸国から軍事援助を得て反撃を開始した。そして軍制も英国式から日本式に変えていった。以下は割愛する。

1949年1月4日のビルマ連邦共和国独立の瞬間を目撃することなく、世を去ったアウン・サンを偲び御冥福を祈りたい。

『チャウッタッチー・パゴダ』

アウン・サン公園を通り抜けて1000ほど走行すると、1月とはいえ真夏の太陽を思わせる空間に、燦々と輝く新しいパゴダが聳えていた。これがチャウッタッチー・パゴダで、前回訪問の時には見学しなかった。

このパゴダは新しく建造されたもので、内部には有名なペグー（現パゴ）の寝釈迦よりも大きい仏像が横たわっていた。新しいせいかな歴史の重みというものが感じられず、大きさに圧倒されながら全長70ほど、高さ17ほどの仏像（ビルマで4番目）を眺めていた。しかし信仰のためとは云いながら、何故に貧しい国民が大きなものを造らねばならないのかと、疑問が生じてきた。

それだけ庶民の負担が大きく膨れ上がり生活が苦しくなるのは間違いない。

「寝釈迦」と「釈迦涅槃像」の差異は、寝釈迦は肘を曲げて頭を支えており、涅槃像は死んでいるから肘は立てられず、腕を横にしてその上に頭を乗せているのであった。

ペグーの寝釈迦と同様に足の裏には、いろいろな動物の絵が描かれていた。説明によると、これらの動物は釈迦の下にあることを意味しているが、果たして牛や馬や羊などの動物が仏を意識していたのであろうか。

ここチャウッタデー・パゴダには2000人もの僧侶が修行していたが、厳守しなければならない227種もの戒律の厳しさを、考えるだけでもぞーとする。そして不思議に思うのは、社会主義と仏教が矛盾なく同居しているということである。仏教社会主義とビルマ政府は呼んでいるが、仏教は凡ての上にあるから問題にならないようだ。

「南方上座部仏教」は戒律が厳しいことが特徴である。信者は次の5つの戒め（戒律）を守らなければならない。

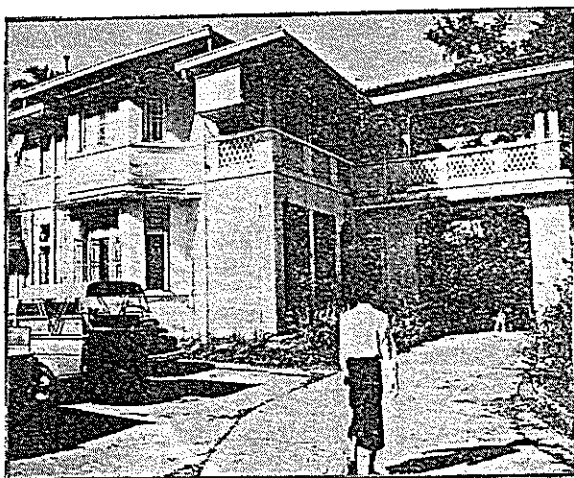
- ①殺さない ②盗まない ③嘘をつかない ④酒を飲まない
 - ⑤よこしまな姦淫（浮気）をしない
 - 男子は一生に一度は必ず頭を剃り、黄色い衣を着て寺の僧になり修行することになっている。修行を終えると一人前になったと認められる。
 - 20才を過ぎて出家した人は「比丘」（ビク）と呼ばれ、227の戒律を守る本職の僧侶となり、結婚も許されない。
- 比丘は梵語のB H I K I S Uの当て字。行乞、乞士しも称し、仏に参し法を乞い、施主に就いて食を乞う者、即ち僧。また女僧を比丘尼と云う。
（魏書 釈老志より）

『アウン・サン・スー・チー女史』（下はスー・チー女史邸宅）

アウン・サン廟を右に見て北に進んだ。朝日を照り返すロイヤル湖に浮かぶ、竜宮城のような水上レストラン「キロウェイ」が網膜に投影してくると、前回の豪華な夕食の光景が思い出される。

インヤ・レークを挟み、南側にノーベル平和賞のスー・チー女史の邸宅が建ち、北側にネーウインの住宅がある筈だと、眼を皿にして凝視していた。

湖畔の遊歩道には花を手にして



笑いながら歩いている、ビルマの若い女性で溢れていた。彼女らの身にまとったブラウスとロンジーの色柄は華やかで、鮮やかなブーゲンビリアが咲く中で彼女らの姿は一層際だち、今もまだ植民地色を残したこの国では、民族衣装がナショナリズムを強く主張しているように見えていた。

日本のジャーナリストはビルマのことになると、話は決まって軍事政権批判とスー・チーの問題になるようだ。しかしスー・チーは自宅軟禁を解除されたら、ビルマを出て夫や子供の待つイギリスに帰るべきで、留まるのであれば軟禁状態を続けるしか方法がない、と云うのがビルマの大半の意見だ。

彼女が出てきたらビルマは再び混乱に陥るだろう。決して軍政が好ましいとは思わないが、1948年の独立以来ずーと内戦が続いている。そして世界でも有数の貧乏国になってしまった。だからスー・チー女史が言う100%の民主化などは、望むべくもない、と云うのが現実のようである。

反政府少数民族との内戦が終わったばかりとは云え、まだ完全な武装解除になっていない。だからこそ、ビルマでは唯一の近代的に訓練された国軍が、果たしてきたことを受け止めなければならない。

今、ビルマが曲がりなりにも纏められるのは、軍事政権、国家法秩序回復評議会（SLORC）しかないと言う訳である。確かに現政権（SLORC）は社会主義イデオロギーを捨て、積極的に市場経済化を打ち出し、世界に門戸を開いた。一方では独立以来の懸案である少数民族問題も、15組織との間に和平協定が成立した。（残るのはカレン族のみ）

【アウン・サン・スー・チーという意味は、「希有な勝利の輝ける集合」だと大学時代の友人に話している。「アウン」は勝利、「スー」は集合ないし包容、「チー」は清潔を意味していると。参考まで】

それでも現階段では、長年の夢であった国民統合のスタートに立ったばかりで、国内の政治的混乱が再現されれば、再びウー・ヌー時代に回帰するのではないだろうか。

日本のここ数十年間のビルマに関する報道は、スー・チー女史を悲劇のヒロインに仕立て上げ、返す刀で軍事政権を批判するというパターンになっていた。だから今回の旅行で、これを確かめたいと思っていたのである。

内戦などの不安定要素を抱え、しかも民主主義の土壌のない国が貧しい時は、発展途上の諸国の例のように、独裁も止むを得ない面もある。独裁政権であろうと、何であろうと兎に角、開発して国を豊かにしなければならない。（今回は時間は少ないが、見たところ長足の進歩発展を遂げていた）

しかしスー・チー女史は不満のようで、開発、発展の前に「完全な民主主義ありき」という訳である。そればかりか「民主主義が実施されるまでは、外国は如何なる援助も与えるべきでない」、という主義を打ち出している。女史の眼には首都ラングーンにさえ、下水道のない生活をしている人々がいることも、見えないうのである。

外国の援助なしに、ビルマはどのようにして民主主義を実現できる段階に、到達し得るといえるのだろうか。ビルマに今、欧米流の民主主義をそのまま持ち込むことを強要することは、如何に苛酷な要求ではないだろうか。

ビルマのASEAN加盟を嫌うスー・チー女史の強い要請と、欧米の圧力にも拘わらず、ジャカルタで開かれたASEAN外相会議で加盟が認められた。そしてここ数年、ASEAN諸国の投資が活発化している。これらの国の投資は、ホテルを建設して経営するというサービス業に集中し、道路、発電所の建設という産業基盤の整備に向けられることは殆どない。早期に現金を回収できる分野に偏っている。

観光客やビジネスマン向けに多くのホテルができるのは、国内に雇用機会を創出する効果があり好ましい傾向だが、そのために電力の不足が顕著になっている。これらの援助が出来る国は日本以外にはなく、我々のようにビルマで戦った者は、こりれを願って止まない。

日本のマスコミ報道で見聞する範囲では、想像できないことかも知れないが、スー・チー女史熱は確実に沈静化している。その最大の理由は、ビルマの経済が上向きになってきていることである、とガイドは説明していた。

(上の写真はスー・チー女史)

スー・チー女史の人気を分析すると、父アウン・サン将軍への郷愁が25%、女史の魅力が25%、その残りの50%は反軍感情だと述べる人もいる。多分そんなところだろうが、アウン・サンの娘というだけで国民は期待しているようである。

しかもその語り口、仕種はイギリス仕込みで、先進国の香りを振りまく美人である。反軍感情も無理はない。しかし先進国流の民主主義の即時導入が非現実的とすれば、国民の不満の解決は、権威主義的な政権の真摯な自己の改革努力からしか、生まれまいだろう。

ビルマ社会は未だ保守的で、外国人との結婚は必ずしも歓迎されない風潮がある。スー・チー女史がイギリス人と結ばれていることは、仏教対キリスト教などの問題もあり、圧倒的だったカリスマ性も次第に低下の傾向にあるようだ。

スー・チー女史の問題を記述したが、彼女の自宅の門は堅く閉ざされ、門前には歩哨が立ち、家の周囲には四六時中、兵士か警官が眼を光らせていて、門の前に立ち止まることさえ法度らしい。勿論、撮影も禁止で外部との接触は遮断されている。1月16日は一日中が自由行動だったから、ラングーンをタクシーを飛ばして駆け回ったが、女史の邸宅だけは運転手も寄りつかず、ノーベル平和賞が泣いていた。



『スーレー・パゴダと繁華街』

ロイヤル湖周辺の観光が終了すると、バスは期待に反してインヤー・レーク方面には北上せず、宿泊したエクアトリアル・ホテルの前を通過して懐かしい旧借行社や、アウン・サン将軍が暗殺されたイギリス風の建物を眺めながら、南へと下った。間もなく鉄道線路をまたぐ高架道を渡り、ラングーンの銀座街を西に進むと、繁華街の中央ロータリーに煌々と金色に輝くスーレー・パゴダが建っていた。

日本の大都市に少しも劣らないほど、自動車の大波が押し寄せ合い、その荒波の僅かな間隙を縫うようにして道路を渡り、スーレー・パゴダに漸く着いた。交通事故を心配するガイドは一行を急がせるため、私は往時の思い出を思い出す暇もなく、杖を頼りに懸命に寺院の中へと急いだ。

スーレー・パゴダの一隅に立ち止まりながら、パゴダの塔の上部に金箔を運ぶ、小さな吊り船に見惚れていた。自然に私の視線はパゴダを通して彼方に向くと、そこには聳え立つ独立記念碑や最高裁判所の建っている、マハーバンドゥーラ公園が見えていた。50数年前の青年将校時代に此の辺り一帯を闊歩した光景が、懐かしく脳裡に蘇ってきていた。

日月が流れて人は移り変わり、そのうえ、街路の様相もすっかり変貌し、今では都会らしく整然とした美しい街並みを呈していた。街道は車の氾濫と同様に人の波ももの凄く、国が発展した証拠として目に付く一つが、人口の増加であった。我々が日本で考えているほどビルマは未開な国ではなく、実に逞しい活力のある国となっていた。

繁華街のシンボルであるスーレー・パゴダは、ビルマでは高さ50位の小さい黄金の塔に過ぎないが、この光り輝くパゴダを目印に市街を散策すれば、絶対に迷子になることはない。

このパゴダを中心にした繁華街の地区は、イギリスの植民地時代の都市計画に基いて建設されたのであった。区画整理された東西南北の街路を散歩しながら、若きあの時代にはラングーン河まで歩き、カモメに餌をやった思い出まで脳裡に浮かんできた。

今回のビルマ紀行は中央部と東部が中心で、ラングーンの観光は主として10日後の16日の自由行動だけとなっている。そのためスーレー・パゴダ見学の後は、中央駅の西側に建つ「ボーチャー・アウン・サン・マーケット」に向かい、1時間あまりのショッピング時間となった。

20年前には中央駅の南隣り一帯に、ニッパ椰子で葺いた露天商人が居並ぶ「ボギューケ・マーケット」があったが、現在では近代化したアウン・サン・マーケットが建っていた。

マーケットを取り巻く何本もの道路は、買い物客の自動車で満杯状態であった。自動車の質は中古車だが、数の点では世界の大都市に引けを取らず、懐かしい中華街やインド人街もマーケットに続いていた。

遠く離れた場所に停車したバスから人出の波を掻き分け、活気が溢れたアウン・サン・マーケット内に辿り着くと、大勢の買い物客でごったがえし、道に迷うような賑わいであった。

一行は広いマーケットの中を目的があるのか、蜘蛛の子を撒き散らしたように雲隠れした。しかし膨大な面積の中で目的の品物を探すことは、並大抵ではない大仕事である。

世の中はうまくできたもので、ビルマ語の分からない我々を相手にした、上手な日本語を話す少年が要所要所にたむろして、絵葉書（2ドル）を買ってほしさに、目的の店まで案内してくれるのであった。それほど最近日本人の観光客が急増した証拠であろう。

私は「シャン・バック」と「ロンジー」を買いたいと探していると、幸いなことに、40才ぐらいで流暢な日本語を喋る店員が、何が欲しいのかと尋ねてきた。彼の店で旅行中に使用したいシャン・バック1個だけ買い求め、ロンジーを売る店に案内を依頼した。

ロンジーの店は目の前にあり、郷に入れば郷に従えとばかり、色や柄を選んでいると、奇麗な奥さんが反物を差し出してきた。一反の価格5ドルを支払うと早速、ミシンで両端をスカートのように縫い合わせ、主人は親切に私の腰にロンジーを巻き付けて、使用の方法を教えてくれるのであった。

発展の著しいマーケットは食料品以外は何でも揃い、数件の貴金属の店も並び、20年前とは天と地というか、雲泥の差である。独り日本だけが隆盛を極めたのではなく、アジアの最貧国のビルマも勢いよく栄えていた。

以上でラングーンの市内観光は終了し、午後は我が大隊のビルマの最終戦を展開した、ハイホーインレー湖〜タウンヂーに向かうことになった。

（下の写真はマーケットの左・シャンバック、右・ロンジーの店）



ヘイホ～インレー湖の旅

ラングーン市内の中華街を散策して、カンドーミン公園の中のレストランで昼食を摂り、ミンガラドンのラングーン空港に到着した。空港ターミナルに横付けになっていた空港内バスは、市内の自動車と同じく日本製の中古バスで、ボデーに「エオポート・リムジン」と書いてあり、日本の田舎空港と見間違ふほど日本色一色であった。

70人乗りのプロペラ機は尾翼の垂直尾翼には孔雀(クヅヤク)のマークを描いていた。この孔雀の絵は、アウン・サンら30人志士を始めとしたビルマ独立義勇軍が、意気揚々と祖国ビルマのモールメンに進撃した時、最初に掲げた旗のマークであった。

暑気炎熱期だったシャン高原の戦闘に想いを抱きながら搭乗すると、これから飛ぶヘイホ高地から、インレー湖畔の湿地帯を通過する一直線の街道、そしてシャン州の首都タウンゲー高地に至る1ヶ月半にわたる戦闘経過が、様々な形で走馬燈のように我が脳裡の中を走っていた。

15:30に飛翔した搭乗機は銀翼に陽光を浴びながら、流れが眼下に広がるシッタン河の真上を飛び続けた。



旧トング(現タウンゲー)の市街地だろうか、工場や石油タンクが網膜に映り、西側には緑の密林に囲まれたペグー山系、東側には鉄分が多いせいか褐色をしたシャン高原が拡がり、高地の隅々まで耕地が開拓されていた。(上はシッタン河の流れ)

やがてインレー湖の湖面が太陽光線を反射して白く輝き出すと、年老いてしまった私までも胸の鼓動が少しずつ高鳴ってきた。それは一般の人には感じられない戦闘体験者だけの尊い血の流れだった。

戦闘間は夜の湖上や湖畔の灯を眺めて、敵は舟艇攻撃を仕掛けてくるのではないかと神経を尖らし、炊煙の立ち上るのを見て、敵の大部隊の集結ではないかと心を痛めたことも、今となっては懐かしい思い出の歴史である。

ヘイホ飛行場の西側に現れた敵は、40～50両の戦車群と40～50門の砲兵を擁する1ヶ師団であった。これに対する我が方は私の指揮する1ヶ大隊に過ぎず、如何にして戦車と砲撃に対処するかが戦闘の要訣であった。

深謀術数を最大限に活用した我が方の戦術が功を奏し、敵を翻弄させて私の思いのままに用兵の妙を発揮し、悔いのない戦闘であったと思っている。

あの乾き切った荒れ放題のヘイホ空港の滑走路も、部隊を配置した周囲の台地も未だ生きていてくれた。しかし私はこのように杖が頼りで、老い耄れ

となってこの地に旅をしてきた。病気は人を弱くするのか、人は生き直すことが出来ないのだと、しばらく立ち止まって飛行場全般を眺めていた。

今が夢か、過去が夢か。やはり夢のように思われるのは今ではなく、半世紀以上も前の過去だったと気付くと、半分は呆けてしまっていた脳味噌に活を入れ、見直したのであった。

16:15に着陸して見れば、空港ターミナルは20年前とは見違えるほど立派に改築されていた。しかしバスはビルまで入れず、痛む脚を引きずりながら約100ほど歩かされ、矢張り田舎空港であった。

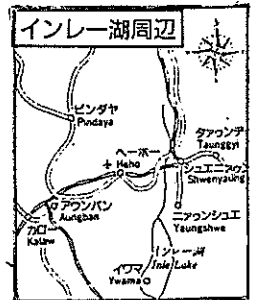


飛行場の東側に広がる高台は、我が部隊が警戒陣地を敷いていた高地で、当時の青々としていた陣地も乾期の今では赤茶げ、歴史の針を戻して見つめていた。(上の写真は飛行場東側の我が警戒陣地を敷いた高地)

よく見ると、我が大隊が占領していたヘイホ台地は、高地の天辺まで耕作され、その頂上には白色の大きなパゴダが2基も聳え立ち、タウンジー街道には町ができて、タクシーや自転車も走り、市場まで開かれていた。

前回の訪問時には何一つない草原だったと記憶しているから、シャン民族の勤労意欲のすばらしさに驚いていた。しかし水牛が道路上をゆっくりと歩き、2頭立の牛車が通る農村風景だけは、依然として残っていて懐かしい。

乗車したバスはヘイホ台地のタウンジー街道を東へと下った。戦闘した当時のヘヤピン・カーブや断崖溪谷は奇麗に整備され、台地斜面の樹木も乾期のために落葉して、透けて地肌が見えていた。今見る状況では、戦車の大军を擁する敵を欺騙し、痛打を浴びせることは出来なかったと、目を皿にして凝視し続けた。



こんなに長い下り坂があったのかと思うほど坂道が続き、漸くインレー湖の北側に広がる平坦な田園地帯にさしかかり、一直線に伸びる街道を東に進んだ。(上はヘイホ、インレー湖付近図)

この街道の両側に生えていた樹木の蔭に、兵を隠してゲリラ攻撃を仕掛け、或いは橋梁を爆破して戦車に随伴する歩兵を殲滅するなど、乾坤一擲の奇襲戦法で大敵を翻弄させ、大博打を打った古戦場を感無量に眺めて通過した。

高台に包まれたシャン高原の山峡の夕暮れは早く、辺りは既に宵闇が迫り、タウンジー台地の下にあるシュエニャウンの町を右折した時は、真っ黒な暗闇であった。

サトウキビ畑が連なった前方に、大きな白いパゴダの群がヘッドライトに照らし出されて来た。そこがインレー湖の観光基地となっている湖畔の町「ニャウンシュエ」で、大きな市街地が広がっていた。(右はパゴダが林立するニャウンシュエ)



前回訪れたニャウンシュエの町は小さな部落で、観光客の姿を見た記憶もない。しかし現在は観光客で賑賑を極めるほど町は発展し、我々一行は十数軒もあるホテルの中でも最高級の、「フービン・ホテル」（湖浜賓館）に宿泊することになった。全従業員が出迎えてくれ、設備よりも心からの歓迎に惚れ惚れしていると、夕食後は民族舞踊まで披露し、至れり尽くせりの熱烈歓迎の応接であった。

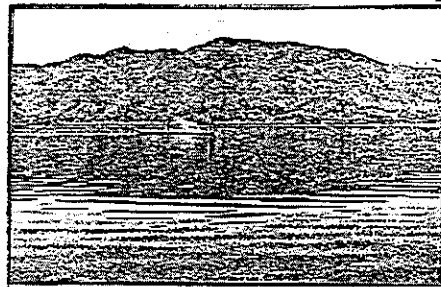
湖浜賓館は華僑経営のホテルらしく、室内には中国語の書籍も並んでいた。このような田舎だが、ただ不満といえば、風呂好きな日本人にはシャワーだけでは飽きたらず、この点は改良されるよう希望したい。

兵馬控徳の間のインレー湖は、ハイホヤタウンジーの台地から瞰下しただけであったが、20年前にも訪れているから今回は2回目で、これも何かの縁であり、人生は縁の繋ぎ合わせであると感じていた。

『インレー湖の概要』

インレー湖はシャン州に属し、住民はビルマ族は少なく、シャン族を始めとする山岳少数民族の多い土地である。そして中国に近いせいか中国人も多く、町の第一外国語は英語よりも中国語である。街並みもマンダレーやパガンとは雰囲気の違い、中国文化の影響が感じられるようだ。

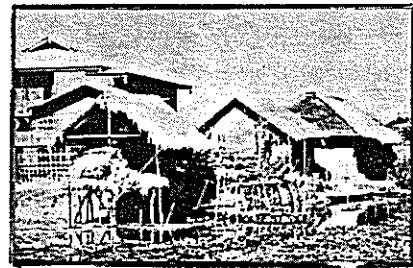
インレー湖は海拔870ほどのシャン高原にあり、東にはイン山脈、西にはレツマアウンクエー山などの山々が聳えている。一部は湿地帯のようになっており、全体の大きさは南北に22、4^{km}、東西に11、9^{km}である。水深は浅く、乾期の終わる頃には2^mぐらいで、雨期の終わり頃でも6^m程度である。



ビルマには湖が少ないので、より有名になっているのかも知れないが、水は澄み渡り、晴れた日などは実に美しい色に染まる。周囲が山と田園風景に囲まれた風光明媚なインレー湖は、高原地帯なので夏でもそれほど暑くなく、乾期にはセーターが欲しいぐらいだ。（上はインレー湖とタウンジー台地）

湖には沢山の浮島があり、小さな集落や水上マーケット、水上寺院などの珍しい風物が多い。（右は水上部落）

この湖を有名にしている一つは、この地方独特の船の漕ぎ方で、水上生活をする少数民族インダー族に伝わる手法だ。細長い船の上で片足で身体を支え、一方の足を櫓にかけて船を操るのである。こうすると両手で網を操ることができ、漁の際に便利であるという。

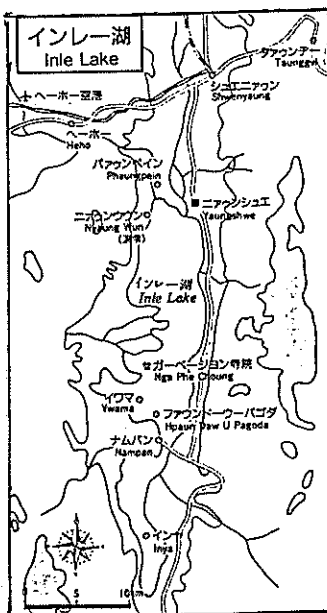


『インレー湖遊覧』

1月9日のインレー湖畔の朝は肌寒く、ホテルの前の橋の上を茶褐色の法衣を纏ったお坊さんたちが、一列になって托鉢に歩いていた。この姿は今も戦時中も変わらず、信心深い女性たちが橋の袂に出迎えてご飯を喜捨し、合掌する姿は仏教国らしい光景である。

橋の袂にある露天商に並べた商品の中に、木の葉で巻いたタバコが見えていた。戦時中、野生のタバコの葉を刻んで木の葉で巻いて吸った我々には懐かしいが、今も尚このようなタバコが販売されているのは驚きである。

一人の現地人らしい30代の女性が、流暢な日本語で話しかけてきた。彼女は東京・渋谷に11年も暮らしており、今は休暇をとって帰郷していると言う。我が妻は彼女の母親と二人の写真を摂り、後日送付すると言うと、東京の住所に片仮名の氏名を印刷した名刺を渡していた。こんな田舎の人が日本に渡った理由は何であったのだろうか。それはプライバシーの事で聞けなかった。(右はインレー湖とハイホータウンジーの地図)



一行が乗車したホテルの大型バスは、市街の細い道路を幾度となくカーブをきって湖畔の船着場に着いた。町は昔の面影を残していないが、船着場だけは見覚えがあり、少しずつ記憶が蘇ってきた。

5人乗りのエンジン付舟艇に分乗すると、間もなくエンジンが回転して水飛沫を上げ、インレー湖クルーズに出発した。早朝の冷気を切って奮進する舟の上は寒く、用意してきた合羽を羽織ってもまだ寒い。よく見ると分乗した一行は身をかがめて縮こまっていた。(上は浮島の水牛の群)



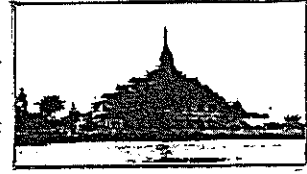
高地に囲まれたインレー湖面に陽が照るのは遅く、薄ぼんやりとしたハイホーやタウンジーの高原が、微かに網膜に映るだけであつた。舟艇の通路となっている用水路の丘の上には、大きな角を伸ばした水牛が、何かを忘れているのか、餌が未だもらえないのか悄然と立っていた。

太陽の光を一杯に浴び始めた舟は、やがて広々と広がった湖面に出た。しかし肌を感じる寒さ是一向に和ららず、早く目的地に着きたいと、波飛沫をあげて奮進する速度を気にしながら、約1時間20分を経過した。エンジンを停止して到着した処は「ファンダー・パゴダ」であつた。前回訪れた時の貧弱な姿は消え去り、城が建ったような豪華堂々とした寺院であつた。

草いきれと泥が混じった臭い匂いが、鼻を突くような浮島に着くと、少数民族の服装をした数人の女性は一行を待ち受けていたように近づき、彼女ら

が栽培した花の束を我々の手に握らせたのであった。収入も少ない彼女たちのことを考えると、自然に金を払って買ってやった。彼女らに案内されるようにして階段を登り、二階の本尊に花を供えた。

このパゴダの御本尊は五体の仏陀像だが普通の仏像の姿でない。団子のように見える大小五つの球体であった。この五個の球体は、信者たちの寄進による金箔で表面が覆われ、黄金の玉のように輝きを放っていた。



毎年10月には18日間にわたって筏祭りが催され、日本のテレビにも何回か放映されたことを覚えている。それはカラウェイという伝説上の鳥を型どった大きな船に、五つの球体の仏像を乗せて湖を巡り歩くのだが、詳しくは別記する。(右上の写真はファンドーウー・パゴダの全景)

20年前のパゴダはインダー族が住む集落の中に立っていた。水面上に立ち並んだ高床式の家並みの間を水路が通り、橋が架かっていた。家並みの道を歩いていくと、ずらりと並んだ織機に向かって働く女性の姿が見え、シャン・バックなどを織っていた。

今では観光用に立派なパゴダを新築し、その場所もまた新設されたらしく、市場があった街並みも見当たらない。ただパゴダの一隅で機織りを実演し、その傍らで土産品を売っているに過ぎない。矢張り以前のように少数民族の街並みまで足を運び、手まね足まねで接触する観光の方が価値があるように思われる。次に「インレー湖の筏祭り」に就いて記しておく。

インレー湖には80の浮島があり、18の村を作っている。1992年度の人口調査によると、この湖上に浮かぶ島には約9万人が住んでいるという。彼等は浮島の上で野菜を栽培し、インレー湖の魚を捕って生活している。

勿論、舟が唯一の交通手段である。彼等は世界でも珍しい片脚を器用に使って櫓を漕ぐ名人たちの、少数民族インダー族である。

彼等は毎年10月中旬、雨期も終わりに近づく頃、満々と青く水を湛えたインレー湖に、カラウェイと呼ばれる鳥を型どった大筏を繰り出す。その筏の両側にインダーの男たちが立ち並び、掛け声に合わせて脚で櫓を漕ぎながら、次々と浮島を巡って行くのである。

筏の先端には仏陀の仏像三体、僧侶の仏像が二体が祀ってある。ビルマの人たちは、これをインレー湖の筏祭りと呼び、これには次の伝説がある。

湖の中心地ニャウンシュエは1351年、シャン族の大領主シィサインブワーによって創立された。ある時、インレー湖の東の山脈に住む山の民が、「山奥で不思議な光が立ち上っている」と大領主に告げに来た。大領主が行ってみると、山奥に小さな仏塔があり、五体の仏像が祀ってあった。

大領主は五体の仏像を持ち帰り、ニャウンシュエに寺院を建てて安置し、シャン族の領民たちに礼拝させ、毎年雨期の終わる10月中旬頃、供養のた

め寺院祭をおこなった。

1616年、ニアウンシュエは、大領主の後裔ナンペガトーという女領主の時代に戦火にあった。5体の仏像は難を逃れ、インレー湖の浮島のインダー族に授けられて、村の仮の寺院に祀られることになった。

以来、5体の仏像は湖上のインダー族の有力者たちに護られ、毎年一度、此の地方の雨期が終わりに近づく10月中旬頃、大筏の先端に祀られ、浮島を巡ってニアウンシュエのシャン族の元の寺院に里帰りするのだという。

だが元を辿ると、最初に5体の仏像を山奥の小仏塔に祀ったのは、ビルマ族のパガン朝4代の王アウンズイトゥ大王（在位1112～67）であった。

大王はある時、イラワジ河を大筏で下り、海に出てセイロン島、ザンブディ島、マラッユ島に行幸した。マラッユ島で大王は、仏教の守護神帝釈天から菩提樹と白檀の心材を賜ったので、沢山のゴータマ仏陀の仏像を彫らせ、大筏の先端に祀ってパガンに持ち帰った。後、大王はインレー湖の東の山奥に行幸なさったとき、小仏塔を1基建立させ、持ち帰った仏像の中から5体の仏像を安置した。

あのシャン族のニアウンシュエの大領主が山奥で見つけた5体の仏像は、実はビルマ族の大王アウンズイトゥが安置した仏像だったのである。

興味深い伝説で、仏教がセイロン島などから伝来したことが推察される。

ファンドーウ・パゴダから再び乗舟して湖上を走ることゆ約20分、ガーベジョン寺院に着いた。ここでは和尚さんの接待よろしく、茶のサービスやバナナと煎り豆が提供され、お布施を包まなければと思った程である。

この寺は湖上に建っていることを除けば日本の寺と変わらない。前は訪れていないが、ここが有名になったのは、寺に住み着いた数匹の猫が芸をするからであった。そう遠いことではないだろう。

住職が50～60センチほどの高さにかかげた針金の輪を、猫がピョンと飛び越える芸であった。芸は仕込まなければ猫自体は出来ないはずで、客を引きつける観光資源を考案した住職は、実に天晴れで感服した次第である。

猫に魅了されて一時を過ごし、再び乗舟して浮島の見学に移ったが、これは前回にも回遊したから余り興味はない。浮島の作り方は大型化していたのは、人口が増加して食糧の供給の問題から、必然的なことであろう。ただ私は働き場のない若者の為に、何かしてやりたい気持ちだけは一杯であった。

11:30にエンジンを全開した舟艇は帰路に就き、1時間後に出発した船着場に戻り、一行が期待していたインレー湖クルーズは終わりを告げた。ホテルで昼食を摂った後、これから走る我が古戦場でもあるタウンジーは、私にとっては戦後2回目で、誠に数奇な運命の出会いだと考えさせられた。

インレー湖の観光で不満を感じた最大唯一のものは、この旅行社も宣伝していた「首長族」の見学がなかったことである。私はシャン高原で戦闘した関係から何回か目にしたが、一行が機会を逸したことは残念至極である。

にも達しており、想像もつかないような発展ぶりであった。(シャン州の人口は約300万人、主要住民はシャン族)

ガイドが露天商人から買った梅干しを一つ味見してみると、梅干しに砂糖をまぶして乾燥したもので実に美味しく、珍品だと早速私も購入した。後日ラングーンの特設市場を訪れると5倍の値がついており、ビルマの中でも珍しい土産品らしいようである。

【イギリスの侵略方式というか、愚民化政策に就いて】若干記述してみたい。

19世紀にビルマにイギリスが登場するまで、ビルマに関わった欧米人は、イラワジ・デルタ地帯の一部にポルトガル人が植民して鉄砲を伝えたり、アメリカの教会の宣教師が辺境のカレン人やカチン人に布教した程度で、他の諸国のような植民地化を免れていた。

しかし老獪なイギリスは違った。公式通り先ず宣教師を送り込み、仏教徒との軋轢を利用した後、キリスト教徒援護と称して軍隊を送り込んだのであった。このイギリス・ビルマ戦争(英緬戦争)は3次にわたり、日本で言えば明治20年頃である。

イギリスはビルマをインドの一州に組み入れ、イラワジ・デルタ地帯を米のプランテーション(農園)にした。そこへインド人や中国人を大量に入植させるとともに、人口の70%を占める多数民族のビルマ族を、農場の労働者として使う一方、人口比率で言えば、それぞれ1%にも満たないカレン族、カチン族、モン族などの少数民族を、植民地の官吏や軍人に重用した。

大多数民族であるビルマ族の不満を、イギリスに向かないようにするための政策である。これが彼等イギリスが得意とする「分割統治」であった。

中でもインド人のビルマ移住政策は、ビルマの経済を大きく歪めてしまった。もともとこの政策はイラワジ・デルタ地帯を、イギリス植民地の「米倉」とする目的を持っていた。そしてインドの高利貸しによってビルマ農民は土地を奪われ、精米や米の取引きによる利益分配からもはずされてしまった。

一握りのイギリス商社が米の卸売りをコントロールし、そしてインド人と華僑が、精米から末端の販売網まで独占してしまった。又こうした傾向は米だけに限られた訳ではなかった。

こうした愚民政策は逆にビルマ人の民族主義や、愛国心を育てることになったのは、周知の通りである。

戦後のビルマ族に対する少数民族の反乱や内戦の原因は、実はイギリスの植民地政策の愚民政策が種子を撒いたのである。ビルマの内戦は起こるべくして起きたのであった。イギリスこそビルマの復興ために、最大の貢献をなすべきだと叫びたい。

我々が戦闘間に遭遇した経験では、ビルマの奥地や中国の山間僻地にもキリスト教の教会があり、戦火に巻き込まれる危険な状態になっても、決して

立ち退かなかった。

それは教会は情報収集の基地であると共に、宣教師とは名ばかりで軍人も入っていたのである。豊富な物資を集積して、これを少数民族に与えて手なづけ、代わりに情報を集めるばかりか、火器を与えて武装させ、攻撃までもさせてきたのである。

キリスト教は「愛」の精神だと標榜しているが、戦闘間を通じて見てきた感じでは、愛と反対の憎しみで、「憎悪」のために尽力していたとしか思えない。

そのために戦争集結直後の独立ビルマは、少数民族と反乱軍という、イギリスが作り出した二つの問題を抱えての船出であった、と懐かしいタウンヂーの台地に立った私は、このような感想を懐いていた。

生命を的にして完全燃焼させて戦ったタウンヂーを午後の2時に発ち、再びハイホー街道を逆戻りするよう西に向かった。54年も以前に軍鼓を鳴らした数々の思い出も、今では遠い昔の歴史になってしまった。

年老いて体力が衰弱し、視力は減退して耳も遠くなり、早や疲れが出てきて記憶の糸も辿れなくなった。文を書くにも旅を楽しむのにも若きだと、一種の嘆きを覚えながら、次々と展開してくる投影をぼーと見入っていた。

その間にビルマの旅で気付いたことは、国の政策と都市間の道路事情の問題である。今までの旅の移動は空路だけで点と点を結ぶ旅であった。しかし、今回は専用バスで点と点を線（道路）で結ぶ旅となった。それだけビルマ政府も観光に力を入れてきた証拠で、道路事情も良くなったのかと期待しながら車窓を眺めていた。

しかし進む道路は簡易舗装で凹凸が激しく、バスが交差できる幅員まで舗装されていない。そして道路の両側はコブ牛が



牽引する牛車の轍が深い跡を残し、バスは交差する度に大きく傾き、乗客の内蔵はひっくり返るような状態であった。

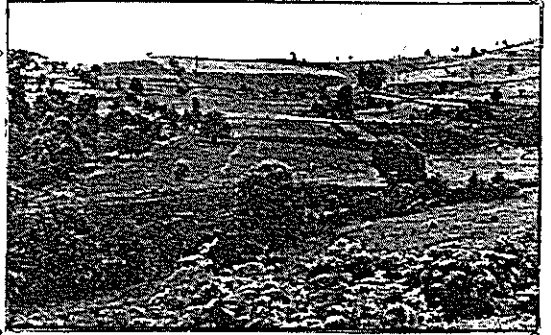
（上は西方から眺めたハイホー飛行場）

ハイホー飛行場から西方は、私にとっては未知の地である。戦の当時を回顧すると、疊々敷におかれながら大部隊の敵の来襲を待つ心境は、表現できない遣りきれないものであった。本当に神経衰弱に罹っても不思議ではなく、火花を散らす前の10日間は暗中摸索の錯乱状態であった。

しかし惨たらしい戦闘の桎梏から解放されて半世紀が経過し、私のような意志がなくなった人間が妻に連れられながら、九天九地（限りなく高い空と限りなく広い大地）のシャン高原を踏破できることに、幸せを感じていた。

午後3時半頃「アウンバン」(43頁地図)でトイレ休憩して、耕作された広い大地を眺めていると、桜の花が咲いていたことが印象的であった。シャン桜とでも言うのであろうか。

ここからバスは進路を北にとって茶褐色をした耕作地がつづくシャン高原を、ガタガタと前後左右に揺られながら我慢に我慢していると、死のあるような風景が投影してくる中に、ピンダヤの街が目映ってきた。



速度は1時間約17^{km}程度で道路の粗悪が判断される。(上は高原の耕作地)

部落一つなく果てしない、広漠とした波状高原を何十^{km}も奥地の奥に入り、陸の孤島を偲ばせる「ピンダヤ」は、寂寥感と孤独感が溢れた鄙びた山里の感じが一杯であった。

『ピンダヤ』

山峡の夕暮れは早く、辺りは次第に宵闇がはじまり始め、やや薄暗くなった山道を中古のバスは喘ぎながら登攀していった。

山の急斜面の中腹に設けられた小さな広場で下車し、下界を瞰下すると、仏教で言われる極楽浄土のような感じを受ける鳥瞰図が展開し、表現



する言葉も知らない素晴らしい景観であった。山々を染める静寂と残照、その神秘的な空間に眠るように広がる沼は、自然の深淵を表現した名場面である。

眼下に見える山裾には、大小何十もの白いパゴダが群をなして神秘性を醸し出し、その向こうの白く輝く湖水と相俟って桃源郷を思わせ、ピンダヤが仏教信者の崇拜の対象となっている秘密が、理解できたのである。

(上の写真は、手前がパゴダの群像、向こうの左上が神秘的な湖沼)

荒涼とした広いビルマのシャン高原での兵馬恣恣の間、ピンダヤに近いヘイホに於いて、暴虎馮河の勇をふるって衆敵と戦っていた時には、全くピンダヤの存在すら知らなかった。

また図上から判断すると、インパールに続くイラワジ会戦で敗走した15軍の一部や、菊十八師団の一部もまた、支離滅裂になってピンダヤを通過して南下したことだろう。戦乱の時でも仏の加護がこの地を支配していたようだ。

駐車した広場には少数民族の店屋が数軒並び、それを過ぎると、ピンダヤの洞窟寺院に登る150段の階段が通じていた。階段の両側にあるお土産品店を覗く元気もなく、杖を頼りにして懸命に登っては休み、休んでは高い階段を登り詰めると、そこに鍾乳洞の入口が見えていた。

振り返って湖水の美しい姿に嘆声をあげながら洞窟寺院の中に静かに進んだ。18世紀頃に寺院として開かれた洞窟内には8094体の仏像が、大小入り混じって所狭しと立体的に並び立っていた。洞窟に入った直ぐの処にある黄金のパゴダをくぐって奥に入ると、そこには13～17世紀の間に造られたと言われる様々な形の仏像が、ライトアップされて、浮かび上がっているように見えていた。これは可成りの迫力が感じられた。（上の写真はピンダヤ洞窟寺院の黄金の仏像群の一部）



鍾乳洞の洞窟の長さは約150m、「Terminal」の立て札がたてかけられている奥の行き止まりには、人がやっと潜れるくらいの穴が開いていた。ここから先の洞窟は、パガンまで通じていると言い伝えがあるようだ。

【ピンダヤのいわれ】

昔々、7人の王女がピンダヤ湖で水浴びをしていたところ、すっかり暗くなってしまった。帰り道が分からなくなり、近くにあった洞窟で夜が明けるのを待つことにしたところ、何処からともなく現れた大きな蜘蛛が、洞窟の入口を塞いでしまった。

出られなくなってしまった王女たちが、声を張り上げて助けを求めていると、偶然近くを王子様が通りかかり、洞窟の入口を開けようとするや蜘蛛が現れた。王子はその蜘蛛を倒して無事に王女たちを助け出し、一番若くて最も美しかった一人と結婚して、めでたしめでたし、となったと言う。

王子が蜘蛛を倒した際「Pink Ya」（Pink=蜘蛛、Ya=get。「蜘蛛をやつたぞ」と叫び、それが転じて現在のように、ピンダヤと呼ばれるようになったそうである。

王子の勇気を讃え、心やさしいビルマの人々は、倒された蜘蛛を悼んで洞窟に仏像を供え始め、やがて数が増えて現在のようになったのだと言う。

洞窟寺院を出ると寂寥感が満ち満ちていた暗闇の世界が拡がり、長時間のバスの振動疲れで疲労困憊の状態であった。山を下った麓にあった鄙びた田舎ホテルも記憶になく、朦朧としてバタンキューというところであった。

次に「ハイホ」～「タウンジー」の戦闘状況の概要を記し、御英霊を慰めたいと思う。

保し、以て南方圏の北翼を形成し、且つこの間、成し得る限り印支連略を封殺して全般の作戦を容易ならしむべし」と指示している。

即ちインパール作戦の敗北ばかりではなく、方面軍全般の撤退を意味していたのである。

しかしながら、指導要領に書かれている項目で特に注意を要す点は、ビルマ方面軍は中南部ビルマ方面にあっては来攻する敵を撃破し、止むを得ざるも縦深にわたる要域に於いて、持久を策すように指示している。

従ってビルマ方面軍は止むを得ない場合には戦力の壊滅を避け、縦深にわたる要域で持久しながら逐次後退し、最後は大陸の国防圏であるインドシナ半島（タイを含む）の要域に踏みとどまり、あくまで敵の進攻を阻止する方針であった。

以上の命令・指示を考えてみると、ビルマのイラワジ河畔やシャン高原では、地形上や当時の補給の状況から思考して、持久戦を長期にわたって実行することは不可能であった。第一線の実情を知ろうとしない上層部は、すべて他人事のような考え方が支配し、無理難題な戦闘を強要したのであった。

戦車や強大な砲兵力、それに絶対的な空軍力を擁する敵を阻止するには、当時としてはシットン河やサルウィン河を障害とする方法しかなく、一挙に後退して方面軍が集結し、防御線を形成することが上善の策だと私は考えるのである。（彼我の飛行場関係は前頁地図参照）

これから我が大隊が転進して行くタウンジーやイーホの持久戦は、15軍や33軍の退却援護作戦と推察した。しかしながら小刻みな戦闘でなく南方総軍の考え方に従って、ビルマ方面軍の使命は戦力上からも終わったとビルマを放棄し、大乗的に早くタイ国境へ後退すべきだったと思っている。

我が大隊がシボウで戦闘中、インパールから敗走した15軍が計画したイラワジ会戦（イラワジ河で反撃するという盤作戦）の見通しは悲観的であった。2月26日には英軍戦車旅団はバガン付近からイラワジ河を渡河し、戦車・自動貨車2000輛がメイクテラ飛行場に突入していた。（戦史叢書）

しかし方面軍は依然としてイラワジ会戦を完遂するという、強い指導で臨んでいたが、担当する15軍は3月上旬、イラワジ河の反撃を中止してメイクテラに主攻撃をとることに決め、33軍から15軍の隷下に入った菊18師団も、メイクテラ攻撃に向けられた。

壘棧敷に置かれていた我々は何も知らされず、ひたすら命令のまま行動していた。今考えると、軍は想像力で戦闘を指導していたように思われて仕方がない。想像力は指揮官には必要ではあるが、それは適宜に制御されなければならないものだ。

シボウから南下した我が大隊は、敵のケシマンサン方面（次頁地図参照）への侵出を阻止するため同地に派遣され、次いでライカ（同図）に布陣する

目的で後退中、西方約150*のタウンデーに転進し、マンダレーから南進中の英印軍を阻止すべし、との命令を受領した。しかしながら、我々の隷属する33軍や56師団ばかりでなく、マンダレー方面の15軍の状況も全く不明であった。

我が大隊単独でシャン高原の中央部に派遣された直前に頼りにしていた1ケ中隊の兵力を引き抜かれ、貧乏くじを引いた感じで急行した。

このころから敵機から投下される伝単(宣伝文)は俄に活発となり、我が軍に対しては、日本人捕虜が優遇されて安楽に生活している写真や、これらの俘虜に執筆させた離隊投降の勧告文などの反軍宣伝であった。

(上はシポウからタウンデー、ハイホに至る概要図)

又、土地住民に対しては日用雑貨や野菜の種子等を投下して、現在の不自由な生活は日本軍の侵略の結果だと宣伝し、間もなく日本軍の敗退は必至だから、今から野菜の栽培を始めようと、盛んに反日宣伝ビラを投下していた。

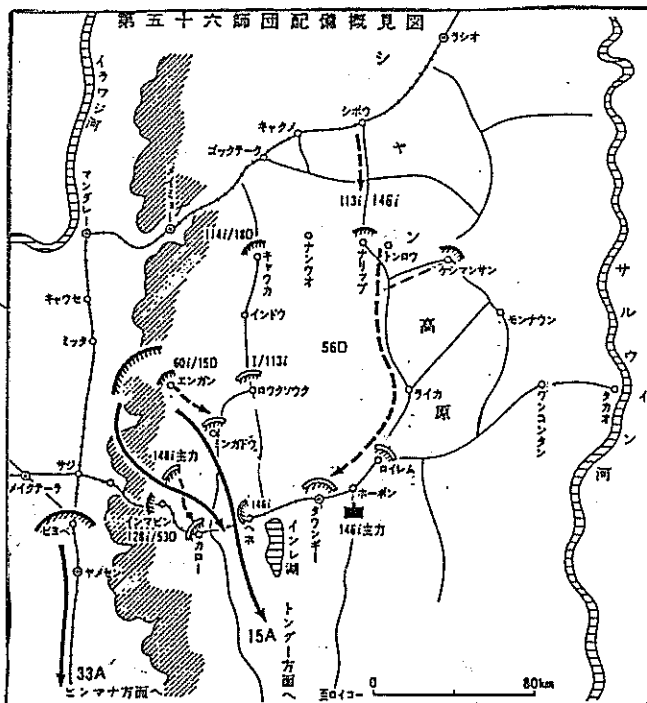
この伝単のため日本軍が発行していた軍票の価値は下落し、戦線の近くでは全然通用しなくなり、日用品や塩などの現物を与えなければ、食糧の一粒も手に入らない状態になっていた。

補給の全くない日本軍の第一線部隊は背に腹は代えられず、盗賊集団と同じように略奪で生命を繋いでいたのである。

そのような情勢の中を、我が大隊がライカを経てタウンデーに向かう途中、ロケット砲までも有する神出鬼没の土民軍ゲリラの夜襲を受け(英印軍が養成したもの)、直ぐ聯隊長に報告したところ、敵の空挺部隊が降下して聯隊の退路を遮断する憂あり、との返電があった。

タウンデーには急行しなければならない戦況と思案したが、当面のゲリラ部隊も掃討しなければナンパッカの二の舞となり、意を決して数日間、この地一帯の掃討作戦を実施した。このとき初めて首長族を見た記憶が残っている。彼等少数民族は日本軍の行動を敵に通報していたばかりか、道案内までしていたのである。戦闘するのは兵士ばかりではないのであった。

タウンデーに転進中には既に雨期にさしかかっていたが、昼間は敵機が跳



梁するためジャングルに隠れ、激しい降雨の中でも夜行軍を続けて先を急いだ。一寸先が闇夜の道で、岐路にさしかかっても進路が分からず、雷鳴の稲妻の光で進路を判明したこともあり、苦勞が懐かしく思い出される。

我々がタウンヂーに転進中の時期に、ビルマ方面軍参謀長田中新一中将は、戦史叢書に次のように回顧している。

1月ごろになると大東亜戦争の運命を悲観する空気が、ラングーンの居留民や通信報道員、さらに方面軍司令部の将兵の間にも流れ始めた。

19年12月20日にレイテ島敗戦、20年1月9日にルソン島のリングエン湾に上陸された報道が伝わると、ビルマ作戦の将来も、もはや望みなしといった漠然とした不安が広がり始めた。戦局全般の事情も一応は考慮できる幕僚たちも、次第に秋風が吹き通る胸中であつた。

33軍の辻政信参謀は、大東亜戦争は敗戦必至だ。ビルマその他インドシナ半島の我が兵力は、中国大陸に撤退しなければならないと言っている。

28軍の岩畔参謀長も、今や国家の重大事は如何にして戦争を終結するかに懸かっている。ビルマの如き局地の勝負の問題ではない。方面軍はよろしく戦争集結問題について意見すべきだ、と語っている。

私(方面軍参謀長)としても、戦争指導が今や重大な危局に直面していることも、日本が思い切った起死回生の方策を断行しなければならない関頭に、立たされていることも感じており、深夜懊悩に耐え難いものがあつたことは勿論である。特に開戦当時、大本营陸軍部の作戦部長であつた私としては、ことごとに責任の重圧を感じざるを得なかつた、と語っている。

ノモハンであれほど徹底的な敗北を喫しながら、航空や戦車の改革を怠っていた軍の高官たちは、日米開戦の時には真っ先に開戦論をおちまいたのであつた。我々がタウンヂーに着く前から上層部は負け意識を持ち、何も知らない第一線部隊将兵が血を流すことには、目を覆っていたのである。

前にも記したが、学業の成績の良い者が優秀者という事は有害である。出世するために必要な要件は「コネ」、「毛並み」(陸大や幼年校、高官の血族等)、「オベンチャラ」(確かにあつた)だと言われていたが、その中でもコネと毛並みは絶対条件であつたようだ。彼等は殆ど安全地帯に勤務して、弾雨に触れたことのない無菌状態の人達であつた。

33軍司令官本多政材中将(我が上司)の回想には次のように述べている。

方面軍がいよいよイラワジ会戦(実現する前に突破されて敗走)で決戦を企画することになったと聞き、参謀間で種々検討を試みたところ、「この広大な正面に充当する兵力は、1*。当たり僅かに20~30名に過ぎない。しかも敵の追尾を受け、兵器・弾薬・糧秣の補給も満足に行われず、疲労困憊した兵団で、このような決戦が果たして成り立つかどうか疑わしい」という結論になった。

私見では、軍参謀たちが不謹慎にも「決戦」(雌雄を決す天下分け目の戦)

という語を叫ぶことは、本質的に我々が戦っている持久戦の目的を忘れてい
る。戦いは勢いである。敵の猛追を防ぐには一挙に後退して布陣するしか方
策がない、ということが判らないのだろうか。これが即ち実戦を知らない人
達の、将棋さしの駒動かすと云わねばならない。

以上は今回、戦史叢書を繙いて初めて判明したことである。当時の龍兵団
第一線部隊の我々は劣悪な装備や無補給にも臥薪嘗胆し、全く勝つ目途のな
い戦闘だと薄々感じながらも、命令のまま持久戦の任務に邁進していた。

前記したようにイラワジ会戦は画に書いただけで、2月
26日にはメークテラ西飛行場に、2000輛の敵機械
化兵団が突入した。

慌てたビルマ方面軍はメ
ークテラ会戦を企画し、その
会戦を主宰するために33軍
司令部だけを抽出した。

33軍の抽出を決意した方
面軍は3月22日、33軍司
令官に次のように打電した。
「本多33軍司令官は33軍
の指揮を56師団長に委ね、
軍司令部のみを率いて成る可
く速やかに大和村（カロー西
方のジャングル）に転進すべし」と。（上の地図参照、記号・符号は19頁）

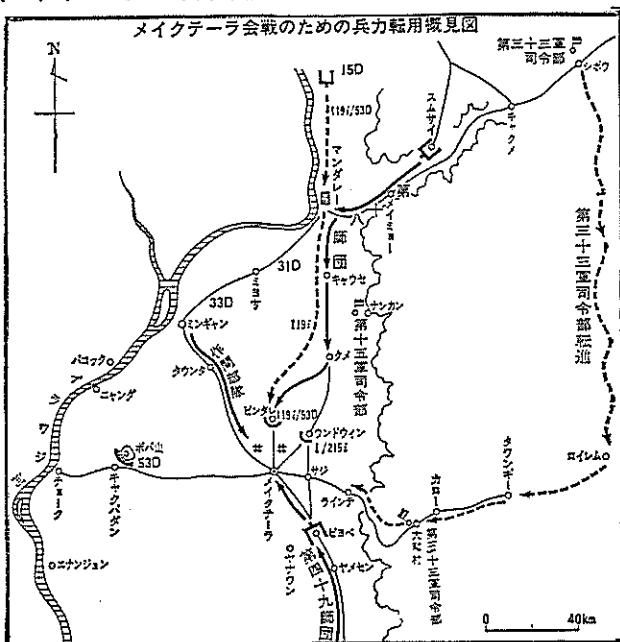
3月18日、33軍は指揮下に戻った18師団と49師団を併せ指揮し、
メークテラ方面の敵機甲兵団を撃破すべし、との命令を受領した。

（龍56師団に配属されていた狼の吉田四郎大佐はメークテラで戦死）

以上の経過から、方面軍は命令さえ出せば、中間軍はすぐにでも統帥が開
始できていると思っているのだろうか。これでは学校の演習である。下級部隊は
戦争の歯車の中で、上級者の都合だけで振り回されている感じがする。

33軍の抽出に伴い、方面軍は龍56師団長に対し、「56師団は方面軍
の右翼の支柱を形成し、且つシャン州を安定確保」すべき任務を下命した。

ビルマ方面軍は今や囊中の鼠のように包囲され、戦線は犬歯錯綜の状態に
陥っていたが、我々第一線部隊は何一つ知らされず、33軍司令部が我が大
隊よりも先にタウンヂーを通過して、カロー西方の大和村と称される部落に
移動し、メークテラ作戦を指導中であったことも判らずに、押っ取り刀で
タウンヂーの台地に着いたのであった。



『ハイホ〜タウンヂーの戦闘』

方面軍ばかりではなく我が56師団の情勢も判らず、我が大隊の任務も明確

な指示も受けていなかったが、地形上から判断して15軍を收容し、これを猛追する強大な英印軍をこの地域で阻止することが、上司の意図に沿うものと思われ、タウンヂーの高地からハイホ台地からインレー湖一帯を眺め、各方面に斥候を派遣して情報の收拾に努めた。

実戦上での軍隊の行動は情報が判断の基礎であり、常に確実な情報を掴んでいることが最も肝要であると、聳れ敷に置かれた我々は常に思っていたから、当然の行動である。

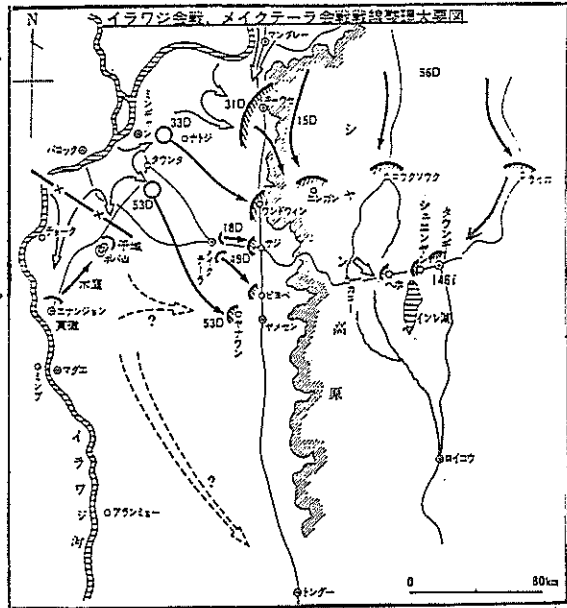
タウンヂーの台地は、強大な敵砲兵が威力を発揮するには容易な地形で、西側に傾斜して敵方に曝されている地形では守備は難しく、3〜4日程度の防御も期待できないと判断した。

久しぶりに我が部隊は腰を落ち着け、直接の戦火から離れられた別天地であった。自然の柔らかな空間の不思議さを感じながら、陽光を受けて金色や銀色に輝くインレー湖の景観に見惚れ、湖から吹き寄せる微風を浴びながら今後の作戦を練っていた。しかし嵐の前の静けだと準備は怠りなし。

先ず最初に脳裡に浮かんできたことは、当面に現れてくる敵は英印軍であり、我が部隊としては緒戦でもあった。この際如何なる戦法で戦えば良いか、何時も同じように戦っているのは強大な敵戦力に圧倒されて負けだ。持久戦を有利に成功させるには、他と違った戦法を採らなければ、持久の目的は容易ではないと決意した。

即ちタウンヂー台地に固執せず、持久戦の目的を達成するためには、前方に見えるハイホ飛行場の台地を利用しなければならない。又インレー湖北方の草原は雨期で湿地化の状態だと報告を受け、ゲリラ戦に最も適したよいチャンスで、「奇貨居くべし」と思考した。

幸い経験不足の私でも中国戦線では、ゲリラと戦って彼等の戦法を学んだ。そして何よりも文明国の将兵は、絶対優勢な砲爆撃の援護を受けている関係から、ゲリラ戦には極めて弱いのが実情である。何回も繰り返したが、戦は経験がものを云い、実戦は図上戦術の延長ではないのである。



戦闘の詳細は拙著「両忘」に記載済みで重複を避けたい。ただ敵情のみならず、我が方面軍、中間軍、師団の状況が不明の状態「両忘」は記されているから、この紀行文では、彼我の関係を明確にした積もりである。

タウンデーからヘイホ高地に前進し我が大隊は、相互に見知らぬ敵であり、機先をを制して精神的に打撃を与えることを第一義とし、跳びかかろうとするライオンや虎のようにじっと身をひそめ、興奮を抑えようと入念に待ち構えていたのである。

シャン高原の山の上の街・カローを経て、ヘイホ飛行場の広大な平坦地に、隘路から顔を出した敵の大部隊に対し、配属されていた聯隊砲一門でもって、最大射程の6000^mで展開妨害射撃を実施した。戦勝に酔いながら来攻してきた敵は慌てふためき、台地の陰に散らばっていく光景が双眼鏡に写った。予想しなかった不意急襲射撃を蒙り、さぞかしびっくり仰天したことだろう。

その翌日になると、M4戦車30～40輛が飛行場広場に展開した。そして双眼鏡で覗いた長く伸びた戦車砲は、無言の圧力を我に与えていた。戦車を陣内に引き入れては大変だと、戦車の進入の公算が高い公道や、橋梁の爆破状況を再度点検して、念には念を入れて戦闘準備に余念がなかった。

一兵の犠牲も出さないと決心していた私は、飛行場に直面した警戒陣地は、猛砲撃を浴びて数日間で主陣地に後退させた。

英印軍は雲南遠征軍や米支連合軍と同じ戦法で、我が陣地に対して攻撃準備射撃を、たっぷりと時間をかけて行い、我が陣地から殆ど緑色が発見できないほど徹底的に破壊し、生物が存在しない状態になって、初めて歩兵が出てくるのであった。（前頁地図参照）

この戦法を逆用した我が方は、敵の殷々轟々とした猛砲撃が開始されると同時に、敵と反対斜面に構築した散兵壕に素早く後退し、夕刻に砲撃が中止すると間髪を入れず斜面を這い登り、前の陣地に戻って敵に対して射撃を行い、我が方は健在であることを敵に知らずのであった。多分、敵はあれだけの砲撃でも日本兵が生存しているのは、恐らく堅固な陣地を構築しているのではないかと、判断したことだろう。

昼間の夥しかった炸裂音も止んで夜になると、九州男児の強者たちは敵陣に潜入し、これもまた突撃ではなく、射撃をして敵の心理を攪乱し、帰還するのであった。人命尊重主義で一兵の生命をも犠牲にしない私の方針から、突撃は厳禁していたのである。

周章狼狽した1ヶ師団の大敵は、ヘイホ高地を占領している日本軍は今までと違って頑強で、巧妙な業師が指揮し、千軍万馬の猛者連中が戦っていると思ったことだろう。

敵の攻撃はヘイホ高地で半ヶ月以上も手子摺ったが、多勢に無勢、物量の差は、遂に我が後方に迂回されて後退を決心した。しかし10数^mにも及ぶヘイホ～タウンデー間を無為無策で後退する訳もなく、冷静、緻密、慎重な

奇策を考案して成功を取めたのであった。

ハイホータウンヂー街道は雨期の間は湿地化するため、公道以外の通行は意のままにならず、それを遺憾なく利用した戦法とは、次のようなゲリラ戦法であった。(雨期にはインレー湖の水が溢れて湿地となる)

必ず敵は通過しなければならない公路を見ると、その両側に点々とまばらに自然の樹木が生えていた。私はその自生した草原の中の樹木に着眼した。夜間撤退する時、その樹木の陰に約10名の伏兵を隠し、敵の尖兵が通過した時に前後左右から一斉射撃を見舞い、全滅させる作戦であった。これが予想した通りに凶に当たり、敵を殲滅して大戦果を上げたのであった。

中国戦線で苦い経験を味わった私は、これを応用したのであったが、戦闘は本当に経験が重要な要素である。

この小戦の結果、用心深い敵は容易に前進せず、広大な湿地と化した草原に散在する樹木に対し、片っ端から砲撃を集中しては移動し、虱潰しにするのに約10日間も要した。破顔一笑しながら貴重な時間を稼いだのである。

用心に用心を重ねた敵はもう大丈夫だと確信したのか、硝煙の臭いが充満して吹き寄せてくる直線公路を、今度はM4戦車を先頭にして随伴歩兵が進撃してきた。これも我が仕掛けた罠にはまり、術中に陥ったのである。

予め公路上の小さな河川に架かった橋梁を破壊して、戦車の通行を遮断した。河川の東側(タウンヂー側)には1ケ中隊を配備して待ち伏せし、敵の随伴歩兵が安全だと確認したのか河岸で休憩に移った。この好機を看破した隊長の号令一下、不意に集中射撃を浴びせて一兵のこらず殲滅し、敵戦車も慌てて反転して退却、凄愴な有様を遺したのである。

ゲリラ戦による持久戦は予想以上に功を奏し、10日以上の間長期間に亘り時を稼いだ。これは九州男児の鬼神もこれを避ける活躍の賜物で、初めて出会った英印軍は完全に敗北を認めたことであろう。

続いて熱射が大気を揺らめかすようなタウンヂーの台地に後退した。苦心惨憺して陣地の配備をしたが、平坦で遮蔽物もないばかりか、兵力に比して防御正面は余りにも広く、いくら人智を馳駆しても自然まで変えられない。只やれるだけやって、あとは成り行きに任せるだけだと、敵の巨大な籠のような咆哮を待っていた。

敵は湿地帯に砲列を敷くのに予想外に時間がかかり、我々はひたすら地上の無惨を呪いながら敵を待つこと3日間、彼等の殷々たる砲声と閃光は静寂だった台地を、忽ちにして喧噪で悲惨な坩堝と化した。

肝を震わせる轟音が身の回りの随所から起こり、炸裂した破片の無気味な飛行音で我が耳は聾になった。雷鳴のような弾着音と爆煙の立ち上る中で、死闘を続ける部下将兵の奮戦している姿を見ている私は、ただ天に泣き地に哭す心境で部下の無事のみを祈っていた。

日本最強を誇る九州男児は死地に追い込まれながらも、抵抗は熱狂的で且つ決死的に陣地の死守を続けた。しかし広正面の陣地の間隙から敵は侵入し、我が大隊が支離滅裂になるのを未然に防止するため（これが持久戦）、聯隊長に意見具申し、聯隊命令を受領して夜に入り、鞭声粛々と松明の灯りをたよりに逐次後退にうつった。

ハイホの戦鬪以来、傷だらけの我が大隊は寡兵でよく1ヶ師団の大敵と対し、1ヶ月半にわたる持久戦に将兵は精根が尽き果てて疲労困憊、せめて一日だけでも生死から解脱した心理になってみたいと、誰しも思ったことだろう。私は心からご苦勞であったと叫びたい心境であった。

大隊の将兵が一丸となって頑張り通した甲斐があり、いよいよその時が来たり、公路を明け渡して間道に入り、道なき道を南下していった。

ハイホ～タウンヂーの戦鬪を振り返ってみると、断作戦で味った鬱憤した恨みを、利子をつけて取り払ったような気分である。更に私の過去を顧みると、戦鬪は「負けて覚える角力かな」であって、「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議な負けなし」と云う教訓を得たのである。

『龍56師団長から賞詞を受領』

「歩兵第146聯隊第二大隊寺前大隊はハイホ～タウンヂーの戦鬪に於いて、徹底した緻密な計画と周到な準備を練り、奇襲を以て敵の意表に出て、よく寡兵で以て衆敵に痛打を与え、一ヶ月半の長期に亘り持久の任務を全うし、以て全軍のシットン河及びサルウィン河の渡河を容易ならしめたり」

龍第56師団長松山祐三中将から、上記の賞詞を受領した。

『英印軍からも逆に賞賛』

龍第56師団捜索56聯隊第3中隊（中隊長は同期の清水正男氏）第1小隊長（故）村野新一氏（56期）は、復員後、長らく彼我両軍のビルマ戦史を研究され、英印軍の戦史研究者として活躍された。その英印軍の戦史の中に次の一文があることを村野氏から私に通報され、ハイホ～タウンヂー間の我が戦鬪が敵に評価され、賞賛されていることが判明した。

「英軍中尉ルイス・アレン著」（東南アジア総司令部）（50頁地図参照）

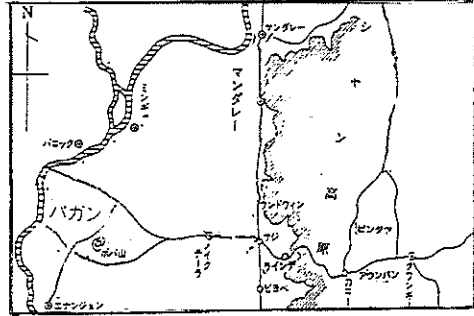
英印軍第19師団戦鬪詳報に、下記のような要旨が記載されている。
【カローからハイホ～タウンヂーに通じる道路を進撃した第19師団は、ひどい損害を受けた。この敵は急いでタウンヂー方面に派遣された日本軍の一部隊（我が大隊）で、今日まで遭遇した日本軍とは違い、将兵の士気は旺盛し、指揮官の指揮は卓越して、山稜及び平坦地での作戦は拔群であった】と。（私にしては狡知に長けた氣迫の勝利である）

ピンダヤ～カロー～サジ～

メークテーラ～ポッパ山～パガンの旅

前夜、ピンダヤの旭の昇る暁の光景は最高の美観だと伝えられた。戦争の痛ましい思い出もない1月10日の日の出を撮さんと、一行は黎明のはじまる前から屋外に出て待機していた。しかし脚の不自由な私は部屋の窓から、ピンダヤ湖上を赤々と揺れて昇る太陽を狙っていた。

戦いのない息抜きしたような感じで窓際に立ち、ほのぼのとした雰囲気の中を旭日が昇り始めると、我が気分は益々爽快の上に和やかさが加わり、この美景をしっかりと焼き付けたいと、次から次へと連続してシャッターを押した。



(上は本日の行程の地図)

陽光は湖面に姿を映して東方の空は赤く焦げ、嗚呼、天なる哉、命なる哉と絶叫したい一瞬であった。



しっとりとした夜露にぬれた木の葉が、うらかな朝日に光り、梢ごしに仰ぐ空は抜けるほど青みを帯びて、今日もまた昨日と同じように静かで清々しい朝が訪れた。そして血のような真っ赤な太陽はずんずん湖の上に昇っていった。(上はピンダヤ湖上を昇る旭日)

ピンダヤ湖畔に視線を移すと、そこには十数人の若い女性が湖水の中に見えていた。彼女たちは齋戒沐浴しているのか、洗濯をしているのか判らない。早速、階段を降りてホテルの外に出た。湖畔に近づいてよく見つめていると、それは両方であった。



(右はピンダヤ湖の朝の景観)

仏教国らしく道路の傍らや湖畔に大きな菩提樹が生い茂り、緑の葉が朝日を浴びて青々と輝き、傘のように覆った樹の下に彼女たちは自然に集まり、お喋りの場所となっていた。その堅い女性の話し声が湖面から響き伝わり、菩提樹の陰で波阿弥陀仏を唱えて、極楽往生を願っているような光景であった。

ビルマ人は辛抱強く、長い長い忍耐の持ち主で、楽天的で権力にとにかく

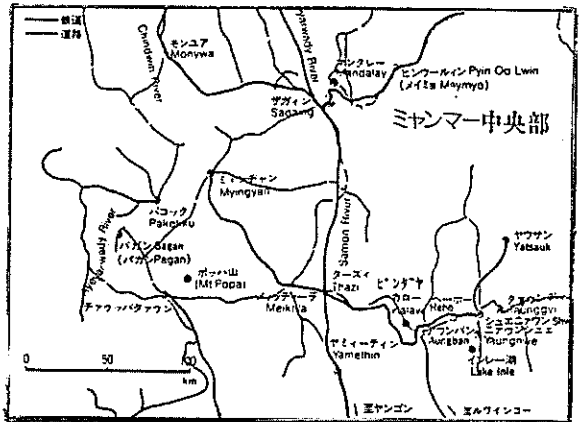
服従する国民性だと聞いたことがある。小乗仏教では菩提樹一つあれば、そこで修行して解脱すればよいのである。しかし解脱などは普通の人の出来ることではない。だからこそ、解脱した人を拝もうと、仏像が出来たのではないだろうか。そのように考えながら湖畔の菩提樹を眺めていた。

朝日の撮影が終わると、晴れ渡ったシャン高原は日差しの強い一日を迎えようとしていた。7:30に出発したバスはガタガタ道を走り、1時間後にはアウンバンでトイレ休憩して、再び延々と高原台地に伸びる殺風景な悪路を、西に向かって疾走した。

ガイドのジョー氏は右の方を指差し、石造りのシャン族の墓だと説明した。私は作戦中にビルマで墓を見た記憶はなく、仏教徒のシャン族には墓に葬る風習があることを知った。

遺骨を墓に埋めて拝みに行くことは美しい風習である。しかし墓の信仰はもともと仏教にはなかった。釈迦は墓を建てなかった。インドでは一般の人々はガンジス河に撒骨し、流れの中に戻ることによって、天界に生まれるのだと云う思想である。

ビルマ人は死ぬことを怖ろしいとは思っていない。人間は一度は必ず死ぬものであり、死ぬことによってこの世の煩惱を逃れて、元に帰るのだと信じている。だからビルマ人は臨終の人に向かって、その人が一生の間に行った善事を話し、その後は仏様に導かれてもっと良い国に行くものと安心して見送りの会だと聞いていた。



日本では明治以前の迷信と慣習によって、現在のような葬式仏教が盛んになっているが、本尊の釈迦の墓は何処にもないのである。釈迦は「空」に帰り、「無」になったかであろう。

私は一昨年、胃癌の手術の前に宗教とは関係なく、墓と中国の黄河とビルマのパゴダを造った。60回以上の海外旅行で世界の各地を訪れ、何十種類の宗教に出合った私は、宗教が判らなくなりました。勿論、宗教には無関心ではないが、特定の宗教は持っていない積もりである。ただ慣習に倣って妻の意見を採り入れ、私が此の世に生存した記念碑として建墓した。

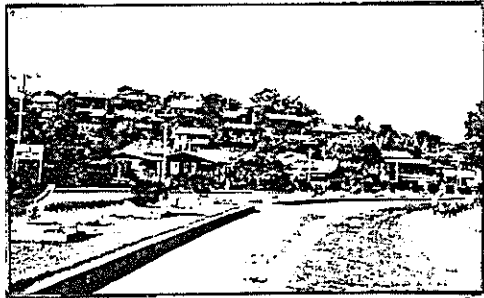
私にとっては戦死者に対する慰霊は、宗教とは別だという考えに立っている。ビルマのパゴダと中国の黄河の造園も、私の心の問題である。慰霊の精神もまた私の心の問題であって、義務であり責任だと信じている。

『カロー』（前頁地図参照）

アウンバンから約30分ほど西に走ると小綺麗な街並みが網膜に映ってきた。ここがカローで初対面である。作戦中によく耳にしたカローの名称は忘れることはなかった。情報は全く皆無の中で、必ず敵はカロー街道を東に進攻し、ハイホータウンチーに來攻するだろうと判断していたからである。

カローはイギリスの植民地時代には避暑地として賑っていた町で、現在も当時の面影を遺しているように見えた。小型化したタウンチーといった町だろうか。

しかしシャン州の少数民族でもタウンチーとは異なり、パラウン族やパオ族などの山岳民族が住んでいる。



カローという名称で思い出されること

は、昭和20年の3月下旬、33軍司令部は司令部だけを率いて単独で転進し、メイクテラ会戦の指揮を命じられたことで、これも戦史叢書で初めて知ったことである。方面軍は一つも計画性がなく、その上、敵情判断の杜撰なことの結果だと思っている。（52頁地図参照）（上はカローの街並み）

錚々たる人物だと自認している方面軍幕僚は、作戦指導に確固とした方針を持たず、素人が将棋の駒を動かすような状態では、勝ち目がある筈がない。

優秀で錚々たる高級将校だと自惚れている人達を見ると、殆どの人は軍の中樞部勤務ばかりで、第一線の経験がない。嘆かわしいことだが、兵力の逐次使用の弊害すら忘れて、戦闘を指導していたのであった。

「負け戦を経験しない指揮官は名将になれない」と云われているが、負け戦を身を以て体験した名将であれば、此の状況では一挙にビルマ南部にまで後退し、敵を疲労させて補給路を延ばし、全軍がゲリラ式戦法に転ずべきであった。勿論、一大隊長に過ぎない私には情報もなく、戦史叢書を読んだ上の判断である。

バスの車窓からシャン高原の地形を眺めながら、数々の思い出に耽っていると、もう日は中天高く昇っていた。山の上の町カローを通過すると地形は一変し、重畳として幾重にもかさなる連山が次から次へと現れ、何十何百の数え切れないヘヤピン・カーブの連続であった。この地形では、大量の戦車や重砲を擁する敵軍の來攻が、遅かったことが理解できるのであった。

戦史叢書を読み、今このシャン高原のカローから、イラワジ河流域の大平野に下る連峰を目にすると、装備劣等で戦車も飛行機もない我が軍の戦法としては、南北に戦闘をしては防ぎきれない。何故、山岳地帯と河川の障害物のある東西に地形を利用して、戦場を選ばなかったのであろうか。

ラングーンの方面軍司令部はインパールの敗退と同時に、先を見通してモールメン付近に後退すべきではなかったか。そうすれば中間軍司令部も後方

に後退し易く、東西に戦闘を挑むことも容易ではなかったか、と思われる。兎に角、高級司令部は大都市から離れがたいようであった。

戦闘のために必要な条件は「時、場所、智恵、金（補給や装備）」であるといった、様々な思いが車中の我が脳裡を駆け巡り、既舎から放たれた馬のようになって、疲労も不安も吹っ飛ばして回想に耽っていた。

山間のやや闊達として開けた部落でトイレ休憩となった。ジンマーベンという山間僻地の村だが大きなレストランがあり、店の前には「焼津グランドホテル」と書いた日本製の中古マイクロバスが、一行の目を引きつけていた。

店に並べられた品は中国製品ばかりで、恐らく華僑の店であろう。中国国境に近いシャン高原は中国からの輸入が盛んで、日本人客も訪れるのであろうか。トイレには男・女と漢字で書いてあり、丁寧に→まで書かれていた。

街道を歩く村人たちはシャン族ばかりで、ロンジーを着用し、カゴを頭の上にのせて歩いていた。懐かしい思い出の深い光景であった。

峨々たる連峰の断崖が続くヘアピンカーブの山道を、バスは灰色の土煙を濛々とあげて下った。シャン高原の広大さに驚いているとラインデの町であった。（右はシャン高原の峨々たる連山）



ラインデ（57頁地図）からの道路は依然として悪路であったが、地形はイラワジ河流域の平坦な大平野となり、至る所に大菩提樹が生えていた。戦いの最中に大樹の陰に隠れて敵機の目から逃れたが、当時の恐ろしさを忘れて今では懐かしい思い出となった。

『サジ』

間もなく、タウンジーに通じている鉄道線路が見えてきた。踏切は一段と高く盛り上がり、右手には駅舎があり数本の線路が延びていた。この駅はラングーンとマンダレーとの中間駅として有名で、名称だけは私の記憶に残っていた。

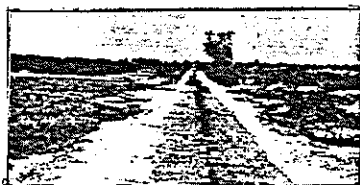


メイクテーラ会戦を指揮する命令を受けた33軍司令官本多政材中将は、軍司令部だけを連れ、カロー西方の大和村に急行し、このサジ付近で戦力半減した疲労困憊の18師団や49師団を、掌握できたのであろうかと思いつつサジを通過した。さぞかし両師団の将兵は土人形のように進んだことだろう。（上はサジ駅の景観）

バスは鉄道線路沿いに、綿畑の中を伸びる道路を西進すること約1時間、太陽の光線をキラキラと反射している湖水が展開してきた。戦史叢書を熟読してきた私は直ぐメイクテーラだと直感し、目を皿にして凝視していた。

『メーカーラ』（位置は57、58頁の地図参照）

メーカーラには2つの湖水と、東西南北に4つの飛行場があった筈で、先に2000輛の敵の機甲部隊に侵入されたメーカーラに対し、傷ついた日本軍が攻撃することは愚の骨頂で「螻蛄の斧」に等しく、不成功に終わることは明らかであった。

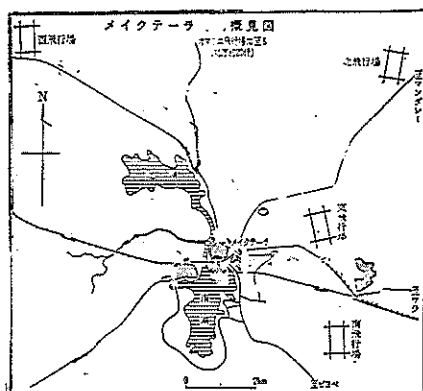


血の臭いが覆っていたと思われる市街地の外郭を迂回して街に入り、メーカーラ・ホテルで昼食となった。
（上の写真はサジからメーカーラに通じる街道、中央の線が簡易舗装道路）

当時の戦況を想像すると、巨象のようなM4戦車の大群が日本軍を蹂躪し、命令に忠実な将兵は死生の巻を彷徨ひながら戦い、生きた心地がしなかった阿鼻叫喚の地獄であったと思う。

天から注ぐ焦熱と地から沸き昇る地熱にあぶられ、戦車が巻き上げてくる土煙が、汗にこびりついてくる戦況が目には浮かんで来ると、食事のことも記憶に残っていない。

現在のメーカーラは人口約5万人で、内陸の中央部に位置して産業、交通、軍事、観光の要衝となっている。乾期になると大地に虹色の陽炎が立ち上り、海を思わせるメーカーラ湖をひととき美しくさせると云う。



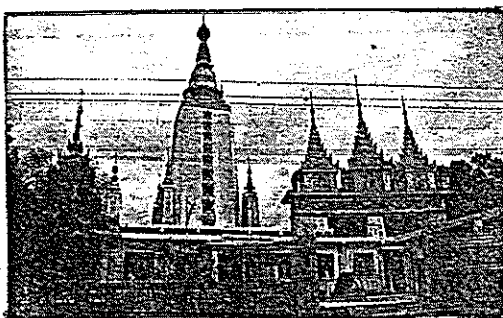
1000年以上も昔から王や王妃が船遊びをしたり、静かに余生を過ごしたバガン王朝の静養地であった。しかし今では古都を偲ぶ面影は湖水だけになってしまった。これは数十万の人が死傷した激戦のために、廃墟となったからである。勿論、地元の人も大勢亡くなっているのである。
（上はメーカーラの概要図）

【日本軍戦没者慰霊塔】

メーカーラ・ホテルでの昼食が終わり、南湖の縁を通って殷賑を極めていた市内に入ると寺院が建っていた。するとガイドはバスに徐行を告げた。そこには白色に金色の日本軍戦没者慰霊塔が建立されていた。

ここに祀られている将兵こそ憂慮と焦慮の大渦の中に呑み込まれ、一片の木の葉のように亡くなったと思うと、目頭が熱くなってきた。

早速、車窓から急いでカメラのシャッターを押したが、メーカーラでは思いも寄らぬ旅の収穫であった。しかし下車できなかつたのは残念である。



何れの師団も現地の慰霊碑建立には熱心である。メイクテラにも戦後、亡き戦友たちの供養にと、日本人が絶えることなく訪れていた。そして、国家や人種にとらわれず凡ての戦死者を弔い、さらに世界の平和を祈るために、「世界平和パゴダ」がこの地に建立された。これを「日本ビルマ世界平和ナガヨンパゴダ」と命名した。（前頁下の写真が世界平和パゴダ）

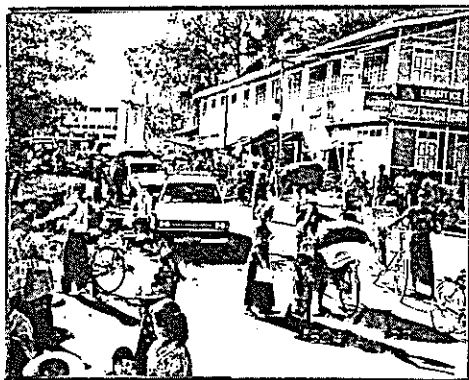
ビルマ側からはナラパティ王が1202年に創建したという、ナガヨンパゴダと66万㎡の敷地が提供され、日本側の浄財によって高さ33m、面積793㎡の堂々たる平和記念のパゴダに装いを改め、1987年11月4日ティーティンボエ（傘蓋奉納式）が10万人余の参詣者とともに行われた。

黄金のティードー（宝輪）と銀塊の尖頭には無数の宝石が輝き、塔内には仏舎利と真紅のルビー仏4体が、金銀製の容器に収められている。

ナガヨン（龍神）の住むところと云われるメイクテラ湖にその姿を映すとき、南国の安らかな風景が醸し出されると聞いている。

ブッダの光に照らされたビルマと日本の交流の一大拠点として、此の街がこれからも一層の発展することを祈り、慰霊塔の前を離れて行った。

このメイクテラ会戦以降の日本軍は、恰もスペイン戦争におけるナポレオン同様に、底なし沼にはまることになった。（上はメイクテラ市街の景観）



『ポッパ山』

メイクテラの市街を離れると、再び満州のような広々とした荒野の世界となり、地平線に囲まれた死の風景の街道を走り続けた。無聊を慰めるものは何もなく、2時間ばかり経過すると遙か北側に山岳の影が現れてきた。これがポッパ山だろうと思った途端、元氣を取り戻し胸の鼓動も高鳴り始めた。

しかしながらバスはどれだけ走っても、不思議なことに山に近ずいて行かない。（右はポッパ山の遠景）

後刻に気がついたが、それはバスが山の周りを大きく迂回し、東から西へと移動してただけで、少しも接近しなかったのである。



山影が見えだしてから1時間余りで漸くポッパ山の麓に近いて来た。乾き切った砂礫の大地を焼き焦がすように陽は照りつけ、其処にただ一つ現れて

来た部落がポッパ村であった。この村は大草原の中にある樹木も生えたオアシス的な存在で、ポッパ山の名称もこの部落名から名付けられたのであった。今回私も初めて知った地名で、戦史的にもメークテラ会戦では有名である。

ポッパ村を通り抜けた所はやや開け、信仰の山・ポッパ山の名峰を撮影するには最も適した所で、一行は下車して盛んにシャッターを押していた。

大広野の彼方から眺め続けてきた高い山が大ポッパ山で、その頂上には白いパゴダが見えていた。大ポッパの手前に死の岸壁のように聳えている尖った山を小ポッパ山と呼び、一行が登山する山であった。

(上の写真の左側が大ポッパ山、右側の麓の尖った山が小ポッパ山)

写真撮影が終わり、バスは右に見える神秘的な感じの小ポッパ山を眺めながら、登山口へと急坂を登って行った。

大ポッパ山はバガン東南50キロに位置する標高1,518mの山で、この国の土着宗教である「ナツ」信仰の中心をなす聖地である。

大ポッパ山の山裾には、火山の噴火によって出来た標高736mの岩山、「小ポッパ山」が聳えている。この頂には「ナツ神」(後記する)を祀る祠やパゴダが建てられ、バガン王朝の時代からナツ信仰の中核であった。

その神々しい存在感の充実した小ポッパ山の姿は、遠い昔から人々の想像力を刺激してきたに違いない。その信仰の的の山に向かって健脚の一行は、700段もあるコンクリートの階段をゆっくりと登り始めた。

私と妻は日本を出発する時から、登山しないと決めていたから、別に悔しいという思いはなく、望遠レンズで頂上一帯を眺めながら、神秘的に見える山頂の状態を想像していた。

そのころから大荒野を焦がしていた太陽は、西の果ての地平線に沈んでいった。夕闇の薄暮は次第に暗黒さを増し、肌に一陣の涼風を感じてくると、何回か緋いたメークテラ会戦の様相が、自然に脳裡を走っていた。

ポッパ山付近は15軍と28軍の作戦区域の境界線であった。そのために両軍ともに配備はうすく、代わりにインド国民軍第2師団が警備を担当していた。バガン付近のイラワジ河を渡河した敵の大機甲部隊は、このポッパ山を目指して来襲し、我が軍は蹂躪されて支離滅裂になって戦ったのである。



(上の写真は小ポッパ山の頂上)

「ナツ神」

スリランカから伝来したビルマの上座部仏教は、仏舎利信仰と菩提樹信仰とともに伝わってきた。仏舎利信仰に比べれば菩提樹信仰は稀薄となった。そして、ビルマの土着信仰である「ナツ神」の頂点に「帝釈天」を置き、仏教の守護神とした。こうして神仏混浴による独自のビルマ仏教を開花させた。

ビルマ人の家屋に入ると、金箔の小さな仏像を安置した仏壇とともに、ココヤシの実をぶら下げた柱を必ず見かける。(ビルマの仏教では日本と違って死者の霊を祀ることはしない。従って亡き血縁者の法名を書いた位牌を置くこともない)

柱は南東部にあり、ココヤシの実には赤い布が巻きつけてある。家を護る目に見えない精霊神「ナツ神」にココヤシの実を捧げ、ココヤシの果汁を飲んでもらうためである。

暑い国のビルマでは暑さは人間の敵であり、さまざまな災厄をもたらす元凶と考えられてきた。暑さは、いろいろの心配事をも意味している。

一方、涼しさ、冷たさは人間の味方で、平和や安らぎを与えてくれるものと考えられている。樹陰、水、そしてココヤシの実の冷たい果汁は、暑さ、即ち心配事や災厄を除いてくれる、安らぎの象徴なのである。

そこで家を守るナツ神「精霊神」にココヤシの実の冷たい果汁を飲ませ、火事を始め、暑さが元凶で起こる様々な災厄を除こうと云う、家内安全の祈願をするのである。(家庭不和も含めて)

ビルマでは、現世において永遠の功德を積んだ者は、死後、理想の天国である「ナツ国」に行ける。ナツ国には老いや病の苦しみがなく、現世の365日がナツ国の1日に相当し、長命が保証されていると信じられている。

小ポッパ山には仏教の守護神の帝釈天を始め、37神が合祀されていると云われている。ここで思い出されたのは、シュエダゴンパゴダ(28頁)でガイドが説明した神様であった。

蒼穹の下に岬々たる断崖を形成していた小ポッパも、夜の扉に包まれると、満月に近い青白い月光が大ポッパの上に照りだし、水の如く清らかな月光を頼りに、バスは標識もない砂漠の道を走った。

漸く2時間を経過した。いよいよ「パガン」だと、記憶の底に沈んでいた思い出を呼び起こし、猫の目ように注視していたが、ライトに照らされるのは牛車の轍ばかりで、母なるイラワジからは香りさえ匂ってこなかった。

やがて点々と続く街の外灯が薄ぼんやりと、疲れ切った網膜を刺激してきた。宿泊地は最近開発したばかりの「ニューパガン」で、オールドパガンの西南の小さな村に過ぎず、呆れるほど鄙びた田舎であった。

280kmを13時間もかけてクラスワン・ホテルに到着したのは20:30で、骨の髄まで疲れ果て、身体の芯まで揺れている感じであった。

メークテラ会戦 (下図参照)

52頁に記したように3月12日、ビルマ方面軍は33軍に対し「本多33軍司令官は軍の指揮を56師団長に委だね、軍司令部のみを率いて成る可く速やかに「大和村」に転進すべし」と打電した。

該電報を受領した33軍司令部では、何のための転進かと幕僚間でいろいろと議論したが、よほど重要な緊急事態が突発したのであろうと推察するだけで、結局は行ってみなければ判らないことであった。

これは我が大隊がラシオからシポウに後退する以前(3月中旬)の時期であり、33軍では隷下の菊18師団は15軍に配属中で、援蒋ルートへの遮断は我が56師団のみとなっていたのである。(私は初めて知る)

33軍司令官以下は3月16日、カロー西方のチーク林の中にある「大和村」のバラックに到着した。その夜半、方面軍参謀長田中新一中將も大和村に到着し、次の要旨のビルマ方面軍命令が伝達された。(上はイラワジ会戦からメークテラ会戦への転換図)

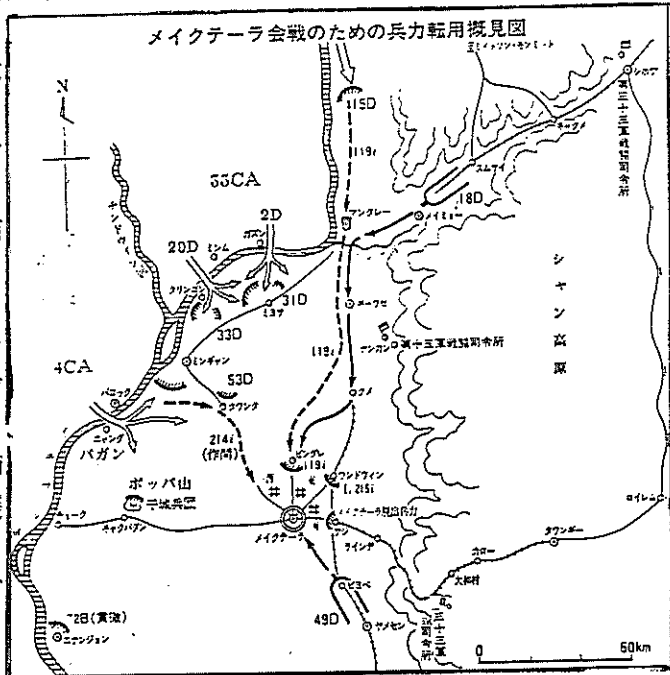
「33軍司令官は3月18日以降、18師団(歩1ヶ聯隊、砲1ヶ大隊欠)及び49師団(朝鮮で臨時編成し、兵員の3分の1は朝鮮人)を併せ指揮し、メークテラ方面の敵機甲兵団を撃滅すべし」(これも初めて知った)

この命令を受けた対戦車砲もない33軍司令官以下が、当惑したことは推察できる。当時のメークテラ方面の状況は次のようであった。

最初にメークテラに駆けつけた49師団の吉田聯隊は3月2日、敵機甲部隊に蹂躙されて壊滅的な損害を蒙り、吉田聯隊長は同日の戦鬪で戦死した。また49師団の主力は、3月8日頃からメークテラに近迫して交戦中であつたが、敵戦車の反撃によって損害続出の状況であつた。

菊18師団は3月6日からメークテラに対する攻撃を開始し、3月15日の夜襲によって東飛行場を占領したが、翌16日に奪回されてしまった。

急遽、シポウから転進して大和村に到着した33軍司令部は、いきなり、



この複雑な戦局を担当させられ、軍司令官以下当惑せざるを得なかったことだろう。

ビルマ方面軍は33軍司令部の抽出に伴い、56師団長に対し「56師団は方面軍の右翼の支柱を形成し且つシャン州を安定確保すべし」と下命した。

33軍がメイクテラ会戦に臨もうとしていた時、15軍のイラワジ戦線は既に破綻に瀕しており、逐次マンダレー南方地区に敗退中であつた。

何人が考えてもメイクテラ会戦の前提条件は、「イラワジ南岸の戦線が（15軍の担当）メイクテラ会戦の間、持ちこたえていること」である。それがメイクテラ会戦の前から、早くも崩れていたのであつた。

『メイクテラ失陥の状況』（33軍の18・49師団が攻撃開始以前）

2月21日、ニヤング（パガン）付近の橋頭堡から発進した英軍第4軍団（4CA）の機械化兵団は、2月26日にメイクテラ西飛行場に突入し、その後同地で攻撃準備を整えたのち、28日から総攻撃に移った。

3月1日、2日の両日の戦闘で日本軍守備隊の抵抗を破碎し、更に3日は市街地の掃討戦を行い、同夕刻には完全にメイクテラを占領した。

この攻撃に参加した英地上軍の兵力は、第17インド師団及び第255戦車旅団である。

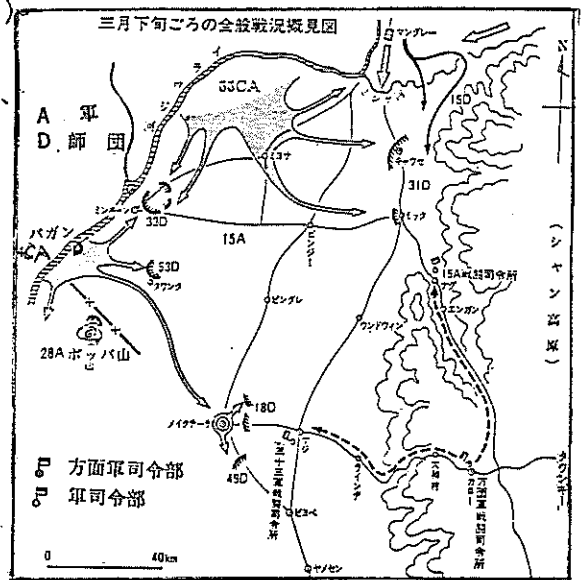
メイクテラ失陥まで、この地の防衛に参加した日本軍は概ね下記の通り。第2野戦輸送司令部（司令官粕谷中将）、兵站輸送部隊（若干）、兵站勤務部隊（若干）、通信隊（若干）、兵站病院、第52飛行場大隊、第84飛行場大隊、歩168聯隊（吉田大佐）。

以上の合計は3200～5000名で、戦闘部隊は吉田聯隊だけである。（上は3月下旬ごろの彼我の戦況要図）

圧倒的に優勢な兵力の英軍の攻撃によって市内は突破され、多くの日本兵が倒れた。その抵抗は熱狂的且つ決死的であつたと英軍戦史は述べている。

『メイクテラ攻撃』

菊18師団、狼49師団の両師団には当初、攻撃目標や攻撃要領に関する統制もなく、その結果、49師団は18師団が東飛行場の争奪に死闘してい



たとき（3月16日）、すぐ南方で同じ飛行場に対する攻撃準備を進めていた。（右はメイクテラ攻撃要図）

また方面軍命令によりメイクテラに斬り込み込みを命じられた小松原遊撃部隊（斬り込み専門部隊）は、18師団に連絡せず、独り東飛行場に飛び込んで大損害を受けた。

方面軍は無計画に手当たり次第に部隊を差し向けただけで、18師団は49師団の状況も小松原遊撃隊の斬り込み計画も知らぬまま、師団主力を以て飛行場攻撃を行い、第1回の攻撃は失敗に終わった。

このような連絡不十分は戦場の常だが、33軍に於いても無線機の数が不足して連絡がとれなかったと、戦史に記事を遺している。

方面軍は連絡云々というよりも、敵の機甲兵団は戦車200輛、自動貨車2000輛以上という大戦力である点を無視している。

優勢な敵軍の中を彷徨い、小舟のように敗走した我が軍を、素手で戦車に当たらせる方が無理難題な注文で、錚々たると思いたい方面軍の幕僚たちの頭脳の程度を疑うのである。

彼等はエリート群だと自惚れているが、実際は総ての人達は実戦を経験しない鈍物ばかりで、ペーパーテストだけの優等生に過ぎないのであった。

詳しい戦闘記は割愛するが、このようにして方面軍が1ヶ月にわたり、執拗に追求してきたメイクテラ奪回の執念は、3月28日の夜をもって遂に放棄のやむなきに至った。

3月28日、本多33軍司令官は田中方面軍参謀長に対し、「メイクテラの奪回は断念し、15軍の退却を収容したい」と申し出て、作戦任務が転換した。後日、「メイクテラの英軍も非常に苦戦で、メイクテラ放棄の命令を起案していた時、日本軍が退却したので一息ついた」と述べている。

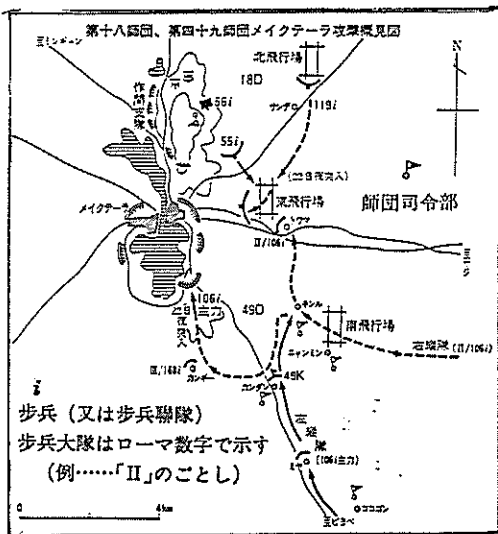
しかしこの際、より大きな犠牲を払ってメイクテラを占領したところで、全般の態勢を挽回できるものではなく、むしろ適時に断念して良かったと、戦史を読んだ私は思っていた。

「メイクテラ会戦の損害」（3月10日～4月13日）

「18師団」戦死580、戦傷426、行方不明563。

「49師団」戦死4150、戦傷死10、戦傷753

メイクテラ会戦の戦果は、戦車炎上20輛、擱挫32輛で、敵戦車1輛



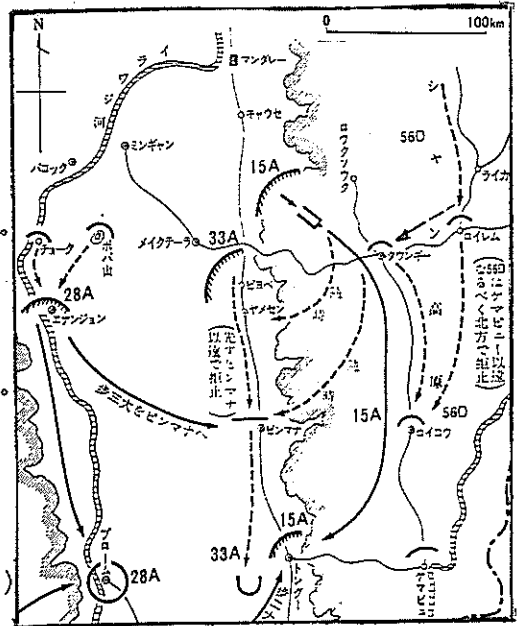
を破壊するには火砲1門と兵員50名の犠牲が必要という計算になる。したがって、メイクテラに残存する約100輛の戦車を破壊するためには、更に100門の大砲と5000人の損害を覚悟しなければならなかった。

イラワジ及びメイクテラ両会戦の圧倒的な戦勢を利用し、一挙に首都ラングーンまで南下しようとする連合軍の企図が推察される。そこで差し当たっての緊急問題は、全戦線にわたって混乱に陥っている第15軍の態勢を至急整理することであった。そこで次のような命令を下达した。

15軍は速やかにシャン高原方面からトングー付近に転進し、同地区で突進する英印軍の阻止、邀撃を準備し、成し得る限り縦深に陣地を占領すべし。
(右図の右側が15軍の行動)

33軍は差し当たりピンマナ北方で英印軍の追撃を遅滞させ、15軍のトングー転進及び邀撃準備を援護すべし。その後、トングー南西方に後退し、15軍と策応して英印軍を邀撃すべし。
(右図の中央が33軍の行動)

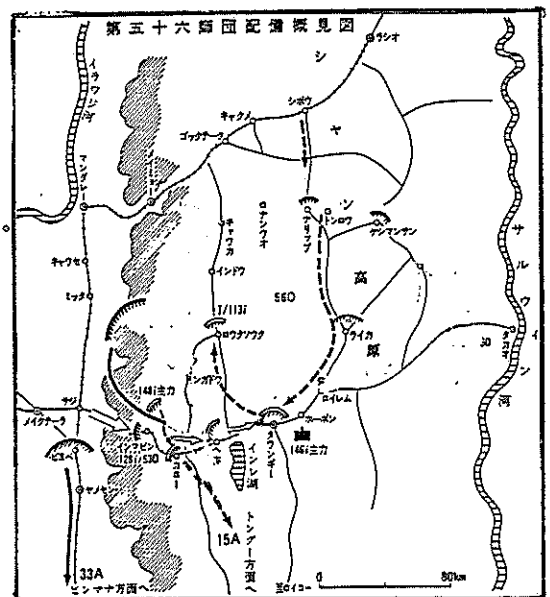
28軍はエナジョン以遠に於いて敵の進攻を拒止すべし。(右図の左側)
(右は15軍、33軍の転進要図)



『我が大隊の行動』

メイクテラ会戦が以上のような結果となると、我が大隊は急遽ライカからタウンヂー方面に急派された。それは15軍の退却援護及び英印軍のシットン河への侵入を阻止する目的であった。

当時の私は全般の状況は知らされておらず、ひたすら命令の通りに大隊をタウンヂーに向かって移動させていた。今回、初めて戦史叢書(252頁)を繙いて戦況を理解したのである。(右図参照)



以上のような経過で、龍56師団は爾後5月末頃までの約1ヶ月以上、タウンヂー～ハイホ～カロー付近を占領し、シャン高原に於ける方面軍の右翼の根拠地を確保した。(前頁地図参照)

ここでメイクテラ会戦を振り返って推察すると、著しい数の大砲の咆哮や間断のない敵機の爆撃、地面がぐらぐらと揺れるほどの大戦車群に対し、第一線部隊は勝利に一縷の望みをかけ、背筋が凍り付くような思いで戦ったことだろう。

しかし第一線部隊とは反対に、高級司令部は当初から判断が杜撰で、戦闘を甘く見たと思われてならない。無手で戦う勝ち目のない戦闘で、死を強要された数多くの若者に申し訳が立つのかと言いたい。

私は戦場に立って戦闘に臨む時には、常に「必要性と可能性」を考えていた。それは実戦場に生きてきた私は多くの死を見てきたからであり、責任感からであった。しかしビルマでは可能性は殆ど考慮外に置かれていた。

人生はたった一度しかなく、人は一度しか生きることが出来ないのだと思うと、計画は慎重の上にも慎重でなければならない。実際に戦闘を知らない人がプランメーカでは負けるのは当然である。

この戦記のキーを叩いていても、我々のように常に最前線に立っていた者は、その戦況を想起しながらパソコンに向かってるのである。最後ながらメイクテラの街の寺に建立されていた、白亜の慰霊塔に対し心から御冥福を祈る次第である。

【付記】メイクテラが連合軍に奪回されるとビルマ国軍は反乱を起こし、敗走する日本軍にとっては痛恨の極みであった。

(下図はビルマの神々)



パガンの歴史

パガン王朝はビルマ族による史上最初の統一国家（1044～1299）である。イラワジ河中流の東岸に現在も当時の都パガンの跡が遺っている。都城のパガンが築かれたのは9世紀中頃で、イラワジ河畔に点在していたピュー族の小集落19ヶ村が、その基礎となった。

パガンが王国として確立されたのは、アノーヤター王（在位1044～77）の登場後である。王は周辺諸部族を征服し、イラワジ河流域の平地を中心に王国を築いた。

1057年には南部ビルマのタトンに遠征し、国王マヌハをはじめ多数のモン族の捕虜をパガンに連行した。パーリ語一切経の入手が直接的動機とされるこの遠征によって、パガンにはモン文化がもたらされ、ビルマ族はモン文字を用いてビルマ語を書き表すようになった。

在来の土着信仰や大乘仏教の勢いは、タトン伝来の上座部仏教の浸透に伴い弱まった。アノーヤターは大乘仏教を単に上座部仏教に置き換えただけでなく、アリー僧という民衆に君臨していた既成の権威を排除し、パガン王権による新しい政治秩序を確立することであった。

彼の死後、即位したその子ソーラー（在位1077～84）は、モン族の反乱で殺され、後を継いだチャンシッター（在位1084～1113）は、モン文化の熱心な擁護者であった。

王位はその孫アラウンシードゥー（在位1113～63）を経てナラトゥーに引き継がれたが、侵入したセイロン人に殺された。パガンの王統はその後10年近く断絶したが、ナラパティシードゥー（在位1174～1211）の出現で復活した。

パガンではこのころからモン文化が衰え始め、代わってビルマ文化が興隆した。バラモン教や大乘仏教と混交していたタトン系の仏教は、セイロンで修行した僧チャパタが1190年に帰国すると、セイロン直伝の大寺派系上座部仏教に取って代わられた。

この上座部仏教の浸透に伴い、パガンでは仏像の造像や堂、塔、伽藍の建立が盛んとなり、王都パガンでは夥しい仏教建築物によって埋め尽くされた。伝説によれば、その数は440万を超えたという。これらは総て煉瓦づくりで、円錐形または覆鉢形をしたパゴダ（仏塔）と、内部の祀堂に尊像を安置した寺院とに分かれている。

当時の建築物はビルマ美術の一つの極致であり、外壁には漆喰による鬼面や蓮華模様の装飾浮彫が施され、内部の壁面には礼拝堂、祀堂を問わず仏伝や本生図などの壁画が描かれている。しかし200年以上も続いた仏塔寺院の建立と、それに伴う土地や奴隷の奉納は、パガンの国家財政を消耗し、国

力を著しく疲弊させた。三宝に寄進された土地は免税地とされ、奉納された奴隷たちは政治権力の支配対象外に置かれたからである。

13世紀後半になると、元（中国）からの入貢・臣従の要求という外部からの衝撃も加わった。パガンはその要求を拒絶したため、1277年から87年までの10年間に4回も元の征討を被る結果となった。

結局、パガンの王権は元に隷属することによって、かろうじてその存続を認められたが、政治の実権は東部山地から進出してきた新興勢力のシャン族の手に奪われ、99年に王朝は廃絶され消滅した。

「パガン」はインドネシアの「ボロブドゥル」と、カンボジアの「アンコールワット」とともに、アジアの三大仏教遺跡と称されている。また日本の仏教界における「空海」と「最澄」の両巨峰が、今から1200年前に現れたのと時を同じくして、ビルマのパガンにも仏教が繁栄したのであった。

「ボロブドゥル」

8、9世紀に造られたが長く地中に埋没していた。1814年に発見。

基壇は一辺約120mのほぼ正方形で9層をなしている。高さ30m、

中央に大塔があり、その周囲を多くの小塔が取り囲んでいる。

（火山岩で出来ている）

「アンコールワット」

都の寺の意で石造りの寺院遺跡である。12世紀の前半に建造され、

建築、浮彫はクメール美術を代表している。（私は両方とも見学）

パガン仏教遺跡の観光

1月10日の朝を迎えた。20年前に訪れたことを思うと、時代の移り変わりは激しく胸に迫るものがあり、人生を回顧する静寂な一時でもあった。朝日に照らされたイラワジ河の対岸の峰々は、私がビルマ作戦の生き残りの一人として、再び訪れたことを歓迎しているように見えていた。

パガンの仏教遺跡巡りの記念にと、初めてロンジ（一種の腰巻きスカート）を着用すると、ビルマ人になりきったような気分であった。ビルマの人は都会の人でも未だに洋服を着ない。洋服は軍人や警察官、ホテルのボーイ等の限られた人だけのもので、世界の舞台に立つ政治家でも洋服を着ると人気はなくなるから、何時もロンジを着ている。その証拠にスーチー女史もロンジ姿だ。これはビルマ人の心の中はまだ、昔のままだと言うことである。

昨夜遅く到着したクラスワン・ホテルはパガンの場末のニュー・パガンにあった。オールド・パガンかニアンウでなければ遺跡も見えず、朝の散歩も冥土へ通じる牛車の轍のような道路では、痛い脚の私には不適當であった。

9時に出発したバスは、オールド・パガンの遺跡が点在する中を通過して行った。微かな記憶の糸をたぐりながら呼び戻すことに懸命だったが、アーナンダ寺院以外は記憶がなく、哀しいかな老い耄れを感じなければならなかった。

詳細な記事は前回の紀行文に記述済みだから割愛し、印象の深いことのみを書き残すことにした。(下のパガンの地図を参考)

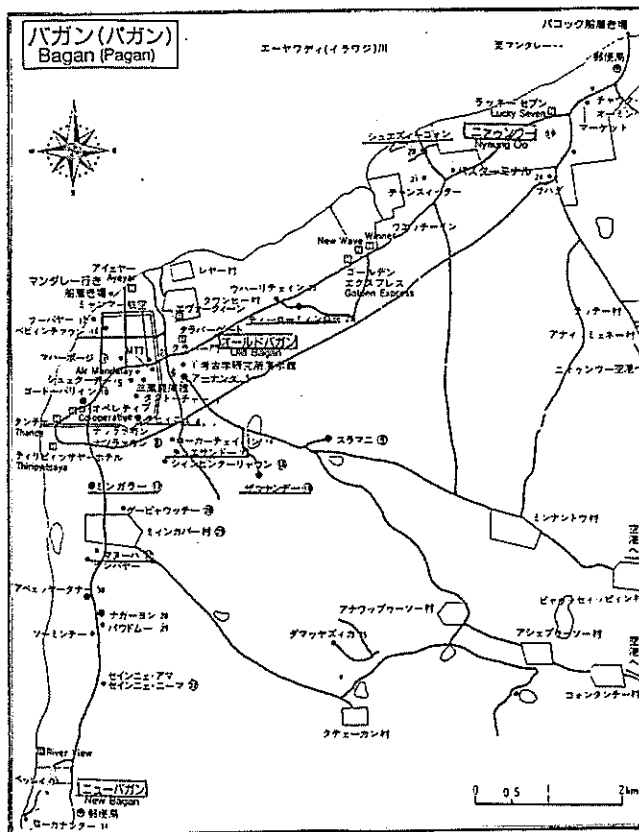
やがてバスはニャンウの町にさしかかり、天空に燦然と輝く黄金のバゴダが聳え立つ寺院に着いた。

ここがアーナンダ寺院と並んでパガンを代表する『シュエズイーゴンバゴダ』で、スリランカから贈られた釈迦の歯と骨が納められていると、言われている。そしてビルマ中のバゴダの原型となっている。

パガンの栄華は1044年42代の王としてアノヤーターが即位した時に始まり、彼がタトン国を征服した記念に建設に着手した。最初はイラワジ河の岸に建てられたが水害がひどく、後に現在の位置に移された。

アノヤーター王はビルマの偉大な王とされる3人の王の一人で、パガン王朝の中興の祖である。王は遠く南紹(雲南省の大理を中心とした王国)にまで遠征した。ビルマの国土は雲南方面に対してよく開け、道路が通じていたから、古来、北ビルマは雲南方面の豊かな経済市場や労働力を手に入れ、国威を誇示しようと遠征したのであった。

名称の「シュエ」は黄金、「ズイーゴン」は砂の川岸という意味で、ラングーンの「シュエダゴンバゴダ」と共に、ビルマを代表する黄金の塔である。11世紀に建立されたこのバゴダは、国中のバゴダの原型となった。又、珍しいことに、普通は同じ敷地内に相容れない土着信仰の「ナツ神」がこのバゴダには祀られている。



残念ながら関節痛に悩まされている私は、寺院の入口まで行くのが限度で、直ぐバスに戻って一行の戻るのを待っていた。

車窓から眺めるビルマ人は何時間もそこに坐っていて、さながら極楽の楽しみに浸っているように陶然としている。一人の老人は座禅の形をしていたが、崩れかけた骸骨のようにも見えていた。

ビルマ人は大人しく、弱く、貧しく、しかもそれに安住し、ただ静かに静かに生きている。そして、ひたすら心の救いだけを求めているのだと感じながら、彼等を見つめていた。

だからこそ、ビルマ人は財産を惜しげなく寺院に寄進するのであろう。自分らの住まいはみすぼらしいけれど、お寺は実に立派で豪華絢爛である。それを心の支えとして居られるだけ、彼等は幸福だと思っている。

前にも記述したと思っているが、私は近年になって宗教が判らなくなり、信じられなくなってしまった。勿論、宗教には関心はあるのだが、何れの宗教にも隷属していない積もりである。死に就いてはビルマや中国戦線で、いやと言うほど体験し、卒業している積もりである。

「生不認魂、死不認屍」という言葉がある。生きている間はどこに魂があるのか判らず、死んでからは屍がどこに埋葬されているかも判らない、という意味である。

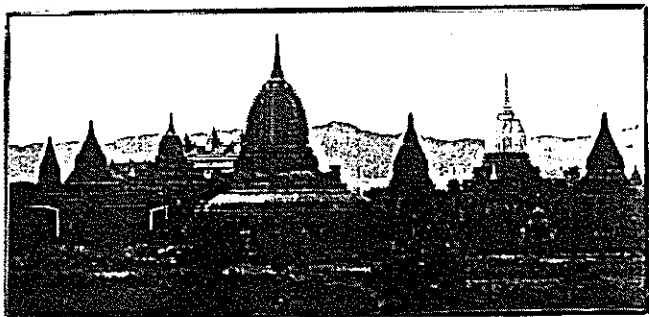
人は死におびえ死を恐れる。しかし本当は死は恐れるに値しない。生きている限り人が魂の存在を知ることが出来ないように、死んでもその人の屍から、死の形や死のありよう知ることが出来ない。人はその程度の卑小な存在である。

独り車中に残り、このようなことを頭に浮かべていると一行は戻ってきた。

次いでティーロミンロー寺院を見学し（私は車中待機）、続いて『アーナング寺院』の拝観に移った。ビルマの寺院で名前を記憶していたのは、ラングーンのシュエダゴンパゴダと、パガンのアーナング寺院だけで、ここは矢張り何かの糸で私と結ばれていたのである。（下の写真の白いパゴダ）

アーナングは漢字では「阿難陀」（或いは阿難尊者）と書く。釈尊十大弟子の一人で釈迦の従弟である。出家後は常に釈迦に従っていたから多聞第一と言われた。それでアーナングとは釈迦の能力を現す意に取られたのかも知れない。

阿難は釈尊在世中、特に最後の25年間は常に釈尊に随侍して説法を聞いており、弟子の中では最も釈尊の説法を記憶していたと言われる。



パガンのパゴダの観光は前回くまなく見て回り、そのうえ我が両膝関節痛のために、今回は車中から眺めるだけにしようと決めていた。しかし、アーナンダ寺院のあの美しい魅力に惹かれて、杖を頼りにゆっくりと境内を歩いた。（前頁の下の写真の右より2ツ目の白い塔がアーナンダ寺院）

前回の記憶とは打って違って変って樹木は繁り、ブーゲンビリアの真っ赤な花が咲き乱れて、僧院も新しく建造されていた。何百何千もあるパガンの寺院の中で、鶏群の一鶴の感じを一段と深め、訪れる者を魅了せずにおかない華麗な空間を呈していた。

パガンを代表する最大で且つ最もバランスがとれた美しい寺院のアーナンダ寺院は、1090年、チャンスイッター王の手で建立された。本堂は一辺が53mの正方形で、4つの入口の中央に聳える塔のバランスは見事である。塔の外観は白色で、歴史の重みを感じさせ、パガンを訪れる者は誰しも記憶に残るであろう。

本堂の中央には東西南北に高さ9、5mの四体の金箔の仏像が立ち、パガン王朝の栄華を誇っていた。その仏像が安置された各御堂の中は、立錐の余地もないほど信者で埋め尽くされ、荘厳な仏教王国の姿を呈していた。

一方、寺院の庭や空地には、ビルマ特有のコブ牛とその牛車が所狭しと押し詰めていた。それは丁度この時期の一週間は寺院のお祭りのため、全国から信者が牛車に乗って寺に集まり、牛車は宿泊に代用されていたのである。この光景は恰もモンゴル・ウランバートルのナーダム祭に於ける、パオとラクダの景観と同じであった。

続いてバスはパガンで最も高いと云われている『ダビニュー寺院』に進んだ。（72頁地図左側の中央）添乗員は日本人戦没者の慰霊塔に参拝するから、線香と蠟燭を持参してきた者は持って行くように告げられた。前回訪れた時には慰霊塔はなかったから、私は一瞬、添乗員の発言を疑ったほどである。

20年前の時には日本人慰霊塔はサガインに一つ立っただけであった。それ以降、政府が遺骨収集に力を入れた関係と、戦友会・遺族会の絶大な熱意によって、慰霊碑の建設が盛んに行われたのであった。

タビニュー寺院に慰霊塔があることも知らず、初めは車中待機と決めつけていたが、早速下車して寺院のパゴダを通り抜けた。境内の一隅に日本人戦没者の小さなパゴダ2基が立ち、その前に「弓兵団戦没者勇士之墓」（右上の写真）や「第15軍鎮魂碑」を始め、



各部隊の慰霊塔や木製の卒塔婆が立ち並んでいた。(右はロンジ姿で参拝を終えた私)

我々ビルマ英霊顕彰会も各部隊を通じて基金を募り、残り少ない命だと懸命に慰霊に努めているが、他の国民が忘れてしまっているのでは、やはり戦没者は浮かばれない。

先日、関西空港からの全日空便は満席で、その人達は殆どラングーン～バガン～マンダレー観光のようだが、果たして日本人として墓前で合掌してくれるだろうか、とっていた。

杖を頼りに墓前に額ずいた私は、妻が渡してくれた蠟燭と線香を各慰霊碑に捧げ、数珠に全神経を集中して慰霊を申し上げたのである。そして今も尚、遺骨が収集されずに野山に埋もれている現状を悲しみ、戦争のもつ非人間的、非人道的、残虐性について反省させられたのである。(右は鎮魂碑の一つ)

現地の慰霊には困難が伴うが、日本国民は、人知らぬ地に屍を曝している英霊を慰める代わりに、靖国神社に参拝して欲しいものである。

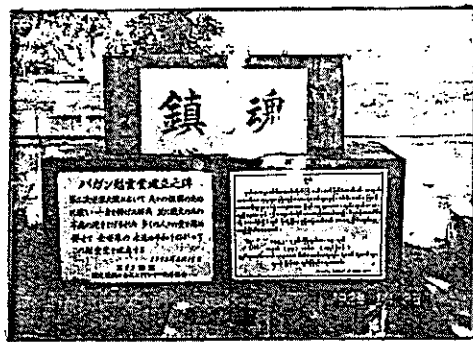
遺族会長であった時は靖国神社参拝は恒例となっていた橋本竜太郎氏は、国民の代表である首相になった途端、中止した心境が理解できず残念でならない。「自ら反(カエリ)みて縮(ナオ)ければ、千万人と雖(イエド)も吾往かん」、と云った精神を貫き、中国や韓国の誹謗を英霊のために恐れてはならない。日本人は日本人である。

一方、明治天皇も大正天皇も昭和天皇も、靖国の英霊に対し神として接し、靖国神社に参拝してこられた。戦後の神道指令後も、昭和44年まで11回の昭和天皇・皇后の御親拝があったが、いつの間にか消えてしまった。

人生は一度しかなく生き直すことは出来ない。その尊い生命に対して、天皇の命令によって召集されて戦場に送られ、血生臭い怒濤の中で己の生命を犠牲にされた英霊に対し、戦争に負けたとはいえ、天皇もその子孫も御親拝されることこそ、命令者の義務でないだろうか。

戦後の象徴である天皇の政治的利用は、憲法上から許されることではないのであれば、尚更、国の代表者である首相は靖国神社に参拝すべきだ。

我々は死期が切迫した老年に達して最近特にその感を強くし、死んでも死にきれない思いである。「国乱れて救国の名宰相を思う」(史記)である。



優しい微笑と黄金の仏塔（パゴダ）の国・パガンの午前の観光は終了し、車窓から旧パガン王宮の跡を眺めてニューパガンに戻り、イラワジ河が遠望できるレストラン「シトゥ」で、人形劇を觀賞しながら昼食を摂った。

乾期の真っ最中のため前回の時よりもイラワジの水嵩は少なく、「国破れて山河在り」の通り、対岸の自然の山並みは悠々として、人事の外に昔の姿を保っていた。

あの山並みの戦跡を眺める我が老心は愁傷に包まれ、芭蕉の「夏草やつわものどもの夢の跡」と同じ感傷を懐いていた。そして連なる山頂の一つに真っ白いパゴダが建っていたのが印象的で、静かで穏やかな神秘的な国のイメージが、我が脳裡に鮮明に残った。

「あやつり人形」は長い間ビルマの民衆に愛されてきた伝統芸能である。ビルマのあやつり人形芝居には、主役である人形たちのナツ神（精霊神）、馬、鬼、ゾージー、（空を飛び地を潜り、棒を振って何でも作り出す超能力者）王子、王女の他に人形師、男女の声優、楽器合奏者から構成されている。

あやつり人形劇は今から600年ほど前の「イワン王朝時代」（明日見学するところ）に、宮廷芸能の一つとして始められた。ラーマーヤーナ物語（古代インドの大叙事詩）のビルマ版などが上演され、その後、マンダレーの最後の王朝時代に民衆芸能として盛んになった。

しかし全土がイギリスの植民地支配下に入ると、街中のあやつり人形芝居小屋は撤収させられ、常設小屋は姿を消して流浪の旅芸人となった。

午後はホテル近くの漆器工房の見学から始まった。ビルマ漆器は木地が竹のため、前は竹藪の中に工房が点在し、ビルマらしい雰囲気があった。しかし現在は市内の店頭の一つとなり、昔の方が懐かしく感じられた。

次いで訪れた『マヌーハ寺院』は下車せずに車内に留っていた。寺院の内部に寝釈迦像があったと聞き、20年前を思い出した。私がビルマの死闘を戦っていた頃、責任の重圧から逃れたいばかりに、早く敵弾に当たって死にたいと思った。前回この寺院で、死ぬことによって自由になれるという想い出を抱いた経験があるから、鮮明に頭の中に刻まれていた。

続く『ミンガラパゴダ』『ダマヤンジー寺院』の外観は、微かに記憶の中に浮かんできたようだったが、本当のところ時間がたっているせいか、記憶は呆けて薄れてしまっていた。年老いると哀しいかな丹念に思い出すが難しいのである。

パガンの観光では恒例になっているのだろうか、日没の美観を見るために『シュエサンドーパゴダ』（シュエは金、サンドーは聖髪）に向かった。我々のツアーだけでなく日本人、白人の観光客も次々と集まり、パゴダの階段を登って行った。

1月ながら熱帯の燃えるような太陽は漸く和らぎ始め、イラワジ河の西山に傾き、夜の張が少しずつ下がり始めた。すると太陽は人々に安らぎを与えるような感じがしていたが、それは夥しい英霊の眠る地のためか、それともパガンという聖地のせいだろうか。

空も肌も木も凡てが固有の色を失い、光と影の生む単彩に塗り分けられ、黄昏が闇に変わるその一瞬一瞬が残光の赤、影の黒、水の白という明確な三色に移り変わっていった。

日没の美観の一刻を撮らんと何回かシャッターを切ると、ちぎれ雲の下に日没の最後の赤い輝きが見えた。

日輪は天空から消え去って地上は黒の世界に移り変わり、イラワジ河畔の山々も漆を流したような闇の暗さとなった。

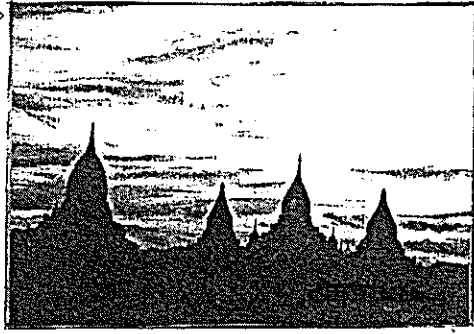
ただ一部の西の空の上に残る表現できない巧妙な残照は、夕焼けに染まって戦中を思い出させていた。

(上の写真はパガンの日没風景、下の写真は夕焼け雲の美景)

又、仏教信者だった母が、毎日の日没の「空」に合掌していたことが思い出された。この世はゼロ(空)となり、宇宙もゼロとなり、人は死ねばゼロとなるからだろうか。

人生は空の空なるものであり、万物は凡て因縁によって起こる仮の相で、実態がないと云われる。自我も存在も空であるとして、母は夕暮れの赤く染まった空を拝んでいたのであろうか。

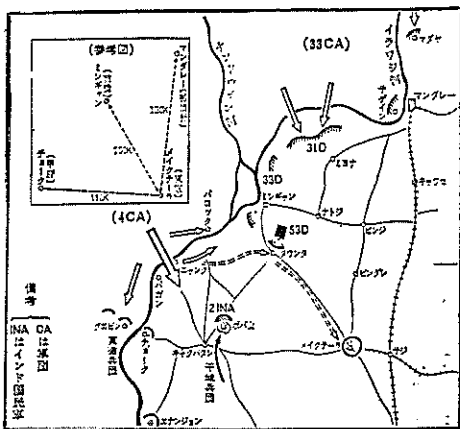
前にも記したが私は特定な宗教には隷属せず、芯から宗教は信じられないし靈魂も認めていない。だから残照の空は明日につながる夢のようだと、眺めていたに過ぎなかった。



パガン～ニャンウ付近の戦闘

イラワジ会戦は我が15軍隷下の15Dと53Dに追尾して南進した英軍19インド師団が、昭和20年1月14日夜、マンガレー北方でイラワジ河を渡河し、我が両師団の河岸配備部隊を攻撃した時をもって開始された。ビルマ方面軍はイラワジ会戦を期待したが、一瞬にして挫折後退した。(当時我が大隊はナンパッカ付近で激戦中で、15軍の状況は全く不明であった)

無謀と云うべき会戦計画は、方面軍や15軍として果たして勝算を見込んで慎重且真剣に立案したのであろうか？



(上はイラワジ会戦図、D=師団)

第一線部隊の実情、特に戦力の核心である火力装備の実態を無視し、ただ強気一点張りの観念論により、恰も図上戦術的な計画を立てたのであろう。

担当する作戦正面、現有兵力、補給能力等から考えても、戦史叢書から判断すると、それは実行できそうもない机上の空論である。

事実、師団の作戦正面は70～80Kの広正面にわたり、第一線歩兵大隊の兵力は精々100名か200名に減少し、大隊砲、重機も各1であった。

この戦力では補給(人員を含む)の完璧な敵軍と、太刀打ちすることは出来ない。イラワジ会戦勃発以降のビルマ全域にわたる彼我の激闘は、5月2日にラングーンが占領されるまで、殆ど一日の寧日もなく続いたのである。

パガン～ニャンウ方面では、敵第4CA第7師団の渡河寸前に、河岸に駆けつけた33師団の歩214聯隊は、第1次の渡河は撃退したものの、第2次以降は優勢な砲撃下に再行された渡河攻撃のため、大損害を被り後退した。



(上は英軍戦車の渡河状況、日本軍には戦車用舟艇はない)

ニャンウ付近の戦闘は前記したように、15軍の作戦区域から28軍の作戦区域に切り替えたところで、情報網の発達していた英印軍は恐らく我が無線を傍受して、両軍の作戦境界線の責任移転の日に渡河攻撃したと思われる。

イラワジ河を渡河した敵は戦車、自動貨車計2000輛という機械化された大部隊で、我が軍の心臓部であるポッパ山を経てメーカーラへと進撃し、イラワジ会戦は敢えなく破綻したのである。

アマラプラ

ニューパガンで1月12日の朝を迎えた。20年前に歩113聯隊出身で大阪在住の松田光男とともに、ニャンウのホテルからイラワジ河畔を散策し、奇石を拾ったことを思い出していた。

あの頃は未だ若く元気澆刺として、魚の飛び跳ねるように時間を有効に利用した。しかし現在は哀れにも年老いて、一行と行動をともにすることさえも、至難の身となってしまった。

8:20発のプロペラ機に搭乗してニャンウ空港を飛び立ち、僅か30分でマンガレー空港に到着した。この空港勤務の元ビルマ軍中尉を松田氏が紹介し、帰国後も何年か文通した彼の面影を思い出していた。

マンガレー市の南側にある空港からバスは市街に入らず、進路を南にとって街道を走り、マンガレー南方約11Kのアマラプラに向かった。

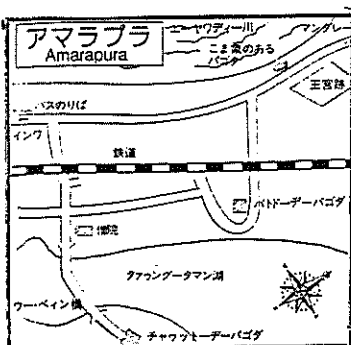
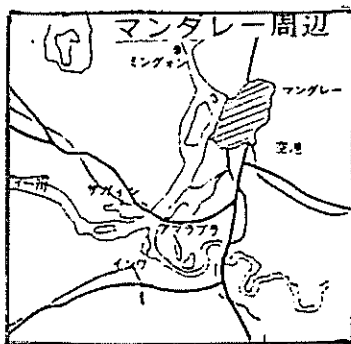
イラワジ河畔にあるアマラプラが王都として栄えた時期は比較的短い。1783年、時の王ボードーパヤーの手で遷都が行われたが、40年後の1823年バヂードー王の手で王都はインワに戻ってしまった。(上はアマラプラの関係地図)

1841年から再び王都とされ栄華を取り戻したが、それも束の間、1857年、ミンドン王はマンガレーへの遷都を決め、1860年にはすっかりマンガレーに移ってしまった。

現在のアマラプラは多くの震災や火災の被害を経て、めぼしいものはマンガレー遷都の際に運び出されたため、見るべきものは僧院だけである。

大樹が鬱蒼として繁ったところでバスは停車した。ここが「マハガンダーヨン僧院」であった。

学校のように見える大きな建物が整然と並び、院内は肅然として声一つなく、多くの白人を交えた見学者も静まり返って、厳かな僧院の空気に染まっていた。僧院の建物の



間のやや広い空間に在家の男女の世話役たちが集まり、大鍋に飯やその他の食事を用意して、時間の来るのを静かに待っていた。

その時間の合間をみて私は、出家して「比丘」になった30才ほどの僧の部屋に、許可を得て中に入った。室内にはビルマ語で書いた書籍が大きな書棚にぎっしりと詰まり、質素な机と寝具の他は簡単な日用品だけであった。

一生を仏に仕え、仏になろうとしている彼は、性欲とも断ち切らなければならず、我々が生命を的にして戦陣に立った時の心と変わらないようである。

「錆は鉄よりいで、その鉄を腐らすが如く、己の悪行によって己を腐らす」と云われているが、日本の政治家や役人は本当に庶民のことを思って、政治をしているのだろうか。あさましい欲望のなれの果てそのものではないだろうか。何時の時代も比丘のように己との戦いである。

やがて各僧院から一列に並んだ僧が大きな椀を衣の下に隠し、しずしずと広場に進んで在家の人達から次から次へと喜捨を受け、順序よく食堂に入っていた。その数は約1000人を超すだろう。日本で言えば永平寺や総持寺のような雰囲気であった。(前頁下の写真は僧が喜捨を受けている風景)

その景観を眺めた私は次のような感想を持った。

○合掌がいかにも坊さんらしく心を込めた礼であった。○ビルマ人の坊さんを敬う心に驚いた。喜捨するのもお布施を出すのも、それは決して只の施しではなく、むしろ自分に代わり、生きとし生きるものを救うために苦行する人々への御礼である。呉れてやるのではなく、ひざまずいて奉るのであった。○我々の時代の日本では若い人は軍服を着たのに、ビルマでは袈裟(僧衣)を着けるのである。この両者の違いは次のようなことだと思われる。

若いころに軍服を着て暮らすような国では、その国民はよく働いて能率が上がる人間になるだろう。袈裟は静かに祈りをして暮らすためのもので、これでは戦争はもとより、勢いよく仕事をするには出来ない。

若いころ袈裟を着て暮らせば、その人は自然とも人間とも溶け合って生きようような穏やかな心となるが、如何なる障害も自分の力で切り開き、闘っていかうという気はなくなるだろう。次に小乗仏教に就て簡単に説明する。

【小乗仏教】

ビルマ人たちが信仰する仏教は「小乗仏教」である。小乗仏教とは釈迦が生前に説き広めた仏教を言う。「小乗」とは「劣った乗り物」の意である。

乗り物というのは、我々を迷いのこの岸から彼岸(対岸)に渡してくれる乗り物に譬えた表現である。それが「劣った乗り物」だと云うのは、小乗仏教においては極く少数のエリート(出家)しか救われなからである。

では、どうして釈尊はそのような劣った小乗仏教を説いたのであろうか。それは釈尊の責任ではない。釈尊の本心は出家したエリートばかりでなく、世の庶民たち、平凡な人々を救いたかったのである。

この救いを高山への登山に譬えるなら、大勢の人々を救おうとして人々をいきなり高い山に登らせると失敗する。そこで釈尊は最初にエリートを考え、即ち専門家の出家修行者を育成し、まず彼等を高山に登らせる。

頂上に立って眺めると、自分たちが登ってきた道よりも、もっと楽に登れる道が見つかる筈だと考える。少し遠回りをすれば緩やかな道のあることも判ってくる。そうした道を見れば大勢の人が登れるようになるだろう。

それを期待して釈尊は出家者に教えを説いた。ところが出家者たちは釈尊の教えは、自分たち出家者だけに説かれたものだと錯覚した。自分たちだけが戒律を守り、自分たちだけが議論し、自分たちだけが悟りを開く、といったエゴイズムの仏教にしてしまった。それが小乗仏教である。

小乗仏教は煩惱（108）をなくすには、どうしなければならないかと問題になる。当然、普通の社会生活をしていただけでは煩惱を断滅することは出来ない。世俗を離れた生活をする必要がある。それが「出家」である。

出家とは釈尊が行ったように、妻子を捨てて職業も身分も捨てることである。そして生産からも離れなければならない。後に中国仏教での出家者は、禪の僧院において農耕などの作業をするようになったが、インドの小乗仏教の出家者は一切の生産活動が禁じられている。文字通りの「世捨人」である。

世捨人だから煩惱をなくすことが出来るが、それに対して反発が起きた。釈尊の教えは、総ての人々を幸福にするためのもので、あなた方の出家者の仏教は「小さな教え」であり、「劣った教えの小乗仏教」である。釈尊の本当の教えは、そんな小乗仏教ではないと主張する人々が出てきた。釈尊入滅後ほぼ500年後のことである。

そして彼等は新しい仏教を「大乘仏教」と名付けた。大乘という言葉には大きな乗り物、多くの人々を救える乗り物、優れた乗り物、の三つの意味がある。「乗り物」とは教えのことで、大乘仏教は、煩惱をなくさず煩惱をもったまま幸福になると云う教えであろう。

だから大乘仏教では在家信者を中心としている。

『ウー・ペイン橋』（79頁の下の地図参照）

僧院からバスはウー・ペイン橋へと移動した。ウー・ペインは、イワンからアマラプラに都が移る際の市長に当たる人物で、彼はイワンの旧王宮から材料を運び、アマラプラの東側にある大きな湖に渡る橋を架けた。（右は湖水に架かるウー・ペイン橋）

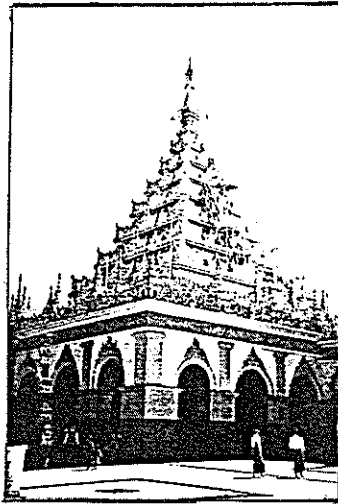


木造のかなり長い橋で修理はしているが、既に200年は経過している。しかし今も現役で生活の役に立っていた。素晴らしい景観で休憩所もあり、人間も何か役に立つものを遺したいものだ。

『アハムニ寺院』

ウー・ペイン橋に次いで訪れたところは、四角形のパゴダが聳えている黄色い寺院で、何となく貴品のあふる空気に包まれていた。

寺院の中に一步踏み込むと、燦然と輝く異様な金塊のようなものが祀られ、その周囲に



信者が集まっていた。（上の左は寺院の全景、右はマハムニ仏）

その金箔が貼られて大きな円くなっている金塊が、釈迦の魂が宿ると信じられている「マハムニ仏」で、いかにも荘厳な感じがしていた。

アマラプラの観光は僧院が主体で、その他は駆け足で回り、バスは急ぐようにアマラプラを後にして、マンダレー王宮へと快走した。前回はマンダレーに2泊してゆっくりと観光したから、今でも詳細にわたって記憶していた。

バスは右手にマンダレー空港を眺めて北進し、サージョーマーケットの角を右折した。懐かしい王城の濠は満々と水をたたえ、マンダレーの顔のように昔の姿で迎えてくれた。

やがて市庁舎を過ぎ、前回宿泊したマンダレー・ホテルの前を通過した。あのホテルの若いボーイはビルマ幼年学校出身者で、当時は日本人客は珍しく、日本語で会話するチャンスだとばかり話しかけてきた。思い出は尽きず、左右前後に視線を移して応接に暇がなかった。

マンダレーの歴史

ビルマのほぼ中央に位置する上ビルマの中心都市で、この国の最後の王朝があったマンダレーはビルマ第2の都市でもある。（人口は約200万）

イラワジ河中流の東岸で、イラワジ河に流入する大小の支流や沼が点在する湿地であったが、1857年、ミンドン王によって新都として建設され、翌58年に完成した。

王城は高さ300mのマンダレー丘の南西裾にあり、正方形で外側は煉瓦造りの城壁と濠とで囲まれている。王城の外周は2400ター（8km）で、

これは仏歴2400年を記念して築城されたことに因んでいる。

王宮は王城の中央にあり、建物は東西300m、南北175m、高さ2mの煉瓦土台の上に建てられている。王宮の建物はすべて木造の平屋建て、屋根は多層屋根でトタン葺きである。柱、軒、壁などには彫刻が施され、塗金、象嵌のある見事な建築である。

これらは1945年3月、ビルマ戦争の戦火で焼失し、前回の訪問の時には復興していなかった。しかし現在は完全に戦前の姿に復元されている。

マンダレーが王都であった時期は長くはない。1853年にパガン王の後を継いで即位したミンドン王は、首都をアマラプラからマンダレーに移すことを決定し、1857年から本格的な王宮の造営に着手した。

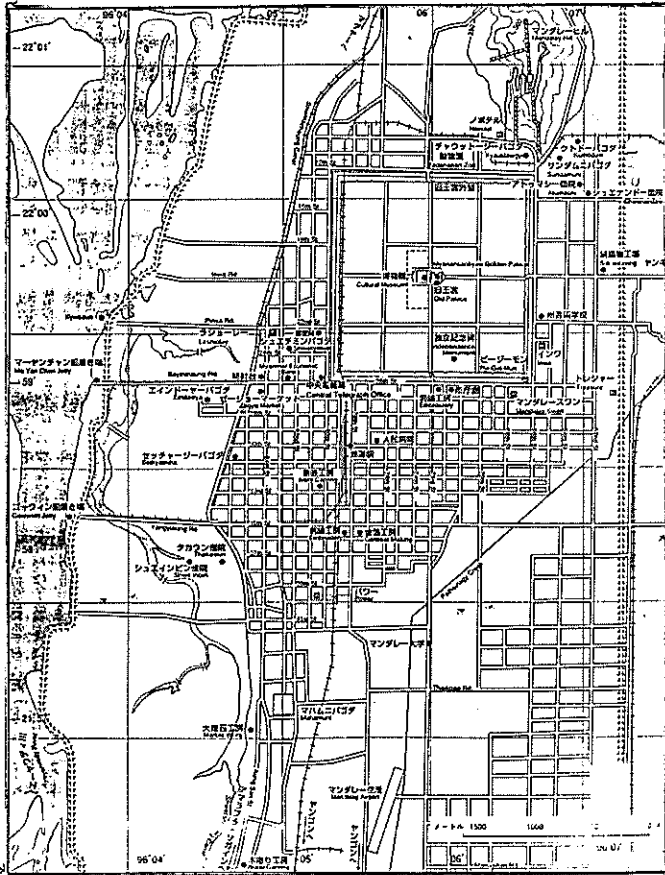
しかし当時の世界情勢は、もはや悠長な都造りを許しておくほどの、のどかなものではなくなっていた。既にヨーロッパ列強によるアジアの植民地化は始まっていたのである。(下図は現在のマンダレー地図)

インドを拠点として東方進出を狙っていたイギリスは、ビルマへの進出を開始しており、1852年にはラングーンを占領し、次々と占領した。

ミンドン王は外交手腕もあり、この頃には未だイギリスとの駆け引き如何では、マンダレー王朝が存続する可能性も残されていた。しかし1878年にミンドン王が世を去り、後を継いだティーボー王は現世に対する興味を失い、外交そっちのけで瞑想に耽っていた。

このような状況下でイギリスは侵略を続け、1885年、遂にマンダレーを占領してティーボー王をインドへ追放し、この町は僅か25年で王都としての歴史を閉じた。

しかしその短い期間にミンドン王はバゴダや寺院の建設に力を注ぎ、次々と目を見張るような壮大な建物を建てた。現在残っている主なバゴダや寺院は、ミンドン王の時代のものである。



マンダレーの観光 (前頁地図参照)

『旧王宮』

戦時中、ラングーンの方面軍司令部から、ラシオにあった33軍司令部に赴任した際、昔の王宮が未だ存在していたマンダレーは、真っ暗闇の夜中に通過して走った。敵機の跳梁する昼間の自動車は運行できず、夜行性動物のように夜間だけ行動する状態であった。

前回訪れた時には王城の内部は荒れ放題で建物はなく、今回初めて足跡を残すことになったが、今の時代に城壁の残る王宮は珍しい存在である。

ミンドン王が1857年、マンダレーに遷都を決定してから4年がかりで造られ、完成当時はビルマ建築芸術の粋を集めた見事なものだったと云う。

1885年、ビルマを占領したイギリスはここを軍の施設とし、王宮の苦難の歴史が始まった。時代は下って1945年3月、日本軍とイギリス軍との間で繰り広げられた激しい戦火に王宮は巻き込まれ、炎に包まれた焼失した。

各辺は約2kmの正方形で、その外側に幅70mの濠がある。

東入口から中に入り、真っ直ぐに進むと突き当たりが王宮である。宮殿建築の内部には、王の謁見の間や控えの間などがあり、往時の栄耀栄華が偲ばれるのであった。

やり手の顔つきをしたミンドン王夫妻の像や、痩せ形のティーボー王夫妻の像が、それぞれの広間に飾られ、哀しい歴史が刻まれている様子が窺えた。

(右上の写真は水濠に囲まれた旧王宮、
下の写真は王宮中央の木造の塔)

王城内の東南部には独特な建築様式の監視塔が建ち、塔の上からはマンダレー市街やマンダレーヒルを、手に取るように眺めることが出来る。

(王城内は現在も軍の施設として利用)



城壁や水濠は支那式（中国）であることは勿論のこと、昔から中国はインド洋へ進出の足がかりとして、経済、軍事の両面でビルマに接近していた。

ビルマ第2の都市であるマンダレーは国境貿易の開拓、流通の自由化、そして双方への通行許可証の発行に伴う、かつての援蒋ルートで賑わうようになり、王宮は観光名所の一つとして再建された。

又、現在では中国系のデパート、商店、ホテルなどの建設が相次ぎ、今のところ日用雑貨の大半は中国製品が占めている。

『シュエナンドー寺院』（83頁地図右上）

シュエは金、ナンドーは王宮の意である。アマラプラからマンダレー市街に入って王宮の見学が終わると、水濠の中に新設されていた水上レストラン・ピージーモンで昼食を摂り、マンダレー・ヒルの麓にあるホテル・ノボテルで小休止後、シュエナンドー寺院の見学となった。

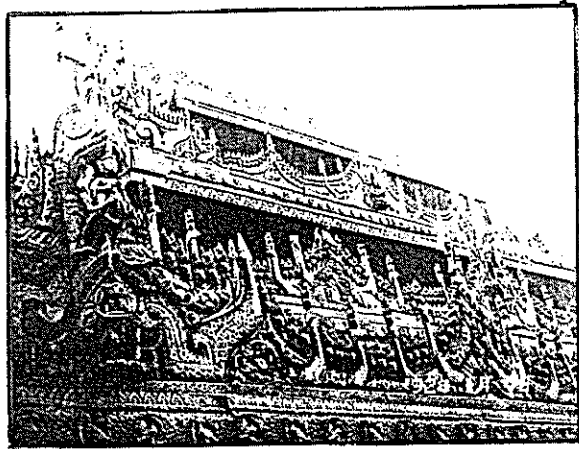
寺院の中に一步踏み込んだ瞬間に、記憶の糸をたぐり寄せる暇もなく、私の脳細胞は明瞭に記憶していた。それは実に素晴らしい、見事なチーク材の建築と彫刻であったからである。



この寺院は有名なクドードオパゴダの南にある木造の僧院である。ビルマでは昔ながらの僧院で木造のものは少なくなっており、貴重な存在だ。

建物の外壁や内側、屋根や入口などは大變手の込んだ彫刻や飾りで覆われており、建物そのものが見事な芸術品である。

かつてこの寺院は王宮の一角にあった。時の王ミンドンと彼の第一夫人はしばしばここで時を過ごしたという。そしてミンドン王が死んだのも、この建物



の中であった。（上の写真は寺院の全景、下の写真は屋根の見事な彫刻）

その後を継いだティーボー王によつて今の位置に移されたが、そのティーボー王もしばしばここで瞑想に耽つたと云われている。彼が座った椅子はまだこの寺院に残っている。

なおこの僧院の西隣にはアトゥマシー僧院が再建中であつた。ここは大きな僧院だったが、第2次大戦の際に巻き込まれて焼失し、長い間、廢墟のまま放置されていたのであつた。

『クドードオパゴダ』（38頁地図右上）

私は700寺院という別名で印象強く記憶に残っていたところで、クドーとは「功德」、「ドオ」とは王の意である。

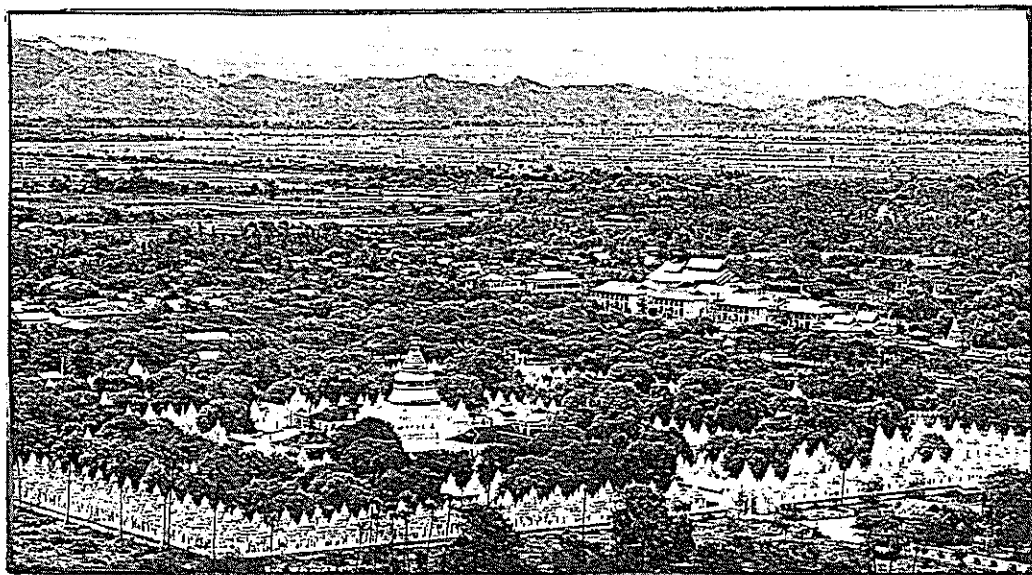
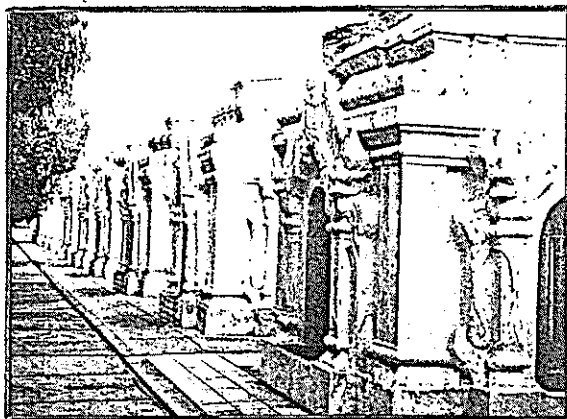
マンダレーヒルの東南の麓に、パガンのシュエズィーゴオンパゴダを模して建てられたものである。

中央にある塔はそれほど大きくなものではなく、形も珍しいものではない。何と云っても圧巻なものは、塔の周りに整然として並んでいる730もの小パゴダ群である。

マンダレーヒルの頂上から、その全景がよく見える。乾期の空が晴れた今日は、空の青さと木々の緑とパゴダの白が鮮やかなコントラストをつくり出し、実に素晴らしく美しい鳥瞰であった。（下の大きな写真が全景）

このパゴダ群は1857年、新王宮と同時に建設が始まった。時の王ミンドンは「世界最大の教典」を作るつもりで、このパゴダ群の建造に取りかかったという。

彼は2400人もの僧を集め、仏典を完全な形で大理石の版に彫る作業を開始させた。その一枚一枚を白いパゴダの中に納め、それが729枚にもなった。730番目の石版には、「世界最大の教典」が出来た経緯が刻まれている。（右上はパゴダ群）



『チャウットーギーパゴダ』（王城の直ぐ北側）

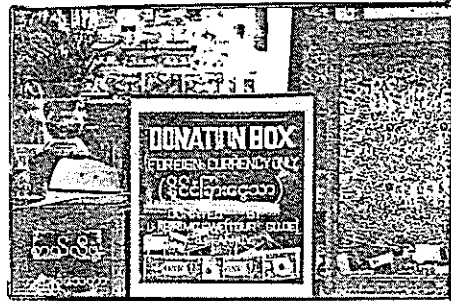
マンダレーヒルの麓で王城の直ぐ北側にある寺院であった。

マンダレーの北方約50kmにあるサジン山は、良質の大理石を産出することで名高いが、このチャウットーギーパゴダの石仏は、サジン山で採れた巨大な一枚岩から掘り出されたものである。

1865年、ミンドン王の手によって開眼されたが、この開眼の儀式には2万人以上の兵士や僧侶が動員された。

仏殿の外側の壁には80羅漢像があった。これは石仏を彫る際に削り落とされた、余りの石から彫られたものだと云われている。

特に目に付いたのは「外貨専用の賽銭箱」である。（上はその賽銭箱）



『マンダレーヒル』

20年前にこの丘を喘ぎながら登ったことを思い出す。十数人のツアーの中で大阪の松田光男氏（私と同じ師団で113i）と私だけが、全身から淋漓として流れ落ちる汗をものともせず、慰霊心に燃えて凜然と1729段の階段を駆け登り、頂上に祀ってあった仏像に額ずいて慰霊の誠を捧げた。

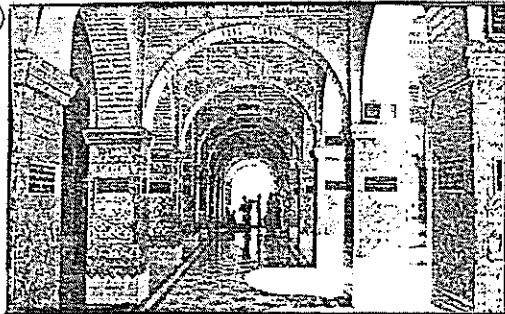
しかし歴史の巨大なうねりの中で、時の流れの速さはマンダレーも同じで、現在では頂上の直ぐ下までトラックバスが運行し、そこからエスカレーターに乗って、楽々と頂上に達することが出来るのであった。

旧王宮の東北角に盛り上がったように位置している約200mの丘には、石の階段の参道が南側に2本、西側と北側に各1本の合計4本がある。前回の我々は南側の1本を裸足で登り、その疲労困憊は今でも忘れられない。

今回は丘の裾でホテルのバズからトラックバスに乗り換え、山の斜面のガタガタ道をうねりながら登って行った。下車してエスカレーターに乗り継ぐ予定だったが、どこの国も同じく、要人が来ているということで我々は足止めを喰らった。（右は今の頂上の建物）

ちぎれ雲がぼっかりと薄青色の穹蒼に浮かんでいた丘の道を、仕方なく杖をつきながら、ゆっくりと石段を登った。しかし思ったほどの苦労はなく、頂上に辿り着くことができた。

20年前の丘の上には石像の立つ小さな木造の建物があったが、今は鉄筋



コンクリートの建物の中に安置されている。しかし要人が来訪のため我々は建物の中に入れない。

前回と異なり頂上は平坦に開発され、仏像のある建物の周囲には椅子が取り付けられ、イラワジ河の落日が見られるように設けられていた。しかし我々が登ったときには満席で、残念ながら空席はなかった。

マンダレーヒルは丘全体が聖地となっているため、ビルマ人が麓から素足で石段を登ってくる光景を見下ろしていた。前回の私や松田氏の場合と同じで歩く方が印象に残り、慰霊の価値も大きく感じるようである。

俯瞰する町は隔々までも見渡すことができ、頂上は絶好の展望所であった。目に映る市街は日本の京都のようで、王宮を中心にして市街は碁盤の目のように区切られている。西にイラワジ河が流れ、パゴダや寺院はマンダレーの丘やその麓にあり、クードォパゴダの景観は圧巻であった。

丘の上から王宮を瞰下すると自然に歴史が浮かんでくる。マンダレーが王都であった期間は長くはない。パガン王を継いで1853年に即位したミンドン王は、午前中に見学したアマラプラから、震災後にこのマンダレーへ遷都を決意した。

王は1857年から4年がかりで王宮の造営に着手した。しかし、この頃すでに第1次英緬戦争、第2次英緬戦争で、ビルマ王国は下ビルマ地方の一部を失っており、マンダレーの建設は威信回復をかけたものであった。

マンダレーヒルの頂には仏教の栄える都の出現を予告して、王都を指差すブッダの黄金の立像と、その弟子のアーナンダ（阿難陀）の座像が安置されている。

1871年、王都マンダレーで行われた「第5回上座部仏典結集大会」（マンダレー結集と称す）は、そのブッダの予告を成就し、上座部仏教の威信を高め、ビルマ王朝の誇りを堅持するためのものであった。

「マンダレー結集」では王都マンダレーに2400人の僧侶を招集し、この年の4月15日に始まった。そして「三蔵」（仏教の聖典群を三種に分けた経蔵・律蔵・論蔵の総称）のすべてを150日間続けて読誦し、同年9月12日に終わった。

ミンドン王はまたビルマ文字版三蔵經典の校訂編纂も行い、それを729枚の大理石の石板に刻み、「クードォパゴダ」の小さなパゴダ群の中に納めたのである。この石の經典は「世界最大の本」とあってよいだろう。

陽はイラワジ河の西山の端に落ち始めた。その落日の状況は、燃えるような、浮かぶような、揺らめくような、いくつもの色に変化していくパガンに比べれば見劣りがした。それはイラワジの流れが遠くて細く、落日の残光が生む彩色の変化が、水面を照らさないからであった。

落日を眺めての帰路は要人も帰り、エスカレーターに乗ってトラックバスに乗り継ぎ、ホテル・ノホテルに帰着して1月12日の予定は終了した。

マンダレーの戦闘

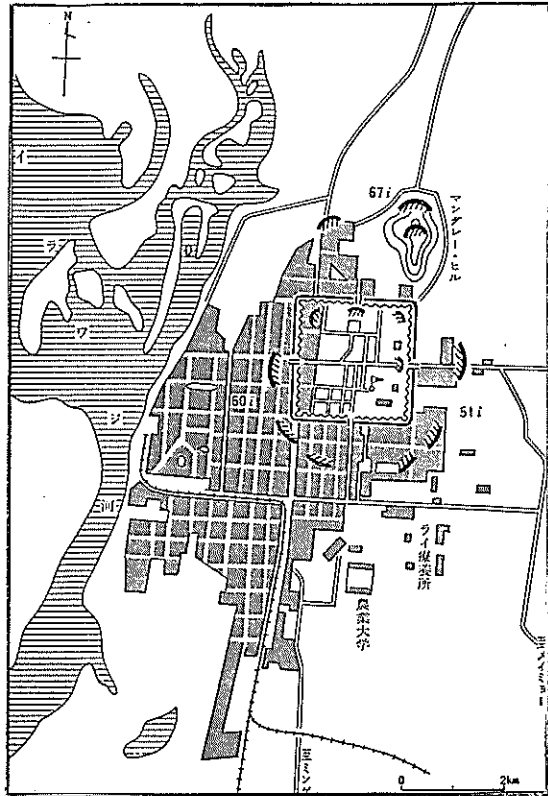
第15師団は各部隊の善戦により、第19インド師団及び第36英師団の進撃を阻止していたが、2月下旬、敵の両師団は戦車及び重砲の渡河完了を待って進撃に移ると、遂に力尽きてマンダレーに向かって後退を始めた。

我が第15師団はインパール作戦で馬も自動車も喪失した。したがって輸送力の多くは農民の牛車に頼り、火砲の運搬まで牛に牽かせていた。このような状況下では敵と速やかに離脱することは至難であった。

(このような状態はビルマ全軍にわたり同様であった)

去る1月中旬、無智無謀な強襲をさせたナンバッカの戦闘で、怨み骨髄に徹している第33軍参謀長・山本少将は、進級して第15師団長に栄転し、3月8日、諸部隊に先行してマンダレーに着いた。しかし後続部隊の到着に先立って、早くもマンダレーは敵戦車の攻撃を受けた。

師団長はマンダレーの所在部隊(戦闘部隊ではない)を指揮して防戦し、やがて翌9日、北方から後退してきた諸隊によって危急は打開され、辛うじてマンダレー市街地に師団主力を收容することが出来た。



(上は第15師団のマンダレー配置図)

マンダレーの配備は王城を中核として、その外周市街地にかけて歩兵3ケ聯隊を配置した。爾後、3月19日夜、軍命令により同地から脱出するまでの11日間、敵の重囲下に頑強に抵抗を続けた。

第15師団に追尾してきた敵第19インド師団は、先ず王城北側のマンダレーヒルの攻略に着手した。ここは標高250mの制高点でマンダレー市街を俯瞰する要地であった。

敵の攻撃は3月9日昼夜を通じて強行され、翌10日も更に続行された。高地は岩山であったが斜面は寺と塔とで覆われ、それらの建造物は敵の銃砲弾の巢となった。戦闘は白兵戦となり、英印軍はガソリン缶に点火して我が陣地を攻撃した。

激闘2日間、3月11日、遂にマンダレーは敵の手に落ちた。これより先、敵の戦車は市街地の四周から我が陣地に肉薄し、随所で市街戦が展開していた。この時期の我が大隊はシポウに於いて、最後の断作戦を敢闘中であった。

約2km四方の王城の外壁は高さ約60mの厚い煉瓦積みの壁で、東西南北に門がある。城内には官舎、兵舎、王宮、その他堅固な建物が並び、その地下室は防空壕に利用できた。また城壁の外側には水濠が巡らされていた。

英軍は市街地から数日間、攻撃を続け、城壁を破壊するために砲爆撃を集中し、それと同時に激しい絨毯爆撃によって王城内の建物を粉碎した。

我が15師団の損害も多く、3月15日頃の推定戦力は1500名で、後方部隊を含めても約3000名以下となっていた。

3月17日になって15軍司令部は15師団に対し、マンダレーを放棄してミンゲ河南方(マンダレー南方で合流するイラワジ河の支流)に撤退せよとの命令を下した。そこで師団は19日の夜を期して、敵の守備の手薄なマンダレー南方から突破することになった。

しかし19日の天明後、敵の戦車が農業大学(前頁地図下側)付近に接近し、また一部は我が後方を遮断するように迂回を始め、昼頃にはB-24爆撃機が王城を爆撃した。

この時期の我が33軍司令部は、単独でシポウからメークテラ作戦の指導を命じられ転進中であった(65頁参照)。しかしながら誰が考えても、メークテラ会戦は、15軍がイラワジ会戦を遂行していることが前提である。その上、この状況下での15軍は、イラワジ会戦を断念しなければならぬ関頭に立たされていたのである。

このマンダレーの攻防戦の戦史叢書を繙いて残念でならないことは、米軍が日本の本土を爆撃した際に、京都、奈良、金沢の古都を爆撃目標から除外して文化財を保護したが、マンダレーの文化都市は焼失してしまった。

マンダレーはビルマ第2の大都市で、素晴らしい古城や王宮の文化財が厳然として遺されていた。日本軍は敗戦に次ぐ敗戦とはいえ、旧都保存のため無防都市宣言をして戦火から防ぐべきであったと思う。

この市街地程度を障害物として利用しても、激闘2日間で壊滅してしまった。そのことをあ思うと、方面軍、15軍、15師団の諸高官は、誠に残念ながら戦禍から国家の文化財を守り、保護する目がなかったのである。

一方の英軍も同罪である。全線で日本軍は敗走中であり、追撃する英軍はマンダレーを避けて迂回し、南に進撃すればマンダレーは取り残され、陸の孤島となって自然消滅の運命にあったのである。

『次にビルマの昔話の一例を記述したい』

仏教はビルマ人の生活の方法から、ものの考え方まで深い影響を及ぼしており、昔話にも仏教の教えを説くための話が沢山ある。

ビルマの昔ばなし 『竜の卵』

昔、ビルマの北の山地に一匹の雌の竜がいました。雌の竜は日の神と愛し合って結ばれたが、やがて日の神は日の車、即ち太陽を動かす仕事をしなければならぬため、雌の竜は卵を三つ生みました。

卵がもうすぐかえりそうになった時、竜は一羽のカラスを呼び寄せて、もうすぐ子供が三人生まれると、日の神に伝えてくれるよう頼みました。日の神のところへ出掛けたカラスは、竜の伝言を伝えました。

日の神は大喜びでしたが、日の車を放り出して竜のところへ駆け付けるわけにはいきません。そこで日の神は、お祝いに三人の子供たちにルビーを一つずつ送ることにしました。そのルビーを売って国を買い、それぞれがその国の王様になるようにと云うのです。

カラスはルビーの入った包みをくわえると飛び立ちました。途中でカラスは、大勢のに商人たちが野原で食事をしているのを見かけました。そのそばでは鳥たちが、商人たちの食べ残しを貰いたいと思いました。そこで地上に舞い降り、ルビーの包みを藪の陰に隠すと、ほかの鳥たちに混じって残飯を食べあさりました。

ところが一人の商人が、カラスが藪の陰に隠した包みを見つけてしまいました。商人はルビーを取り出すと、代わりに牛の糞を袋の中に詰め込んで、元のところに戻しました。

残飯を食べて腹一杯になったカラスは、ルビーが盗まれたことも知らずに、また包みをくわえて竜のもとへと向かいました。

竜はカラスが運んできた包みを喜んで受け取りました。ところが包みを開けてみると、中にはなんと牛の糞が入っています。日の神が牛の糞をよこしたと思った竜は嘆き悲しみ、悲しみのあまり死んでしまいました。

竜が死んだことを知った日の神は、カラスが不注意からルビーをなくしたためだと、カラスに火あぶりの罰を与えました。だからカラスはそれ以来、全身が真っ黒なのです。

温めてくれる母親がいなくなった三つの竜の卵は、何ヶ月たってもかえりません。やがて雨が降り始めて卵は三つともイラワジ河に流されました。

モーゴウ地方まで流された卵のうち、一個が岩にぶつかって割れました。割れた卵から無数のルビーが飛び散りました。だから何時までもモーゴウ地方からルビーが採れるのです。

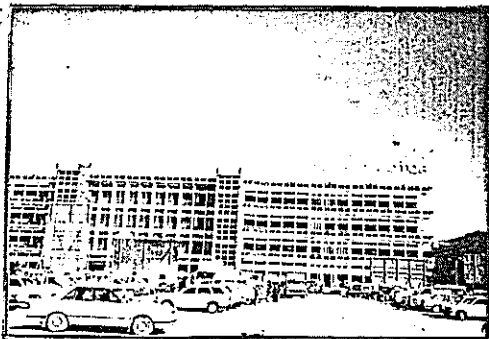
中流・下流まで流された二つの卵は岩にぶつかって割れました。中流で割れた卵から虎が、下流で割れた卵からワニが出て来ました。

こうしてビルマの森や河には虎やワニがいるようになりました。それらは日の神と竜との間に生まれた虎やワニの子孫です。 (ビルマ族の話)

1月13日は強行軍の日程が組まれていた。午前中は「イワン」「サガイ
ン」の観光。午後は空路、マンダレー空港からラングーン空港に飛び、引き
続きラングーン北方の「ペゲー」（自動車です約2時間）へ行く計画である。

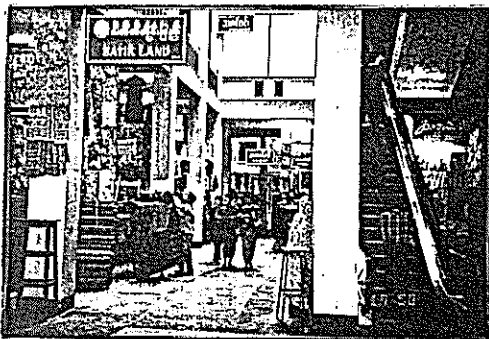
『ゼージョマーケット』（マンダレー市街）

ゼーは値段、ジョーは安いので、王宮の西南の角にあるマンダレー最大
のマーケットである。昔から非常に値段
が安いと云うことで、ホテルを出発した
バスは王城の水濠に沿った道路を走り、
マーケットの広々とした駐車場で停車し
45分間の自由行動となった。



前回訪れた際も同じ場所であったが、
建物は木造で薄暗く汚い感じの市場であ
った。宿泊したマンダレーホテルから近
かかったから、何度も脚を運んだ記憶が
ある。（右上はマーケットと駐車場）

鉄筋コンクリートの建物に改築された
ビルの中に入ると、人口200万人を支
えるマーケットだけあって、日用雑貨か
ら食料品店、家電製品の店などが所狭し
と揃い、エスカレーターまでが完備し
ていて今昔の感がしていた。



別に買う積もりもなく回ってみた。ラ
ングーンのアウンサン・マーケットと比
較して見ると、シャン・バックは完全にこのマーケットの方が安く、10枚
ほど土産に買い求めることにした。（上はマーケット内の景観）

20年前に訪れたこのマーケットの周囲を回り、記憶の糸を手繰りながら
歩いていると、マーケットの東側の通りに、夜店が延々と並んでいたことが
思い出された。ビルマは如何に貧しいかを説明するために、子供たちの使う
玩具から学用品まで購入したが、それは現在でも我が家に保存されている。

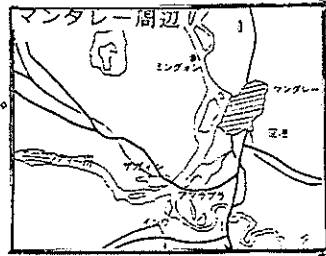
昔は無数の夜店が並んで食べ物の屋台なども軒を連ねていたが、現在はど
うなっているのかとガイドに尋ねると、今も大変な賑わいでビルマでも有名
な夜店だと云っていた。

ビルマとの理解を深め友好親善のためにも、昨夜は是非とも、夜店に案内
して欲しかったと残念に思っている。しかし、これには理由があるようだ。
我々一行が宿泊したホテル・ノホテルから距離が遠く、マンダレーヒルが開
発されて日没を観光ポイントにしたために、時間の余裕がなくなったからで
はないだろうか。

インワの観光 (旧アヴァ、下図参照)

バスは昨日訪れたアマラプラを通り、イラワジ河に架かるサガイン鉄橋を
の手前を左折した。イラワジ河の支流のミッング川
に突き当たったところに船着場があり、そこから対
岸のインワまで貧弱なカーフェリーが運行していた。

フェリーから見えるサガイン鉄橋は、20年前は
アヴァの鉄橋と呼ばれ、私の記憶に明瞭に印され
ていた。鉄橋の向こうに見えるサガインの丘の上には
は、数え切れないほどのパゴダが白く陽光に輝き、
古戦場の山々は何となく悲しみを覚えさ
せてきた。(右はカーフェリー)



5分間ほどでフェリーがインワに着く
と、一行は集合して記念撮影し、埃っぽい
道路に並んで客を待っていた馬車に分



乗して、田園風景というか、荒地の中を揺れに
揺られて走った。(右は客を待つ馬車の群)

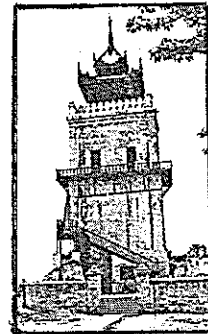
『インワ』は1364年に初めて王都となって以
来、何度か他の町にその地位を譲ったが、基本的
には400年間、首都として栄えた町である。



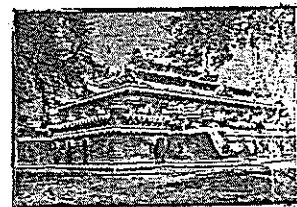
イギリス植民地時代は「アヴァ」と呼ばれ、旧
名は「ラトナプラ」といい、「宝の町」という意
味であった。

1838年に大地震が発生し、その被害があまりにも大き
く、時の王ターヤーワディーは復興を断念し、アマラプラに
遷都を決意した。

先ず訪れた「メヌオジャン寺院」(メヌは王妃、オジャン
は煉瓦)は王妃が寄付した煉瓦造りの寺院であった。続いて
「バガヤー寺院」の見学となった。ここはバヂードー王によ
って1843年に建てられた総チーク製の贅沢な寺院で、背
の高い椰子の林に囲まれた涼しげな建物である。この寺院の
境内にある監視塔は印象的であった。(右は監視塔)



次の「アハーアウンミエ寺院」は1818年バチー
ドー王の第一夫人が、王家の僧侶のために造った石造
の僧院であった。当時は木造が一般的で、石造のため
に地震にも耐えて、今日まで保存が出来たのである。



(右はマハーアウンミエ寺院全景)

サガイン観光 (前頁地図参照)

馬車に乗りながら栄華の跡を馬車に揺られてインワを廻った。しかし400年間も都があったとは思えないほど寂れ、王宮の場所は畑となっていた。このような田舎の古都には、もっとゆっくりしたかったと感じながらフェリーに乗船し、思い出深いサガイン鉄橋(アヴァの鉄橋)を渡った。

イラワジ河に架かるこの橋は、この辺では唯一の橋で、雨期と乾期では川幅が大きく変わって流路も一定せず、ビルマでは大きな橋自体が珍しい存在である。

1934年に完成したが第2次大戦中の1942年、日本軍に利用されるのを防ぐため英軍の手によって爆破され、1954年に再建された。



(上の写真はサガイン鉄橋と、その後方に見える丘がサガインヒルの古戦場)

全長1.6kmの鉄橋は、鉄路の両側に1車線ずつの道路が付けられた鉄道・道路両用の橋梁で、色こそ黒から白に変化したのが、記憶は完璧であった。

このイラワジ河畔の満目荒涼の地に於いて、雷鳴の如く殷々轟々、耳を聳する砲爆撃にさらされ、草根や木皮で飢えを凌ぎ、天に泣き地に哭すようなこの地で倒れた、在りし日の将兵のことは忘れることは出来ない。

イラワジ河を渡ると小高い丘が前面に広がり、その斜面には大小さまざまな無数のパゴダが見えてきた。20年前にマンダレーヒルと同様、大阪の松田光男氏と二人だけが千数百段の階段を登り、サガインヒルの頂で天地の生命を謳歌するように大声を発し、涕涙して慰霊したことが思い出される。

サガインは実に静かな遺跡の町、そしてパゴダの町で、白く塗られたパゴダの多いのも特徴である。

1315年、シャン族の王がここを都と定めたが長く続かず、1364年にはインワに移ってしまった。1760年から1764年までの間、再び王都となったものの4年間という短期間であった。

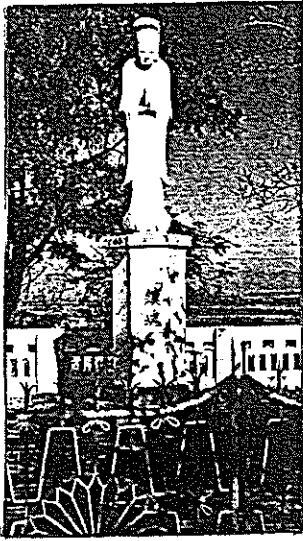
サガインにパゴダが沢山残っているのは、王都となった期間が短かったお陰かもしれない。インワとアマプラの間で遷都が繰り返される中で、政争に巻き込まれることもなく、文化が保存されてきたのではないだろうか。

サガイン市内のハッピーホテルのレストランで昼食を摂った後、サガインヒルに登ることになった。今では便利になって町から丘の上までトラツクバスが運行し、年老いて半分は不具者同然の私でさえも登れるのであった。前回の青息吐息で喘ぎながら登ったことが嘘のようである。

道路といい、パゴダの数といい、すっかり丘全体の様相が変貌して昔の面影はなく、変わらないのはイラワジの流れだけであった。

青い空と爽やかな空気に包まれた丘の上には金色のスノーボンニヤシン・パゴダが、イラワジ河畔の豊饒の地を睥睨するように聳えていた。

そのパゴダを右に見て進んで行くと、忘れられない過去と現代を貫く歴史を物語る日本人慰霊碑や、鎮魂碑が幾十となく建立されていた。将に鬼哭啾々、死と向かい合わせの中で尊い命を犠牲にされた地獄絵図を想わせ、嗚呼、と心の咽び止まらなかった。



(日本人慰霊碑) (菊18師団慰霊碑) (烈31師団慰霊碑)

先ず右手の囲いの中には、日本軍兵士の鎮魂を祈る白亜の石像が天に聳え、それから次々と15軍隷下の15師団、31師団、33師団を始め、配属部隊や軍直轄部隊等の将兵が、大祖国戦争で無私の英雄的な奮戦によって最後を遂げられた慰霊碑が、相添うようにして林立していた。

実際のビルマ戦場では戦友の死を涕涙して悼んだが、余りにも死が多く過ぎて、一人の死を何時までも悼み続けることは出来なかった。今次はパガンを始めここサガインでも多くの慰霊碑に接し、他部隊の英霊であっても悼み慰霊する心は同じであると、嘗ての戦場を想起しながら静かに慰霊の誠を捧げたのであった。

一行も私の後に続いて各慰霊碑の前に進み、香を手向け蠟燭を捧げて心から偉勲を讃え、目頭を熱くして御冥福を祈願してくれた。有り難う。

戦没された英霊たちは一生懸命になって世界を相手に奮戦力闘したが、残念ながら日本は戦いに敗北したのである。しかし今日の日本の豊かさがあるのは、英霊たちの犠牲のお陰であることを忘れてはならない。

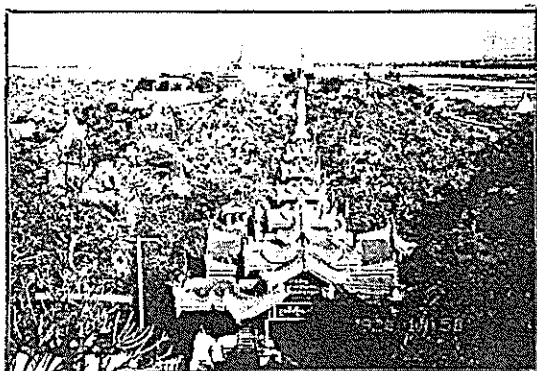
英霊たちの精神は明治維新の人達と同じである。その尊い精神は、日本人としてし子々孫々まで、語り伝えなければならない義務と責任があるのだ。

我々のように英霊たちと共に死を承知の上で闘い、生きながら針の穴のような小さな希望を追い、優勢な戦力を擁する絶対差の敵の火力の中で死闘を続けたが、遂に刀折れ矢尽きてしまった。

しかし、戦争の罪悪と亡き英霊に対する慰霊を混同してはならない。そのためにも、靖国神社には天皇も総理も参拝して然るべきだと私は願っている。それが実現できるまでは戦後は終わっていない。

想い思いに静寂な丘に眠る幾万の英霊を慰め申し上げたのち、頂上からサガインヒル全体を眺めて驚いたことは、前回とは全く様相が一変していてパゴダの数が増加したことであった。

20年前の日本軍のパゴダは、烈兵団歩138聯隊の茶褐色のパゴダ一つだけであった。しかし現在は日本人の手によるもののほか、数え切れない数のパゴダ群であった。（上はサガインヒルのパゴダ群とイラワジ河）



イラワジ河を展望し、パゴダの群に抱かれたこの丘こそ、瞑想の地と呼ぶに相応しい所であった。そのように感じた人は私一人ではないだろう。丘全体が大きな寺院のように一大瞑想センターとなっていた。

これだけ沢山なパゴダが建立されたことは、パガン以上に信仰の厚い熱意の証拠である。



ビルマ人にとって生活と切り離せないのが「得徳」の思想である。戒律の厳しい小乗仏教のビルマでは、一般の人でも殺生、偷盗（物を盗むこと）、淫行、妄語（嘘をつくこと）、飲酒をしてはならないと云う、五戒が課せられている。

（上の写真はイラワジ河とパゴダ群）

現実の生活では全てを守ることは難しく、戒律を破ったことを打ち消すために、徳を積まなければならない。その「得徳」の代表的なものは寺院への「寄進」、僧侶への「お布施」である。だから、人々の暮らしは決して豊かとは云えないが、寺院の賽銭箱はいつも紙幣で一杯であった。

パゴダ（仏塔）に祈り、瞑想して精神を統一することも、大切な徳を積む行為の一つである。こうして徳を積むことが彼等にとっては最大の喜びであると云われている。

以前、サガインの近くのパゴダで沢山な籠に入れられた雀が売られていた。

それを見ていると、ここにお参りに来た人が雀を買い、空に放してしまった。これを「放鳥」と云い、捕らえられた動物を自然に帰すことも、やはり徳を積むことになるらしい。

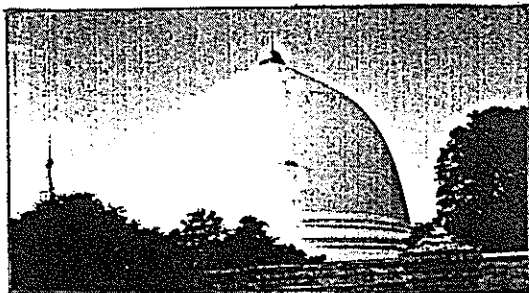
ビルマの人々は皆、得徳によって喜びを感じ、そして生活に満足しているようで、どこに行っても微笑に満ち溢れており、我々の心を和ませてくれた。だからビルマの国は微笑の国と云った方が良いかも知れない。

しかしビルマに訪れて以来毎日、熱心な小乗仏教の姿を見ていると、あれだけの浄財を寺院や僧侶に喜捨して生活が苦しくないのか、村や町の発展を阻害しないのかと、誰しも疑問を感じるだろう。

ところが彼等には、僧侶の合唱が極楽の雲に漂う天国の声に聞こえると云うし、ビルマ人が死亡すると、死んだ人の年の数だけの僧侶が葬式に参列すると言うから、その費用も大変ではないだろうか。

サガインの最後の観光は「カウナムードパゴダ」であった。別名を「オッパイパゴダ」と称していたから忘れられない存在であった。

20年前は平坦な荒野の中に一つだけポツンと建っていたが、今ではパゴダ自体も囲んでしまい、付近もまた寺院で埋め尽くされていた。そのため、オッパイパゴダの感じは全く感じとれないのである。



(右上は乳房の形を表していた20年前に撮影のカウナムードパゴダ)

高さ45mの女性の「オッパイ」のような格好のパゴダは、1636年、インワ王都としての基礎を固めたことを記念して建立したもので、当時の王妃の中で最も美しい胸をモデルにしたと伝えられている。

再び相見えることはないと思っていたサガインの足跡は、至上の喜びであった。悲しい哉、美は醜の故に、白は黒によって、善は悪を資として存在す以上、「平和と戦争」は並んで存在し、永久に繰り返される宿命にあるのであろうか。このように思いながら古戦場・サガインとの別れが迫ってきた。

以上を以てサガインの観光は終了してマングレー空港に引き返し、17:45発の搭乗したプロペラ機はバガンに立ち寄り、19:35にラングーン空港に着陸した。

強行軍の日程は疲労困憊の一行に休憩する余裕さえ与えず、直ちにバスに乗り換えて暗闇のペゲー（現パゴ）街道を突っ走り、22:15にペゲーのシュエワタン・ホテルに到着した。

サガイン付近の戦闘 (下の地図参照)

49頁、52頁にイラワジ会戦は画に描いた作戦だったと記述した通りである。昭和20年1月9日以降、英印軍は戦爆連合部隊をもってマンガレー、サガイン、ミンム等のイラワジ河畔の要点を爆撃するとともに、1月14日から戦車を伴った敵はサガインに近接して攻撃を開始した。これがイラワジ会戦の始まりである。

当時期の我が大隊の状況はモンユで戦闘中であった。

烈歩138聯隊は、戦車を擁する敵に対し善戦敢闘したが衆寡敵せず、1月2

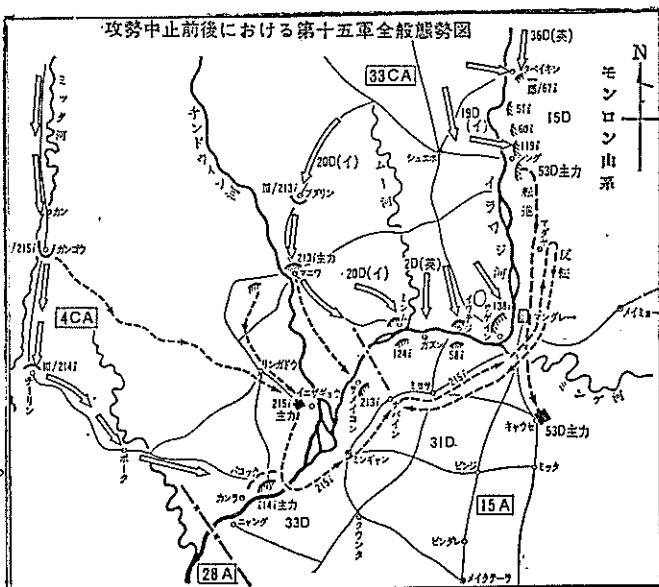
5日から30日にかけて陣地を放棄してイラワジ河の南岸に撤退し、15軍が計画したイラワジ会戦は画餅に帰した。

この影響から我々の隷属した33軍司令部は、急遽メイクテーラ会戦の指揮をとることになり、軍司令部は単身でカロー付近の大和村に転進した。このことは65頁に記した通りである。

インパール作戦から敗走した15軍の諸部隊は、志気阻喪して戦意の回復は容易ではない。にも拘わらず上級司令部は、小刻みな持久戦法を以て敵に当たったことは損害のみ累積するばかりで、我々第一線指揮官の経験者は同意できないことである。

主としてゲリラ作戦による抵抗で時間的な余裕を得て、抵抗線を形成できる地形まで一挙に後退すべきである。そこで兵を休めて編成をやり直し、補給を受けて次の戦闘を準備することが実戦戦術で、余りにも図上戦術的であったと私は思っている。

第15軍(軍司令官牟田口中将)はマンガレー地区からイラワジ河を渡り、インパールに向かって攻撃前進を開始したが、次にインパール作戦を回顧してみたい。インパール作戦開始当時の私は、陸軍士官学校に於いて第60期生の教育の任に当たっていたが、運命は不可解なもので、私は後を追うようにしてビルマ作戦に参加したのである。



インパール作戦の回顧

(拙著「両忘」の第四款第一章「戦鬪を顧みて敗戦を思う」を参照)

日本軍のビルマ進攻の目的はビルマの維持防衛であり、ビルマ・ルート（援蒋補給路）を遮断して、重慶政府（中国）を孤立させることによって、日中戦争を集結に導こうとしたものであった。しかしながらビルマ作戦は次々に拡大され、軍事目的、政治目的がからみ合って、極めて政略的な作戦が展開した。その頂点がインパール作戦である。

牟田口中将の手記（回想録）の中で、『私は蘆溝橋事件（昭和12年7月7日）のきっかけを作ったが、事件はさらに拡大して支那事変（日中戦争）となり、遂には今次大東亜戦争（太平洋戦争）にまで発展してしまった。もし今後、自分の力によってインドに進攻し、大東亜戦争に決定的な影響を与えることができれば、今次大戦の遠因をつくった私としては、国家に対し申し訳が立つ。男子の本懐としても正にこの上なきことである』と書いている。

牟田口中将は作戦は初めから勝利すると決めつけ、もしも失敗すればどうなるかを一顧だにしていない。私は戦鬪は勝つことよりも、先ず負けないことを考えるべきだへと闘ってきた。そのために必要性和可能性を常に念頭に置いていた積りである。

自分の力によってと書いているが、これは野望と言うべきである。牟田口中将はシンガポール攻略で師団長として感状を貰い、将来の栄達が約束されているように思っていたようだ。しかし栄達欲と巧妙な手柄の野心とは、失敗の原因となることを忘れていた。

手記を読むと牟田口中将の軍事思想は、「最良の防御は攻撃にあり」とする信念がありありと窺える。これは日本の軍人の多くの者が持っていたが、特に牟田口中将は強かったようである。

これについては若輩の私は、日中戦争の最前線で闘いながら考えさせられたことである。私の結論は「攻撃は最大の防御に非ず」であった。攻撃せずに勝つことが最善の策であると、青二才の第一線中隊長の結論であった。先ず負けないことが肝要で、攻撃が最大最良とは考えられなかった。

牟田口中将は軍事思想のみならず使命感の強い人物であったようである。それが高じて最後には信仰の域にまで高まり、他の言を聞き入れない性格となったと考えられる。

統帥綱領に次のような一節がある。「将に将たる者は高邁なる品性、公明な資質及び無限の包容力をそなえ、懸隔な意志、卓越な識見及び非凡な洞察力により、衆望帰向の中樞、全軍慕の中心たらざるべからず」と。

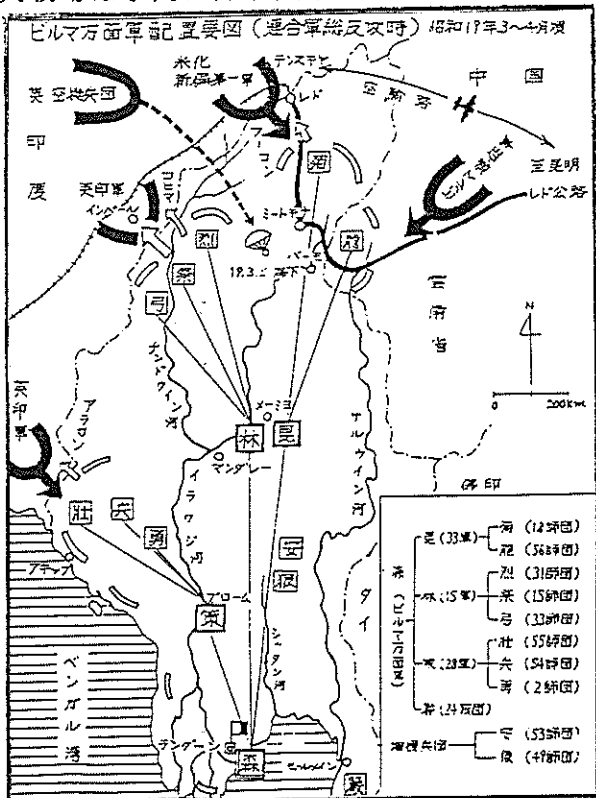
東大法学部を出たキャリアたちが、官僚として出世街道を驀進するのと同

様に、陸大を出てエスカレーターに乗って進級しただけでは、生命のやり取りをする戦場に於いて、本当の将に将たる將軍になれるとは思われない。部下が働かなければ軍は成立せず、実戦を経験して始めて真価が現れ、自分の才能を自覚するものである。「実戦場は学問に非ず実学である」。

作戦や戦闘は誤算の連続である。インパール作戦の最大の誤算は、牟田口15軍が作戦を開始しようとする直前（昭和19年3月3日）、連合軍は再びウィングート准将の指揮する大空挺部隊を、15軍の後方地区に降下した。（右図の落下傘のマークが空挺部隊）

連合軍は想像に絶するほどの膨大な情報をキャッチして全軍に伝達していた。一方、我が軍は空挺部隊によって指揮系統、補給路は寸断され、15軍は進攻作戦を展開できる態勢になかった。

15軍参謀の中には積極的に作戦開始を支持する者はなく、兵团長（師团长）となると全員が反対した。しかし牟田口軍司令官はそのまま進撃を命じたのである。（上図の左上がインパール作戦要図）



孔子のいう「天の時」「地の利」「人の和」は戦勝の必須の条件である。1ヶ月後に雨期を控えて「天の時」は我に不利であった。アラカン山脈を超える300~400kmの進路の突破は、食糧弾薬の補給を至難にして「地の利」もまた不利である。「人の和」も完全に失われていた。

特に目立つのは、15軍参謀長小畑信良少将は日本軍の補給の権威者で、偵察機に搭乗して作戦地域を視察した結果、作戦の実行は補給上から不可能だと軍司令官に意見具申したところ、即刻、転任させられてしまった。補給を考えない責任者（補給の責任は軍にある）は、物を食べない兵隊が戦闘をするのだとしていたのであった。

牟田口中将は雨期に入る前の1ヶ月で、作戦が終わると予想したのである。誤算の典型的なのは、前記したように自然の無視と補給の軽視であった。インパール作戦は「糧秣は敵地による」として、20日分の糧秣だけを携行しただけである。進路は原始未開の山岳・密林地帯で調達できる糧秣はなく、

全く補給を度外視していた。牟田口中将は北支那、それも北京や天津のような大都会の戦闘や、太平洋戦争開始直後のマレー半島作戦のように、十分に食糧弾薬を蓄積して補給も完全な状態の戦闘しか知らず、その体験知識だけではビルマ作戦には通用しないのであった。話にならない。

自然を無視することと、補給を軽視することとは、人間の驕りが自然に敗れたのだと、私は思っている。

ビルマ作戦に参加した我々から見れば、日露戦争後の日本陸軍の補給軽視の積み重ねと見るべきで、長期に亘った全軍の責任と言わなければならない。

牟田口中将はあの地形上から、最も重要な補給を考えずに、作戦の失敗をすべて部下に押し付け、自分一個の面目を立てるために、3ヶ師団の将兵を犠牲にしたと言うべきである。ジンギス汗のモンゴル遠征軍の故知に学び、1万頭の牛馬と象を連れていった司令官の頭脳は、狂っていたと言っても過言ではないだろうか。

烈31師団長佐藤中将が、無補給に抗議して後退したことに對する牟田口軍司令官の訓辭を、次に記載する。

『諸君、佐藤烈31師団長は軍命に背き、コヒマ方面の戦線を放棄した。食うものがないから、戦闘は出来ないと行って勝手に退った。これが皇軍か。皇軍は食う物がなくとも戦いをしなければならぬのだ。兵器がない、やれ弾丸がない、食う物が無いなどは、戦いを放棄する理由にならない。

弾丸がなかったら銃剣があるではないか。銃剣がなければ腕で行くんだ。腕が無くなったら足で蹴れ。日本は神州である。神が守って下さる。

毛唐の奴らに日本が負けるものか。絶対に負けはしない。必勝の信念をもってやれ。食う物がなくともむ命のある限りやり抜くんだ。神州不滅であることを忘れてはならない』と。

これでは学校教育の訓辭である。内地部隊や満州などの非戦闘地域の訓辭ならいざ知らず、雌雄を決す死闘戦場であることを無視し、戦場心理を無視した訓辭であると言わなければならない、全く冷笑の的であると言いたい。

インパールにはインド東方軍の第4軍団司令部があり、時の状況では、連合軍はビルマ奪回のために進撃してくることは、必至と見られていた。

日本がインドを武力占領することは無理であるとしても、なんとかしてインド人の間に革命を起こさせたいという考えが、日本軍の上層部にあった。当時、インドの反英運動の指導者チャンドラ・ボースは、日本の援助で自由インド仮政府を作り、インド国民軍(マレー戦の捕虜が主体)が与えられていた。そしてボース氏は東条首相に対し、インド国内に仮政府が領地を持つことを強く要求した。

ボース氏の政治的手腕で東条首相に強く働きかけたことが、インパール作

戦決行の大きな原因となったことは確実である。

日本側もボース首席と国民軍をインドに入れ、反英運動を起こして英国を浮き上がらせ、米英を分断させることによつて、太平洋戦争を終結に導きたいという戦略であったようである。そして仮政府を置く地点として、インパールが適当だと見られたのであった。

当時の大本営の立場は、八方ふさがりといった状態であった。昭和18年初頭に日本軍はガダルカナル島の撤退を始めてから、全方面の戦線に圧迫を受け、次第に後退していった。インパール作戦が開始された時期（1944年3月）には、すでに太平洋の帰趨はほぼ決まっていた。

こういう状態の中でビルマだけは、苦戦であったが未だ持ちこたえていた。ここで一戦を交えて勝利を得、東条首相兼陸相のために景気を付けられたら、と牟田口中将は考えたようである。

これこそ大誤算である。誤算とは戦略・戦術のミスのこと、将に将たる器ではないのである。又、牟田口中将は自分をインドで死なせてくれと言っていたようである。しかし死を口にするのは易いが、死を実行することは難しい。

一方、英軍は牟田口15軍のインパール進攻作戦を知るや、それまでの作戦計画を変更し、15軍をインパールに誘い込んで叩くという、内戦作戦に切り替えた。それを牟田口軍司令官は全く気付かず、みすみす猪突猛進して衝中に落ち込んだのである。

インパールはマニプール州の州都で、インドの東の玄関である。又、米英と中国・重慶政府とを結ぶ戦略的要域でもあった。インパールには飛行場、補給基地、弾薬、糧秣、燃料の集積施設、病院、工場等があった。だからインパールの失陥は英軍にとっては致命的な大損失である。（当時の英国はドイツとの戦いに集中していた）

インパール平原の外郭に防衛線をしき、そこへ日本軍を引き付けるのが内戦作戦である。平原内では道路網を整備し、戦車や車輛搭載の火砲からなる、強力な機動部隊を編成して準備した。その上、航空部隊は常時これを支援する態勢をとっていた。

日本軍が外郭の防衛線の一つに現れると、間髪を入れず全機動部隊をそこへ投入し、集中砲火を浴びせて壊滅するのである。そして他の陣地に日本軍が来れば、機動部隊は反転してこれを叩くという戦法であった。

15軍の作戦はほぼ計画通りに進み、各兵団ともインパール平原の外郭線に辿り着いたが、英印軍の集中砲火を浴びて立ち往生してしまった。各兵団長はそこで作戦の遂行に疑問を持ったのである。

ところが牟田軍司令官は兵団長を次々と解任し、あくまで作戦を強行しよ

うとした。(弓33師団長柳田中将は5月10日、祭15師団長山内中将は6月10日、烈31師団長佐藤中将は7月5日、それぞれ解任)これでは旧中国の軍閥と同様で、私物の軍隊である。

牟田口中将の考え方は、部下に棒ほどの大きさに命じておけば、針ぐらいは実行するだろう。やれるだけやらせなければ損だという信条であった。

遂に大本営は7月3日、インパール作戦の中止を決定した。このときの状況は7月7日にサイパンが陥落し、7月18日に東条内閣が総辞職している。

幾万の遺体を雨と密林の中にさらしたまま、インパール作戦に終止符が打たれて敗走期に入り、イラワジ会戦、メークテラ会戦、トング会戦と続き、他の軍にまで甚大な影響を及ぼした。

顧みると既にインパール作戦が開始された時点で、太平洋戦争の敗北はほぼ決定的であった。若しインパール作戦が行われなかったならば、15軍はウィングート空挺部隊の攻撃に全力を尽くし、これを排除して、当面は北ビルマを確保することが出来たであろう。

その後の雲南、フーコン谷地、アキャプ方面、チンドウィン河方面の連合軍の攻撃に対して、一時期はこれを抑え、抑えないまでも、整然と戦線を後退させることによって時間を稼ぎ、将兵の損害を最小限に押さえることが出来たであろう。兎も角、インパール作戦による多大な犠牲だけは防げた筈である。一将功成らず、しかも万骨枯れるでは、死んだ者が可哀想だ。

戦争の罪悪と無責任の罪悪とは、明瞭にけじめを付けて置かねばならない。インパール作戦で一般に非難されているのは、明らかに無謀と判っている計画を強行させた点である。いたずらに大言壮語し、神がかりの主観を以て功名を焦ったことが、インパール作戦失敗の原因である。

更に非難されることは、この作戦の後始末ではないだろうか。如何にそれが無責任に行われたかであった。即ちインパール作戦は作戦中止の時機を失し、事態を一層惨烈なものにさせ、所謂、白骨街道などと言われる惨たらしい犠牲を出したのであった。

その責任を負うべき者は、狂気の靈感に身を委ねた牟田口軍司令官一人ではない。軍参謀長以下の幕僚の責任も少なくない。(しかし牟田口軍司令官は意見具申をはねつけたとも言われている)15軍には補給計画はあったが、後方主任参謀がそれをどのように実施したのかは、全く明らかではない。

15軍を指導監督するビルマ方面軍にも絶大な責任がある筈で、「戦いは人格なり」と言われている通りである。

人事に就いても述べておきたい。私の出身聯隊である札幌歩25聯隊と、同じ北満のチチハルの南大営で駐屯していた、隣聯隊の歩26聯隊長須見大佐(陸大卒)は、ノモハン戦の責任を負わされて大佐待命となった。それに

反してインパール作戦の失敗の責任者たちは、すべて栄転している。

15軍司令官牟田口中将は陸軍予科士官学校（旧陸士予科）の校長になり、ビルマ方面軍司令官河辺中将は大将に進級して内地の航空総軍司令官に栄転、15軍参謀長久野村少将は中将に進級して近衛第2師団長に、ビルマ方面軍参謀長中（ナカ）中将は18師団長に栄転した。負け戦をして栄転とは軍に英才なきを暴露したのであった。

インパールの名は作戦・戦闘の苛酷さの代名詞となっている。この作戦の満身創痍の悲劇は、作戦計画の粗雑さ、特に牟田口15軍司令官の補給を無視した突進戦法に主因がある。付け加えれば最大の敵は「自惚」であった。だから部下の烈31師団長佐藤中将は、牟田口中将を「鬼畜」という評価までしているが、これも前代未聞である。

インパール作戦の悲惨な終末は、15軍牟田口司令官の「過剰な作戦指導」と、ビルマ方面軍河辺司令官の「過小な作戦指導」に大きな責任がある。

私がビルマ作戦に参加していた当時、偉いと思った軍司令官といっても、年齢は50才半ばである。現在の我が年からすれば自分の息子のような存在で、忌憚なく戦闘・作戦を酷評し回願してみた積もりである。

この悲劇をもたらしたのは、戦闘経験のない軍首脳部と、無責任にある。それが結論である。

ビルマの昔ばなし 『ワニのンガモーイエイ』

昔、イラワジ河のほとりに漁師の夫婦が棲んでいました。ある日、いつものように川にしかけた網を見に行くと、網の中にワニの卵が入っていました。

二人は卵を持ち帰り家の裏の小さな池に入れました。やがて、その卵から一匹のワニがかえりました。子供のいない漁師夫婦は、その子ワニをンガモーイエイ（くもりの空という意味）と名付けて、可愛がりました。

一、二年たつと、ンガモーイエイは一人前のワニに成長しました。もはや小さな池で育てる訳にはいきません。そこで夫婦はンガモーイエイを川に放しました。しかし、相変わらず餌だけは与えてやりました。

ンガモーイエイはどんどん大きくなり、それにつれて野性に目覚めたのでしょうか、性格も荒々しくなりました。

ある日、漁師がうっかり餌をやるのを忘れ、次の日に川へ行くと、ンガモーイエイはいきなり漁師の足に噛みつきました。

「おい、こら。どうしてそんなに乱暴なことをするんだね」

驚いた漁師にンガモーイエイは言いました。

「だって昨日、餌をくれなかったじゃないか。おかげで俺は腹ペこなのだ」

「ごめん、ごめん。これからは忘れないようにするから、今日のところはかんべんしてくれ」

しかし、漁師がいくら謝っても、ンガモーイェイは聞き分けるどころか、ますます強く噛みついて、漁師を川の中へ引きずり込もうとしました。

そこで漁師は頼みました。

「仕方がない。そんなに私を食いたければ食うがいい。だが、今まで可愛がってやった私の最後の願いだ。どうかお祈りをさせてくれ」

「私は今、この恩知らずで無法者のワニに食い殺されることになりました。どうか来世は仏法の力を備えた修験者に生まれ変わり、このンガモーイェイに敵（カタキ）を討つことが出来ますように」

こうしてお祈りをした後、漁師はンガモーイェイに食われたのでした。

その後、ンガモーイェイはますます凶暴になり、数え切れないほどの人間を襲い、食い殺しました。ンガモーイェイの悪名は、またたくまにイラワジ河一帯に広まりました。

しかし、そんなンガモーイェイもやがて年をとり、次第に凶暴な心も消え失せて遂に、恩人である漁師を食い殺したことを後悔し、罪滅ぼしに、川を渡る人々を運んだりして、人間の手助けをするようになりました。

ビルマでは、ワニは百才まで生きると人間になれると言われていています。ンガモーイェイも、百才に達した時に人間に生まれ変わりました。人間になったンガモーイェイは一生懸命に働いて、イラワジ河下流一帯の大商人になりました。そして若い娘と結婚し、幸せに暮らしていました。

ンガモーイェイに食い殺された漁師はその頃、イラワジ河の辺りでは誰一人知らぬ者もない、靈験あらたかな修験者として生まれ変わっていました。

ある日、修験者はイラワジ河のほとりに立つと、呪文をかけた籐の杖で水面をたたきながら言いました。

「ンガモーイェイ。すぐここへ現れよ」。修験者の声は何十里、何百里も離れたところに棲んでいるンガモーイェイの耳に届きました。ンガモーイェイはくるべき時が来たことを悟りました。そこで彼は妻を呼ぶと、前世の出来事を語りました。

「私は昔、ワニだった頃、些細なことに腹を立てて大恩ある漁師を殺してしまった。今、その漁師は修験者に生まれ変わって私を呼んでいる。私はその修験者の手によって、もうすぐ死ななければならぬ。これは逃れることの出来ない運命なのだ。私が死んだらどうか死体を引き取ってくれ」

修験者が再び籐の杖で水面を叩いて呼ぶと、ンガモーイェイは一瞬のうちにワニの姿に戻り、イラワジ河の水中深くもぐって行きました。

「ンガモーイェイ、すぐにここへ現れよ」。三度目の呼び声にワニのンガモーイェイは、修験者の足もとの水面から上半身を現しました。修験者が呪文をかけて籐の杖でンガモーイェイを叩きのめすと、抵抗せずに死にました。

その瞬間、水面から現れていたンガモーイェイの上半身は銀に変わり、水中にあった下半身は金に変わりました。

復讐を果たした修験者は金や銀に指一本ふれず、その場を立ち去りました。そこへ、ンガモーイェイの妻がやってきて、金や銀に変わった夫の死骸を引き取り、仏塔をたてて菩提を弔ったということです。

今でもビルマの人々は、人は何度も生まれ変わると固く信じています。現世で立派な行いをすれば、来世は立派な人になれるし、前世で悪行を重ねれば、現世で罰を受けなければならないと信じているのです。

(仏教の国のビルマ族の話)

ペグー (現パゴ) 97頁より続く

昨夜は中ビルマのマンダレーから一挙に首都ラングーンに飛び、ビルマの幹線道路を猛スピードで突っ走って20年振りにペグーに向かい、22:30に国立のシュエ・ワタン・ホテルに着いて旅装を解いた。

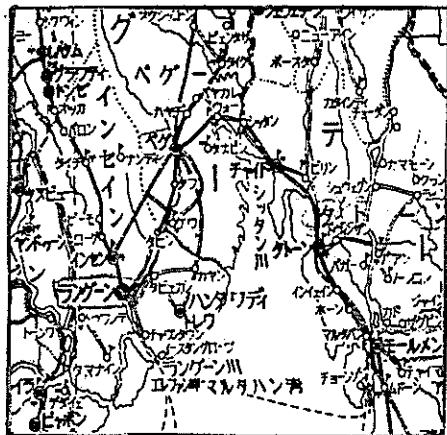
国立はレベルの低い代名詞のようで、風呂好きな日本人向きではなかった。バスはなく、シャワーは水と熱湯が別々に出るだけで、使いものにはならず、長途の旅の疲れを癒すことは出来なかった。世界中を歩いてきた私にも初めての体験で、矢張りビルマは後進国の後進国であった。

『ペグーの歴史』

ラングーンの東北方約70kmにあるペグー(現パゴ)は、マンダレー、パガンとともにビルマの古都として知られている。マンダレーを京都、パガンを奈良に例えるなら、ペグーは鎌倉といったところだろうか。

6世紀に開かれた歴史のある町である。1287年から1539年まで続いた南部ビルマ(下ビルマ)のモン族の王朝で、別名をハンターワディ朝という。

創始者のワレル(在位1287~96)はドンウン村出身の行商人であったが、タイのスコタイの王に仕えて近衛隊長に取り立てられた後、王女と駆け落ちして郷里に帰り、1281年にはマルタバンを、6年後にはペグーを支配下におさめて、モン族の王となった。



ワレルの王統は8代続いたが、ビンニャウ（在位1353～85）の治世に王都がマルタバン（モールメンの対岸）からペグーへ移された。その子ラーザダリ（在位1385～1423）は、イラワジ・デルタの要衝バセインやミャウンミヤを落とし、王国を3省96郡に再編した。これは下ビルマの行政単位として19世紀初頭まで機能を続けた。

下ビルマのペグー朝と上ビルマのアヴァー朝とは、14世紀末から15世紀初頭にかけて激闘を繰り広げたが、ペグーの勢力は弱体化し、ラーザダリの王女シンソープは、アヴァー王の下で人質生活を送った。アヴァーを脱出してペグーに逃げ帰った彼女は、1452年ペグーの女王に即位した。

シンソープは7年後に引退し、アヴァー脱出のとき随伴してきた僧の一人を還俗させて王位を譲った。これがダンマゼーディー王（在位1459～92）で、彼は比丘22人をセイロンに派遣し、大寺派の儀式を導入してペグーにカルヤーニ結界（聖域として定めること）を結ばせた。

王朝は15世紀中頃から16世紀にかけて栄えたが、タカユッピ（在位1526～39）の時、タウングー朝のダビンシュウェティーに攻められて滅んだ。

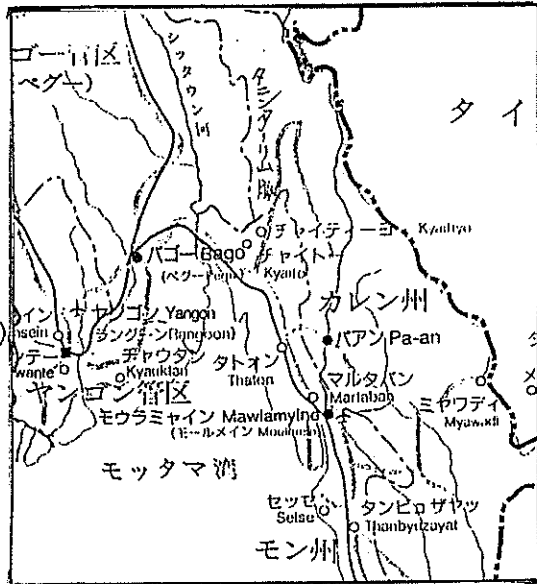
ビルマの歴史を読むと、ビルマ千年の歴史は中国と同じく、暴を以て暴に易（か）え、互いに憎しみ合うことの繰り返しであった。ただ仏教という信仰をぶちこわすことはなかった。

チャイティーヨ（チャイはパゴダ、ティーヨは傘をさしている形）

1月14日早朝の7:30にホテルを出発した。片道110kmの行程は所要時間がバスで約5時間、悪路と山道という悪条件であった。

ビルマ中央部を一周して疲労は蓄積し、駿馬も老いては駄馬となる譬えのように、私の身にも人生の終焉が近づき、欲も得もない状態であった。（チャイティーヨは右図の中央）

限りなく高い空と限りなく広い大地の中を走ると、車窓の外の景色が吸い寄せられるように移り変わり、幾つかの橋梁を渡った田園地帯はのんびりとして、それがまた地上の楽園のように映っていた。



シッタン河流域に接近していくと、数年前に大洪水があったらしく田園地帯は荒廃し、堤防は崩れて橋梁は落下し、経済力の貧弱なビルマでは復旧資材も機械力もなく、すべて人海戦術だけの復旧作業であり、工事は遅々として進捗していない状態である。

ビルマ作戦最後のシッタン河会戦では、幾万もの将兵が幽明境を異にしたことを想うと、背筋に走る悪寒に身はふるえ、雑念を振り払って心の中で水漬く屍の御冥福を祈った。

シッタン河に架かっていた仮の木橋を渡っていったが、半世紀も前に通過した往時の記憶は蘇ってこない。それはその筈、昔の鉄道橋と車道橋は、ずーと下流の海岸線に沿っていた。赴任のその当時に目にした、シッタン河口のもの凄い潮の干満の差は空恐ろしい光景で、恰もビルマ戦線の残酷悲惨さを予言しているようであった。

ツアーの人達に、シッタン河口の潮の干満の差は世界第2位であることや、この先にあるモールメンという町は、世界最初のライターの発祥の地だと、無聊を慰めながら説明していると、乗車しているバスは「チャイト」の町を通過した。それから30分後の10:30に、トラック・バスの発着地の「キンパン」に到着した。ここまでの所要時間は3時間であった。(右はキンパンのモン族村)

キンパンの「モン族」の部落の広場には、トイレや売店等が設備され、ここから急斜面の山道を登坂するため、トラック・バスに乗り換えなければならなかった。



トラック・バスは1トン車の日本製中古車で、荷台に木製の長椅子を固定したものである。一行17人は一台の車に乗れるだけの広さがあり、幸いにも私は最高年齢者の特別待遇で、助手席に乗車することが出来た。ツアーの人達に感謝しなければならない。

満目青々とした山道は凹凸が激しく、車はジェットコースターのように急上昇や急下降を繰り返し、苔の生えた岸壁に突き当たらないかと思いながら、助手席のお陰で、路傍に咲く可憐な小さな花まで見つめることが出来た。

トラック・バスに乗車して激しい振動に揺られること45分、山の中腹を切り開いた広場で停車した。ここから頂上の「チャイティーヨ」までは細い山道で車は通れず、徒歩か籠を利用して登らなければならない。

脚の不自由な私は勿論のこと我が妻も籠に身を任せた(片道1200チャット、約5ドル)。中国の黄山や蛾眉山でも駕籠に乗ったことがあるが、乗り心地はビルマの方が断然よい。それは4人で担ぐから安定し、足を真っ直

ぐに伸ばして座れるからであった。

「モン族はビルマ南東部のモン州の主要住民で、人口は約150万人ぐらいである。服装や風俗、日常生活などはビルマ族と殆ど変わらない。宗教的にも仏教徒である。

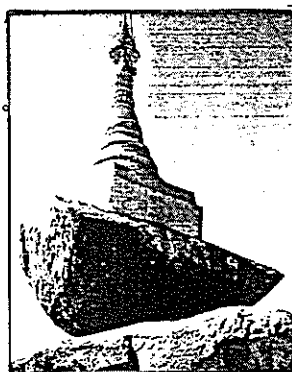
モン族は昔は南部ビルマ三国を築くほどの勢力を持っていた。住民の大半は水田耕作を行い、海岸に棲むモン族の中には漁業や製塩業に従事している人もいる。(右は籠に乗った私)



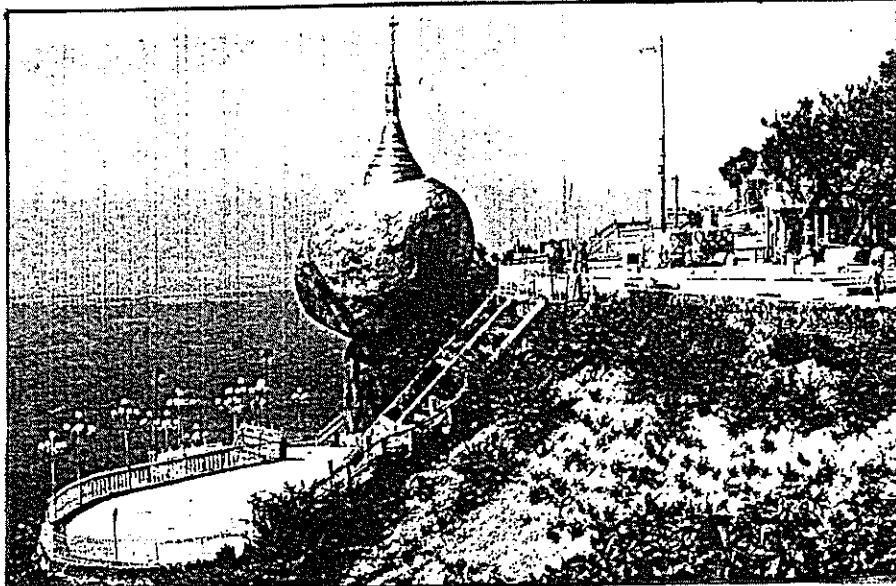
徒歩で登山する人達よりも籠の方が速度が速く、「チャイティーヨ仏塔」の石造りの門の所で籠から降りたが、一行の姿は全く見えなかった。仏教の信仰が厚いビルマの人達は、赤貧洗うがごとき生活を営みながらも、信仰に生きようと私を追い越したいった。

もう既に生命が枯れようとしている私は、とても一行と行動を共にする脚はなく、目標は不思議な仏塔だと杖をつきながら、一人でぼつぼつと歩いてビルマ人の後を追った。

石の門の左手に不安定な土台石の上にパゴダが建っていた(右の写真)。しかしガイドブックで見てきたものとは明瞭に異なり、脚を急がしたが膝が痛むばかりであった。(右上の写真はチャイティーヨ入口の、石門の左にあるパゴダ)



幸いに頂上は平坦な広場で歩きやすく、遥か彼方の左の方の崖淵に、写真の通りの球体の奇石が見え、その上にパゴダが建っていた。



まさに金殿の球のように燦然と黄金の光を放っているパゴダは、自分が夢の中にいるような感じである。(前頁の下の写真はチャイティーヨ・パゴダ)

チャイティーヨ・パゴダは、海拔1080mのハウウンラウン山の山頂にある、大岩の上に建てられたパゴダである。その球状をした大岩の周囲は約24m、高さは約8mで、パゴダの高さは約4、5mである。

広場から眺めるだけで止めれば良かったが、ここまで来たからには下の方からも覗きたいと、心は矢のように急ぎ無理を承知で階段を降りていった。

下の広場から見上げるパゴダは、いまにも転がり落ちそうで、押せばゆらゆらと揺れるのに、決して落ちることはない。この不思議な球状をした大岩の上にパゴダを建て、聖地として崇められているのは、ビルマ人が縁起を担ぎ、占いを信じているからであろう。

この世の森羅万象は、およそ人の営為努力には限界がある。だから何か外の力を借りなければならぬと、ビルマ人は信じているようだ。この不思議な大岩もその例に漏れず、仏教信者を魅了するのであろう。

いよいよ階段を登って頂上の広場に戻ろうと石段を踏むや否や、膝間接に激痛が走った。手の指の骨が折れるほど杖を握りしめ、ゆっくりと脚を運んだ。その時、若いビルマの人が手を貸して後押しをしてくれたが、地獄に仏でチャイティーヨの御利益は靦面(テキメン)であった。

広場を漸く通り抜け、石門の傍らにあったチャイト・ホテルに辿り着くと、昼食は中華料理であった。その席から眺める展望は、ジャングルの大海に浮かぶ孤島のような感じで、遠くのシクタン河の流れを眺めていると、千山万岳から射つ敵の殷々轟々たる砲声が、彼方から聞こえてくるような錯覚を覚えるのであった。

地図を広げてみると、この連峰の東北方に、我々がサルウィン河を渡ったケマピュの渡河点があり、当時の状況が懐かしく思い出されたのである。

この地方一帯は長い間、反政府組織の活動範囲だったため、訪問は制限されていた。しかし今は外国人や個人旅行者にも解放され、自由に訪れることが可能になった。私にとってはチャイティーヨを始め、ピンダヤ、カロー、サジ、メークテーラ、ポッパ山は未知の地で、改めてビルマの良さを感じたのであった。

かつてこの地を支配し、仏教文化を築いたモン族の間に、チャイティーヨ仏塔(パゴダ)について次のような言い伝えがある。

釈迦が悟りを開かれてから26年経った時のこと、この地方に弟子たちを連れて訪れられた釈尊が、ある老修行僧の求めに応じて、2本の聖髪をくださった。老修行僧は釈尊の聖髪2本を、僧侶の坊主頭に似た大岩の中に安置し、その上に小さな仏塔を建てて礼拝した。

以来、多くの人々がこのチャイティーヨ・パゴダを訪れるようになったと言われ、「チャイティーヨ」とは、モン語で「僧侶の坊主頭に乗った仏塔」という意味である。

チャイティーヨ仏塔が建立されたのは何時頃なのか、歴史的にははっきりしたことは解っていない。しかし1185年、スイタインの領主フウティンカトウがこの地を訪れ、仏塔を遥拝したと王朝記に記されている。

ビルマの仏教徒が仏塔に参拝するのは、この世で功德を得るためである。このチャイティーヨを参拝した者は、この世のあらゆる災厄から逃れられ、幸福がもたらされると言われている。

ラングーン在住の仏教徒の間では、チャイティーヨに3回以上巡拝すれば金持ちになると信じられている。

午後2時に昼食を摂ったホテルの前から再び駕籠に乗り、トラック・バスに乗り継ぎ、16:00に観光バスに乗車してペグーのホテルへと急行した。

途中数回のトイレ休憩の他は、疲労のために自然に眠りに入り、バスが停車して眼を覚ますと、血のような真っ赤な日輪が名も知らない湖面に沈んで行った。

全体の景色が色を失って黒ずんでゆき、風邪のない夜の街道は静寂と星明かりに包まれ、時々、バスのヘッドライトに照らされる牛車の軋る影だけが、無聊を慰めてくれた。

心配していた長距離で悪路に山道のチャイティーヨの旅路も無事に終わり、出発してから11時間半後の19時にシュエ・ワタン・ホテルに帰着し、胸を撫で下ろしたのであった。

ペグー市内観光の前に、「メークテーラ会戦以降の戦鬪」と「第28軍のシタン河突破作戦」を記述することにする。



メークテラ会戦以降の戦闘

(69頁に続く)

『ビルマ方面軍司令部の総退却とラングーン放棄』

ビルマ方面軍はイラワジ及びメークテラ両会戦を中止し、次いでトンゲー(現タウンゲー)会戦を決意した。このため15軍をシャン高原を経てトンゲーに先行させ、マンダレー方面の敵に対し33軍に持久を命じた。(33軍は前記の通り司令部のみが、メークテラ会戦の指導のため転進し、我が56師団は単独でシボウ付近で持久していた)(右図参照)

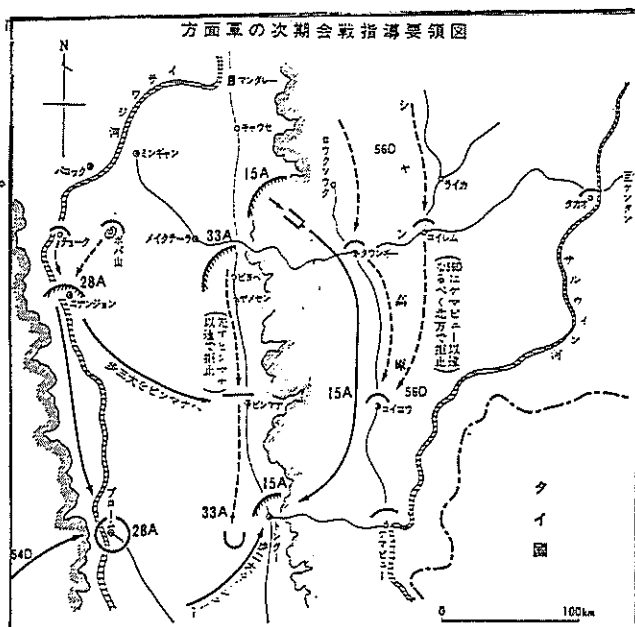
英印軍はマンダレー街道沿いに急追するほか、エナンジョン方面から深く33軍の左側背に突進し、方面軍が予想したとおり、33軍は空地からする優勢な英印軍の強襲の前に、たちまち突破されてしまった。

我が15、33両軍の各師団はこれまでの激戦で大損害を受け、方面軍が考えるような戦力はなく、したがって師団独力で敵を拒止せよと言われても、とてもその力はなかった。そして、殆ど防御態勢を整える暇もなく、トンゲーは敵機甲部隊のため突破されてしまった。(4月上旬)

その前の3月29日、コンソリ機約70機が、ラングーン郊外の森林下に遮蔽した方面軍司令部を空襲した。簡易木造の司令部は一瞬にして吹っ飛び、防空壕に待避した木村方面軍司令官以下は、爆風のため吹き上げられた土砂のため、危うく生き埋めにされるところであった。(この時期の我が大隊はタウンジーに向かって転進中であつた)

方面軍がメークテラ会戦の中止を決定したのが3月28日であつたが、4月22日には早くもトンゲーが突破され、さらに5月3日にはラングーンが攻略された。まことに驚くべき敵の快進撃であつた。(我が大隊はハイホータウンジーの戦闘中で、この状況は全く知らなかつた)

当時のラングーン防衛は独立混成第105旅団で、旅団長は歩113出身の松井秀治少将であつた。独立歩兵大隊3ヶ大隊を基幹とする旅団(3月編成)は、4月28日、一路、南進中の英印軍をペゲー付近で邀撃するため、



ラングーン防衛隊の主力を率いて出撃した。我が大隊の第8中隊はこの混成旅団に転属になったが、どうなつたであろうか。

4月23日、木村ビルマ方面軍司令官はラングーンを脱出してモールメンに移動し、事実上ラングーンを放棄した。知らぬが仏で、我々第一線部隊はこのような状況は知らされずに、方面軍の最北端で闘っていたのである。

『第56師団の行動』

イラワジ会戦に敗れた15軍の転進援護を命じられた56師団は、4月中旬、サジ方面からカロー方向（65頁地図参照）に進出を予想する、第19インド師団に対する対策が必要となり、歩146聯隊をタウンヂー付近に転進させ、方面軍の右翼兵団として努めて多くの敵を牽制抑留し、且つ敵の背後連絡線を脅威する。（この状況も知らされていなかった）

当時、インレ湖及びタウンヂーの病院に約6000名の患者がおり、インパール作戦やイラワジ会戦間に負傷した将兵が収容されていた。別に56師団自体でも約1000名の患者を抱えていた。

その患者を調査したところ、歩行できる患者と、できない患者は約半々であった。そしてタウンヂー～ケマピューの距離は約300kmで、サルウィン河の渡河が問題となった。（下の地図参照）

ケマピュー東方のサルウィン河の川幅は約1000m、漕渡による全患者を対岸に渡河させるには、約半年以上かかる計算である。

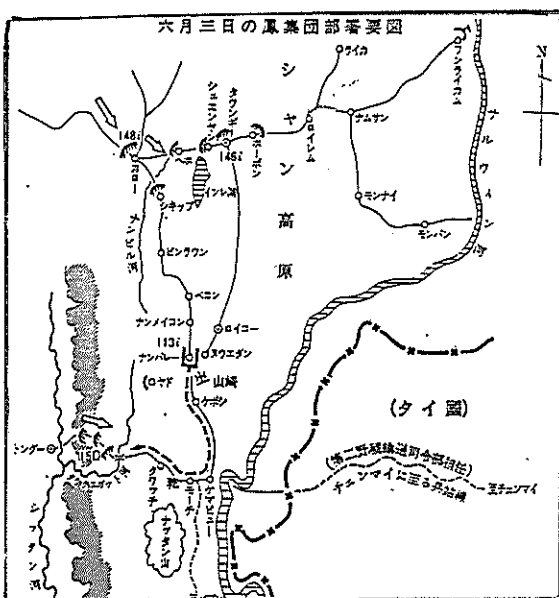
師団はいろいろ考えた末、モーチ鉞山からワイヤ・ロープを取り寄せ、「滑網渡」を試みたが、これだけの川幅に重いロープを張ることは容易でなく、8回も張り直して成功した。

『鳳集団の防衛戦闘』

前記の通り56師団はシャン高原の要地を占領し、我が大隊も5月中旬頃までハイホ～タウンヂーの線で敵を拒止していた。

56師団長松山中将は5月14日に至り、師団は5月末にロイコー（右図参照）付近に後退し、同地付近に兵力を集結するよう予定し、その旨を方面軍に報告した。

その時、56師団は5月30日以降【鳳集団】となり、第15師団及び第55師団を併せ指揮し、



且つ15軍の任務を継承する方面軍命令を受領した。しかし3日後、15師団及び55師団主力もまた、15軍、55師団司令部の後を追って、タイ及びインドシナ方面へ転進を命じられた。

よって爾後、鳳集団は56師団のみをもって、独力でシャン高原の防衛に当たることになった。

「6月3日に於ける鳳集団の部署」

- トングー方面。歩113聯隊はモーチに前進して15師団と交替する。
- ロイコー方面。歩148聯隊はカロー、シキップ間の縦深地域を利用し、極力敵の前進を阻止して要域を成る可く長く確保する。
- 歩146聯隊は有力な一部をハイホ付近に、主力を以てタウンヂー付近に於いて敵の前進を拒止する。
- ライカ方面から後退した歩146聯隊は、一部を以てホーボン東方を確保し、主力を以てタウンヂー及びシュエンヤン付近を占領して、主としてカロー方面から東攻する英印軍に対し警戒。
- 6月中旬に入り、歩148聯隊がカロー地区から後退するに及び、同方面の英印軍はハイホ方面に前進し、更に6月22日には戦車を伴う敵はハイホに進出して、歩146聯隊第2大隊（寺前大隊）と激しい攻防戦が展開した。（一部重複して記述する部分もある）

『鳳集団の防衛作戦と第28軍への策応』

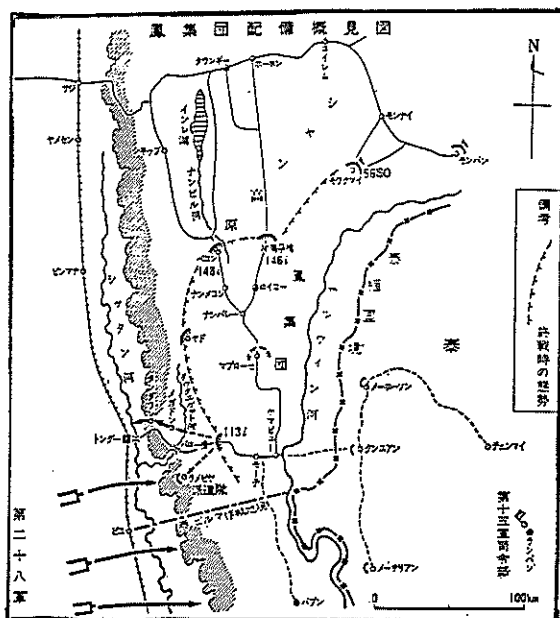
鳳集団は6月28日、次のように命令した。

集団は来攻する敵をモンパン、モウクマイ、菊平橋、ペコンの各以北及びモーチ西方分水嶺以西に於いて遠く拒止する。

戦闘指導の主眼は我が兵力を強大に欺瞞して敵を牽制抑留し、少なくとも7月末まで持久する。

歩146聯隊は成る可く長く現陣地（タウンヂー、ホーボン）、已むを得ざれば菊平橋以北の地域に於いて持久すべし。特にタウンヂー、ホーボン付近の陣地撤退後工兵聯隊と協同し敵戦車の突進を阻止すべし。

歩148聯隊は成る可く多くの兵力を以て敵主力の歩146聯隊に対する側背を牽制すべし。



この命令の意図は、北方戦線ではこれまでの確保線から逐次、業平橋の線に戦線を取縮すると共に、7月上旬頃、トングー方面では歩113聯隊を以て、第28軍のシッタン河突破作戦に積極的に策応させるものであった。

以上のように鳳集団は、北方の敵をロイコー北方要線で拒止しつつ、トングー方面に対しては果敢な挺身斬り込みを決行し、この間、防衛地域内に策動する敵のゲリラ部隊の掃討を実施する等、孤軍勇戦を続けていた。

ところが、8月8日に至り、【第56師団は在タイ第18方面軍司令官（中村明人中将）の指揮下に入る】ことになり、更に翌9日、第15軍司令官の指揮下に転じた。（15軍は先に18方面軍の指揮下に入っていた）

●（これらのことは戦史叢書で初めて知ったことなので、以下も同じである）

『南方総軍命令』

- 第56師団（龍）を現在地に於いて第18方面軍の指揮下に入らしむ。
- 第18方面軍は前項部隊を併せ指揮し、ビルマ方面軍の行う「シッタン会戦」に策応すべし。
- ビルマ方面軍と18方面軍の作戦地境は、「ピュ」「ケマビュー」南方22kの国境を連ねる線とする。
（前頁地図に作戦地境は明示されている）

『第18方面軍命令』（在タイ）

- 56師団は第15軍の指揮下に入るべし。
- 15軍司令官は56師団を併せ指揮し、ビルマ方面軍の行う「シッタン」会戦に策応すべし。
- 又、28軍の転進を容易ならしめつつ、成る可く速やかに56師団主力を「チェンマイ」付近に集結して、現任務を続行すべし。
- 56師団のサルウィン河以東への転進完了の時期は、概ね8月末を目途とし、適時現戦線を撤すべし。

以上のように我が56師団は現在のまま15軍司令官の指揮下に入り、概ね8月末を目途にサルウィン河以東に撤退、次いでチェンマイ地区に転進することになったが、師団主力のサルウィン河以東への転進は、実行に移されることなく終戦を迎えた。

我々最前線の将兵は56師団が鳳集団になったことも、タイの第18方面軍、さらに15軍司令官の指揮下に入ったことも全く知らず、ケマビューからサルウィン河を殿部隊として渡河し、チェンマイに向かったのであった。

第28軍のシッタン河突破作戦

4月下旬のトンゲー会戦の失敗をはじめ全般の戦局から考慮して、ビルマ南部の第28軍の、今後の作戦は極めて困難になると予想した桜井軍司令官は、ビルマ方面軍司令部のモールメン転進後、28軍独自の考えで行動しようと、考えるようになったと言われている。

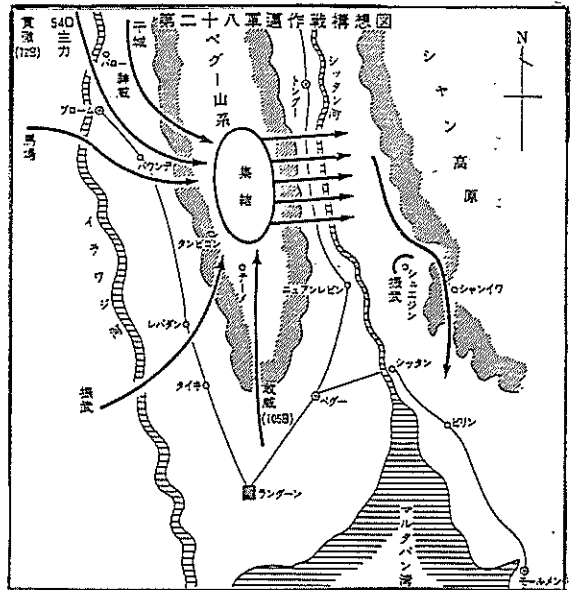
(方面軍司令部の転進のため、28軍は取り残された形になったのである)

28軍は万一の場合はペグー山系(右図)に移動して、遊撃戦に転移することは、随分以前から抱いていた構想であった。

いよいよペグー山系(山脈)の山中に入ると決心すると、何時までこの山中に立て籠もっておれるか、が問題となった。

この山系は食糧の自給自足の点から見ても、軍が長く生存して戦闘していくことは困難に思えた。したがって精々、雨期明けまでの期間は、この地に蟠踞して遊撃戦を続け、次の乾期になる前にシッタン河東岸に移る必要があると考えられた。

(右上は第28軍「適作戦」シッタン河突破構想図)

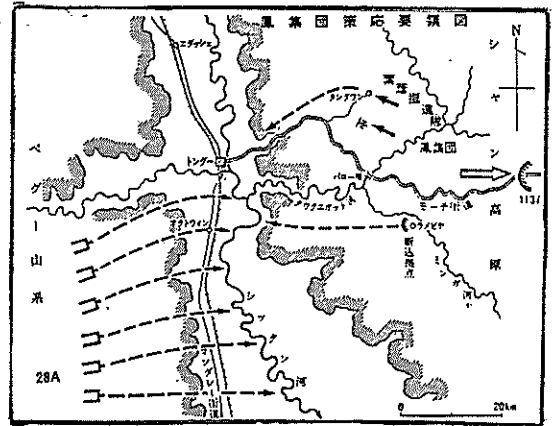


4月22日にトンゲーを突破した英第4軍団は、29日には日本軍の強固な抵抗を突破してペグーを占領した。一方、5月2日夕刻、第26インド師団はラングーン南方海岸の上陸に成功し、5月6日には南北の両部隊は握手した。

ラングーン攻略は落下傘旅団の1ケ大隊を以てラングーン河河口付近に降下し、引き続き第26インド師団とともに、ラングーン河両岸より攻撃して占領した。

(右図は鳳集団56師団の策応図)

これによって28軍は取り残されて孤立の状態に陥った。



7月下旬を期し、28軍の将兵は時あたかも雨季の最盛期、濁流渦巻くシッタン河を一片の筏にその運命を託し、敢然と渡河を開始した。

川幅は約200m、流速は2mを下らず、筏は概ね3人または4人をもつて組とし、相次いで逆巻く奔流中に飛び込んでいったのである。

その夜は天佑にも降雨なく、月光下暗雲は乱れ飛んでいた。筏を押し中流に出ると、水勢に巻き込まれて筏もろとも下流に流れ去る者、渦巻く流勢に押し返されて、また元の岸に舞い戻る者などが続出した。

打ち続く激闘と、2ヶ月余に及ぶペグー山中での作戦準備とで、将兵の体力は極度に衰え、この間、栄養失調と悪疫のため死亡する者も多く、漸く突破作戦に参加した者も、既に心身ともに疲れ切っていた。

したがってシッタン河の濁流との戦いで、ついに精根尽きて流れていった多くの者は、シッタン河の下流に配備していた53師団や18師団の将兵の眼前を、遠くマルタバン湾の沖まで流されていった。53師団の或る部隊では、1日に最大270体の死体が流れていくのを見たと言われている。

その時、英印軍は28軍の全滅を繰り返し放送した。第33軍の将兵もその惨状を眼前に見て、一時は英印軍の放送を信じたと言う。

28軍は約34,000の兵力をもってペグー山中に入った。その後シッタン平地の突破作戦終了までに約2万名近い損害を出し、友軍戦線内に辿り着いた兵力は1万5千余に過ぎなかった。

司令部は7月26日の夜に最後の準備を行い、翌27日夜を期して渡河を決行することにした。それまでも敵砲弾の追跡を受けてきたが、この日の夕刻も砲撃されて混乱が生じ、若干の死傷者が出た。

軍司令官桜井中将はこの夜、河畔に立って初めて滔々と流れる雨季最盛期のシッタン河を見た。この濁流を渡るには大きな犠牲を覚悟しなければならないが、もはや断行のほかなく、秘かに天佑神助を念じたと言う。

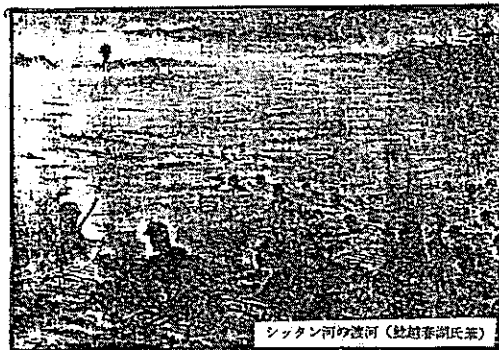
将兵は薄暮とともに河岸に進出して筏の組立を始めた。幸いにこの夜は降雨はなく、河岸には敵影はなかった。

渡河部隊が岸を離れたのは午前0時で、将兵は一片の筏にすがりつつ相次いで濁流に身を投じていった。

はるか上流で渡河した部隊の兵が、助けを叫びながら軍司令官の眼前を流れて行く。中には助けを求める力も尽き、声もなく流されている者もあり、溺死体も混じっていたことだろう。

軍司令官は自分の命令で、この惨憺たる苦難に耐えている将兵の姿を眼前にして、心中ただ神仏に加護を祈るのみだったと推察する。それにしても、方面軍司令部の無責任が問題である。

(上はシッタン河の渡河の画)



我が寺前大隊の終戦と泰緬国境通過 (続56頁)

タウンヂーに於ける寡兵で以て闘った超廣正面防御は、時間との戦いであった。丸裸にされた陣地の間隙を塞ぐ兵力はなく、時間を追うように隙き間から敵の侵入を受けた大隊は、寸断されて退路を遮断される危険が切迫した。

命令によってタウンヂー南方約10km付近に後退し、布陣したのは七月下旬ころであった。(下はタウンヂー～ケマピュー渡河点～チェンマイ図)

戦車を戦闘にしてタウンヂーを占領した敵は、我が大隊の後退に付随してホーボンに向かって追撃した。数日後には堤少佐の指揮する第3大隊陣地に攻撃を開始し、遠雷のような咆哮が響きわたっていた。

(右図の上部にあるタウンヂー及びホーボンの南方に布陣した歩146聯隊の西方陣地が寺前大隊、東方陣地が堤大隊)

我が大隊は敵の主攻から外れて天を衝くような砲爆撃の炸裂音から解放され、久しぶりに命拾いをしたという実感に打たれながら、平坦な地形に陣を敷いて食糧の徴発に精を出していた。

そのある時、私は中隊長とともに警戒陣地を視察中、ターバンを頭に巻いたグルカ兵の一隊を発見し、凹地を利用して彼等の接近を待ち受けた。固唾を呑み息を殺し、陣前30mまで引き寄せて不意急襲射撃を浴びせた。

前進するのも地獄、後退するのも地獄となった敵は、一切の兵器等を投げ捨てて退却し、一瞬にして遺棄死体は70～80を数えた。

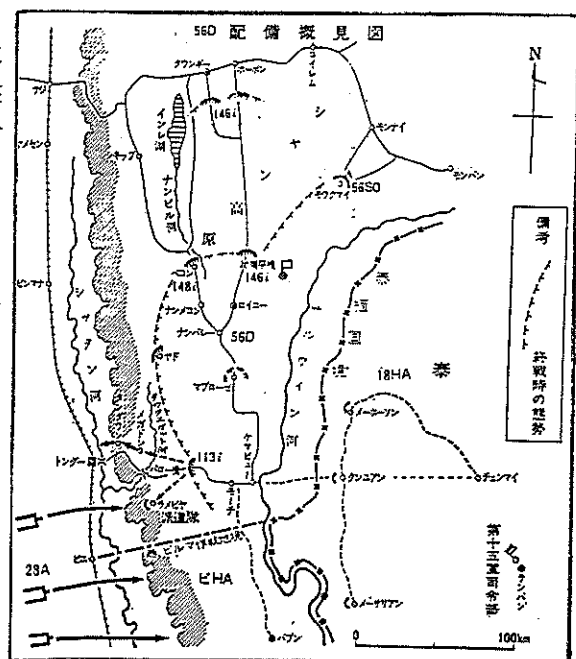
8月上旬のこの戦闘が「我が寺前大隊の最終戦」となり、ヘイホ以来、戦運は我に味方した。そして戦闘の最大の戦利品は優秀な無線機であった。

この捕獲した無線機に耳を当て、毎夜7時から放送するデリー・ニュースを傍受することが日課となった。日本本土を始め世界の情報から壘棧敷に置かれていた私は、初めてポツダム宣言を聞いたのである。

(我が大隊の終戦時の位置は、最後の戦闘を交えた位置より南方10km)

図上の「ビHA」はビルマ方面軍。「18HA」はタイの18方面軍。

28Aは28軍。56Dは56師団。146iは歩146聯隊の略号。



一兵の影、一条の炊煙を発見しても爆弾の雨を降らせた敵機は、飛来しても旋回するばかりで、不思議なことに今日は爆撃をしなかった。考えてみると、それは丁度8月15日の夕刻のことだったと推定される。

我が上司の聯隊長から、「爾後、敵との積極的な戦闘行動を中止すべし」との無電が入った。無念千万ながらデリー・ニュースが真実となったと、直感しなければならなかった。

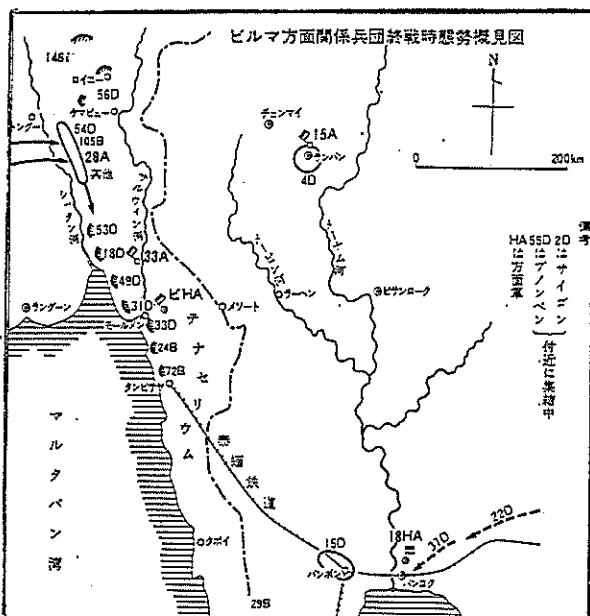
8月16日(推定)に「暗号書類等の機密書類の焼却命令」、17日(推定)に「現陣地を撤退する後退命令」、18日(推定)、問道からホーボン～業平橋～ロイコーの国道に出て、直接、聯隊長と電話で会話して、初めて「終戦」という辞を聞く。戦いが終わったことは「敗戦」だと、ビルマ戦線では誰しも理解したことである。

大隊長として如何にして「終戦」を部下に伝えるか、が頭を悩ました。月光は冷たく寂しい光をシャン高原を照らし、そよ風が哀しく吹く荒野の中で、大隊將兵を前にした私は軍刀を抜き、「大命により軍は一切の戦闘行動を停止する」「兵器の御紋章は抹消すべし」と下命した。(兵器は天皇から下賜されたものとされていた)

無言の悲しみに沈む夜行軍の隊列からは、馬の嘶(けき)一つさえ聞こえず、落武者のような御通夜の夜行軍は、敗戦の慟哭をこらえた將兵の心の現れであった。

夏虫さえも鳴かなかった沈黙の夜行軍を続けること10日間ビルマ方面軍の最北端に位置していた我が大隊も、漸くサルウィン河の渡河点「ケマビュー」に辿り着き、軍の殿部隊となって渡河した。

英軍からの戦犯を免れるため56師団長松山祐三中将は、独断でサルウィン河を渡河してタイ国に入ると聞かされていた。しかし戦史叢書によると、終戦前の8月8日に56師団はタイの18方面軍の指揮下に入り、チェンマイに集結を命じられていたのである。



(上の地図は終戦時のビルマ方面軍、タイの18方面軍の態勢。我が大隊は地図の左上の146iの位置で終戦、日本軍の最北端である)

ケマピューの渡河点から一日行程でタイ領に入った。国境のドウナ山脈は



2000m級の連峰で、道なき道に人知れず咲く野性の花に慰められながら、薄暗いジャングルと深い溪谷の中をとぼとぼ歩き続け、10月下旬頃に古都チェンマイに着いた。当時、城壁があったチェンマイが偲ばれるが、戦後は中国と同様に取り壊されてしまった。

その後、炎天下のタイの北部チェンマイから、南部のナコンナヨーク（バンコク東北方約100km）までの数百kmを行軍し、年末に到着した。

1946年5月、日本本土帰還が決定して乗船する数日前に、英軍主催の降伏式が挙行された。日本軍は大隊長以上の各級指揮官が参列し、英軍儀仗兵の華麗荘厳威圧的な儀式の後、我々将校一人ずつ英軍司令官の前に進み、佩刀していた軍刀を差し出して恭順の意を表したのであった。

参加した者は、死以上の恥辱のあまり涙痕は顔面を覆い、我が軍人生活の最後は涙の終焉であった。

（上の写真は最近入手したケマピュー渡河点付近のサルウィン河の風景）

ビルマの豎琴

戦後、著者の竹山道雄氏は「日本兵が敗戦後に脱走してビルマ僧になっている者がいる」と聞き、人類愛への願いを込めて書いた「ビルマの豎琴」は、昭和22年から3年にかけて「赤トンボ」（実業の日本社発行）という子供の雑誌に連載され、その後、短行本になり映画にもなっている。

死と背中合わせの戦闘の状況は経験者でも表現は難しい。著者はビルマとは一切関係のない人物のため、なおさら苦勞したことだろう。しかし実際の戦闘は「ビルマの豎琴」の比ではなく、奈落の底の生き地獄であった。

本書は終戦時の描写などの心境を良く表現し、特に我々ビルマ作戦従軍者のみならず、感銘を与えたのは慰霊の精神である。戦後半世紀を過ぎて戦争は遠くなり、慰霊問題の行く末が心配でならない。そのため、「ビルマの豎琴」の水島上等兵の隊長に宛てた手紙の一端を書き、今も尚ビルマの地下に眠る英霊の御冥福を祈りたい。

隊長殿 戦友諸君

私は皆様をどれほど懐かしく思っているか分かりません。どれほど隊に帰って一しょにつとめ、一しょに語り、一しょに唱いたく思っているか分かりません。苦しみも喜びも異郷でともにした月日を、忘れがたいか分かりません。さらに、どれほど日本に帰りたいか、ことに変わりはないと思われぬ国に行って家の者に会いたい、口にはいえません。

皆様が作業に行ったり、収容所で唱ったりしているところを、私はいくたび、こっそりと人知れぬところから眺めていたことでしょう。遠い地方に行っているあいだも、それを思うとやもたてもたまらなくなつて、またムドン（106頁地図の右下）の町にきました。そうして、いくたびも、あの収容所の柵の外に立って、いまは皆様が眠っている草葺きの家を暁の白むまでみつめていました。しかし、もうこの慰めもないことになりました。

私は日本には帰りません。そういう決心をいたしました。誓いをたてました。私はごらんになったとおりの姿になって、この国のあちらこちらを、山の中、川のほとりを、巡礼してあるきます。ここに、どうしてもしなくてはならないことがおこりました。これを果たさないで去ることは、もうできなくなりました。私はひとりでこの国に残ります。そうして、幾年の後に、いまはじめている仕事がすんだときに、もしそれがゆるされるものなら、日本に帰ろうと思います。あるいは、それもしないかもしれません。おそらく生涯をここに果てるかと思ひます。私は僧になったのですから、いまは仏につかえる身になったのですから。すべては教えの命ずるがままです。私はただ、われらよりより高い者の意のままに、それがなせという言葉に従います。

私がしていることは何かといいますと、それは、この国のいたるところに散らばっている日本人の白骨を始末することです。墓をつくり、そこにそれをおさめ葬って、なき霊に体安の場所をあたえることです。幾十万の若い同胞が引きだされて兵隊になって、敗けて、逃げて、死んで、その死骸がまだそのままに遺棄されています。それはじつに悲惨な目をおおうありさまです。私はそれを見てから、もうこれをそのままにしておくことはできなくなりました。これを何とかしてしまわないうちは、私の足はこの国の土を離れることはできません。

隊長がいわれた、一人もれなく日本に帰って共に再建のために働こう一、あの言葉は私も本当にそう思ひました。いまでもそうしたいと願ひます。しかし、一たびこの国に死んで残る人たちの姿を見てからは、自分はこの願ひをあきらめなくてはならぬ、と思ひました。そして、これはただ私が自分でそう思うというよりも、むしろ、何者かがきびしくやさしく、このようにせよ一、と云つて命ずるのです。私はただ首をたれて、この背くことのできないささやきの声にきくほかはありません。

今日のお別れの「はにゅうの宿」の合唱。それに合わせてひいた豎琴。こ

れでいよいよそのあきらめもつきました。私はここに留まります。どうか皆様はお元気に御帰国の上、私の分も働いてくださいませんか。

次に、あの山の中の村でお別れしてから後の、私の行動を報告いたします。一私はいま僧院にいて、夜を徹してこの手紙を書いています。もう暁にちかく、月がひくく傾いて、庭の椰子の葉の下にほ一つと大きく光をあげています。星がしきりにながれています。

一私がどれだけ戦友たちに「水島です」と名のってゆきたかっかー、お察しください。しかし、ひとたび日本人だと分かれば、収容所に入らなくてはなりません。あたらしい任務をすてなくてはなりません。いくたびか手紙を書きかけましたが、いまさら未練なことはやめようと、いつも自分を叱って中止いたしました。一しょに帰って共に働くことができないのですから、生きていることが皆様に知られるのは、かえってつらかったのです。ことに、あとで本当のビルマの僧侶となつてからは、日本兵水島という者はまったくいなくなつたのです。

奥地で同胞を土に埋めながらも、皆様のことを考えるとどうしても心をおさえることができませんでした。そしてまたムドンにきて、収容所の柵のむこうに立って、合唱をきいていました。

一ああ、あの中に自分も交つてうたつたのに、となつかしさにたえませんでした。いつ皆様が日本に帰ってしまうかと、いつもはらはらとしていました。そうしてムドンに来ては、まだわが隊がいるのをみて、ほっと安心しました。

私が肩にとめていた鸚哥(インコ)は、私がときどき独り言をいうのをきいて、それをおぼえてしまいました。それはいま皆様のそばにいます。その代り、皆様の鸚哥がいま私の肩にとまっています。そうして、ときどき、

一おーい、水島、一しょに日本に帰ろう！ と申します。

そのたびに、私ははっといたします。

しかし私は帰りますまい。私が使命としてあたえられたところのものを果たすまでは、帰りますまい。昨日、つい心みだれて、平素の誓いもわすれ、豎琴をひいて、皆様に別れをつげて収容所から立ち去ったとき、私の両肩で二匹の鸚哥がこもごもに自分の言葉を叫んでいました。私はそのうちのどちらかをとらなくてはなりません。私はそのうちの片方をとります。そうしないわけにはいきません。あの無数の無名の戦死者たちの骨が、私をよんでいきます。私が行くのをまっています。私はこの叫び声に応じなくてはなりません。

皆様もゆるしてくださることと思います。

ムドンを去って、私はまっすぐにあのシタン河の渡河点に行きました。

日本軍は敗走するときには、たがいの連絡もなく、混乱をきわめててんでんばらばらに逃げました。

(中略)

どうしたらわれらは正しい救いをうることができるか。――。そしてそれを他の人にももたらすことができるか――。このことをよく考えたい。敬わりたい。それを知るべくこの国に生きて、仕え、働きたい、と念願いたします。

隊長殿

戦友諸君

お別れの言葉はいくら書いてもつきることはありません。

かねてからおそれながらも覚悟していた日が、とうとうまいりました。私は地方に行っていて、ひさしぶりにムドンに帰ってきたとき、本隊がもう明日、日本にむかつて出発するということをききました。私は案外おちついて、しずかにこの報せをうけることができました。

名残りを惜んでくださる皆様のお心は何よりもうれしく、あつく御礼申しあげます。私はこの好きなビルマの国にいて、雪のつむ高山から南十字星のかがやく磯のほとりまで、いたるところをさすらつてあるきます。これは思うに心のたのしいことでもあります。そうして、皆様をなつかしむ心にたえないときは、豎琴をひきます。

ながいあいだ、まことにいつくせぬお世話になりました。みなみな様の御清福を心からお祈りいたします。

水 島 安 彦

ビルマ戦線で英軍の捕虜になった日本軍の兵隊たちにも、やがて帰る日がきた。が、ただ一人帰らない兵士がいた。これが水島安彦上等兵である。

なぜか彼は無言のうちに豎琴をとりあげ、戦友たちが合唱している「はにゅうの宿」の伴奏を激しくかき鳴らすのであった。

戦場を流れる兵隊たちの歌声に、国境を越えた人類愛への願いを込めたこの書「ビルマの豎琴」は、戦後の荒廃した人々の心の糧となったのである。

私はこの本も読んだし映画も見た。しかし歩兵の最前線で闘った者には、激戦場の描写は物足りなく感じない訳にはいかない。又、具体的には間違っていることが幾つかあることも事実である。

指揮官としては、全員無事に帰還させることが終戦後の最大の責任であった。我が聯隊でも、しかも将校が逃亡した事件があったが、血気盛んな青年の心情は理解できるものの、部隊の団結の維持の点から、指揮官としては同意することは出来ない。

次はペギー観光に移るが、市内の「シェタリオン・パゴダ」は水島上等兵の隠れた寝釈迦のある寺院である（映画）。そのために「ビルマの豎琴」を先に記した次第である。

ペグー市内観光～ラングーンへ (続 111頁)

昨14日のチャイティーヨの往復11時間半もの強行軍は、老骨にはこたえた。しかし目覚めは早く、フロントをたずねると、商売上手にモン族独特の珍しい衣装品の数々を、私に買うように奨めてきた。

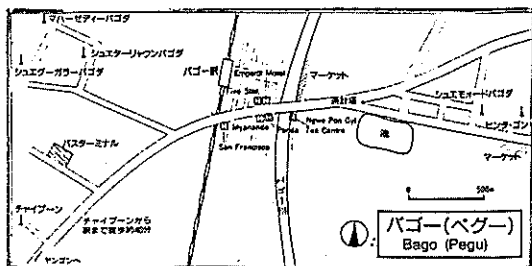
ラングーンから約80kmしか離れていないが、モン族の都として573年に開かれた町で、展示した品

はラングーンでは見られない物ばかりで、食指が動いて10点ばかり買い求めた。前回訪問の時には全然目に触れなかったが、外国人観光客用に作った物でドルで標示してあった。これだけ高値ではビルマの人は手が出ない。

今日1月15日の予定は、午前中はペグー市内観光、昼食後にラングーンに引き返すことになっていた。(上の地図はペグー市内図)

8:30にホテルを発ったバスは広い通りを通過し、町の中心部に入ると、ペグーの象徴「ヒンタ」という鳥の像が、小高い丘の上に見えていた。

かって大洪水が起こったとき、2羽の鳥が羽を休めるところを探していると、1羽だけが休める場所を見つけた。そこで1羽がそこに降り立ち、もう1羽がその上に乗り、共に羽を休めたという逸話があることから、この町は「助け合いの町」と呼ばれるようになった。

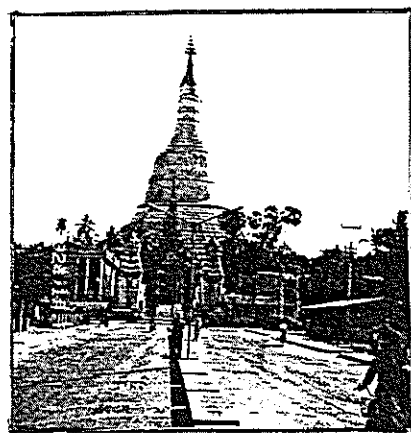


『シュエモドーパゴダ』

バスの中で記憶の糸を手繰っていると、見覚えのある黄金のパゴダがフロントガラスに映ってきた。これがモン族の王都ペグーの象徴である、世界一高い114mのシュエモドーパゴダで、「ヒンタ」から約500m位の所であった。(右はシュエモドーパゴダ正面)

このパゴダの歴史は古く、1000年以上も昔に遡ると言われている。釈迦の遺髪2本を納めるため、高さ23mの塔を建てたのが始まりであった。その後、何度も改築され、825年に25m、1385年に84m、1796年に91mと少しずつ天に近づいた。いった。

しかし1912年、1917年、1930年と立て続けに地震の被害を受け、再建と崩壊を繰り返した。特に1930年の地震による被害は大きく、

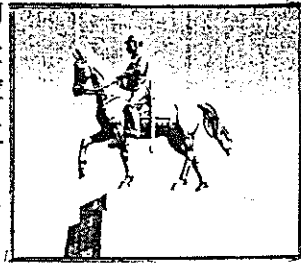


莫大な基金と民衆からの布施によって1954年に漸く完成したという。現在見られる塔の高さは114mで、ラングーンのスエダゴンパゴダよりも高い。

この寺が人々の特別な崇拜を集めているのは、釈迦の聖髪が祀られているからだ、このような絢爛豪華な大型化したパゴダを、再建する必要性に疑問を持ったのであった。

『チャイプーンパゴダ』

シュエモードパゴダを去って国道をラングーンに向かっていくと、屋根の上いくつものパゴダをのせた豪華な仏教図書館があり、その傍らにアウンサン将軍の像としては珍しく、日本軍将校姿の乗馬の銅像が立っていた。(右は乗馬姿のアウンサン像)



日本軍がビルマ進攻作戦を開始すると同時に、アウンサン等のビルマ独立義勇軍はモルメンに進出し、ペグーを通過した時の姿を表現しているのだと眺めていた。

ペグーの中心地から3kmほどラングーン寄りに離れ、国道から少し脇にそれた所に、ひっそりと建っていたのがチャイプーンパゴダであった。東西南北の四面に仏像がある寺院である。

高さ30mの柱の四面に四体の座像が作られている寺院は、1476年に建造されたもので、下の方に参拝する階段が見えていた。

伝説によると、この仏像の建築に従事した4人のモン族の女性のうち、誰かが結婚したら仏像が壊れると言われていた。そして一人が結婚すると、本当に四体の仏像のうち、一つが崩れ落ちてしまったと言う。

以前は実際に西側の仏像だけがひどく崩れていたが、現在は修復されて四体とも美しい姿を見せていた。実に珍しいパゴダである。(上の写真は四面の仏像があるチャイプーンパゴダ)



『シュエタリオンパゴダ』

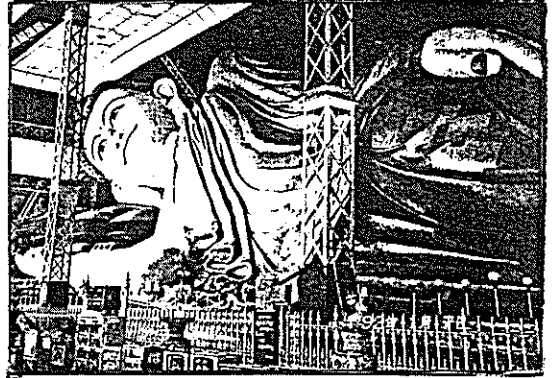
前記した「ビルマの竖琴」の水島上等兵が隠れた巨大な寝釈迦像がある寺院で、映画にもなった日本では馴染みが深いものがある。

国道から脇道に入って更に細い通りに折れると、眼前に大きな屋根だけが

現れる。ありありと前回の印象が残る参道を抜け、視線を上げると巨大な寝釈迦仏が網膜に飛び込んできた。

全長55m、高さ16m、耳の長さ4.5m、目の高さ1.2m、口の左右2.3m、眉毛の長さ2.3m、足の裏7.7mという大きさに圧倒され、恐らく端から端まで歩くのに1分はかかるだろう。

不思議にも威圧感というものはない。それは均整の採れた寝姿と、仏像が揺ったりとしていて、くつろいでいるように見えるからだろう。



(上の写真は寝釈迦像の頭部)

仏像の枕は、きらびやかなガラスのモザイクで飾られ、建物内部の正面左側には釈迦の一生を現した絵がはめ込まれていた。又、寝釈迦仏の両端に立っているモザイクで飾られた像は、「ナツ神」の精霊で、仏教がビルマに入ってくる前から信仰されていた神である。(62頁のポッパ山がナツの元祖)

寝釈迦像の足の裏に108の煩惱の絵が書かれているのは、私の脳中にありありと残っていた。それはカメラに収めたからで、写真を撮ることは記憶の第一歩である。

この寝釈迦像は994年にモン族のミガディパ王によって、建立されたと伝えられている。しかしペグー王朝が1757年に、アラウンバヤー王朝に滅ぼされると、その存在も忘れ去られて密林の中に覆われてしまった。

やがてイギリスの植民地となり、インド人技術者が鉄道線路敷設のためにやってきて、偶然この寝釈迦像が発見されたのであった。

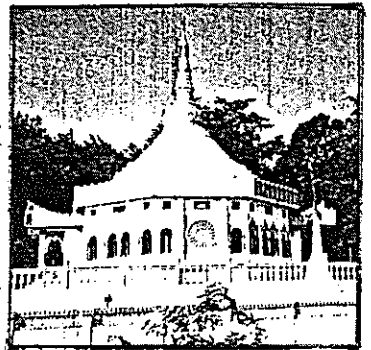
『ラングーンへ』

寝釈迦像に別れを告げると、何だか自然に寂しさを覚えてきた。旅の終わりには何時もそのような気がするが、これで戦友の眠るビルマとも最後だと思えば、「ビルマの豎琴」の心境が思い出されてくる。

車窓から、一人の日本人女性が建立したというパゴダを眺めて通過した。誰か身内の方がシタン河の戦いで戦死した、その慰霊のために建てたのではないかと想像していた。ビルマ戦線に従軍した25万人の将兵の心が、慰霊の一心に纏まっていることは誇れることである。

(右は一人の日本人女性が建立したパゴダ)

ペグー河沿いに開いていた市場を一巡し、ペグー市内のレストランで昼食を摂り、再び80km



西南のラングーンに向かった。そのバスの中で、私が日本国内を始め、中国やアジアの仏教国を廻った経験から、「仏教にはなぜ多くの分派を生んだのか」と疑問を持ったのである。ある書では次のように解釈していた。

釈尊の教えは、「口誦」によって次代へと伝承されていった。しかし釈尊滅後、100年を過ぎた頃から、10項目の戒律の解釈に相違が生じるようになった。とくに金銀錢を受け取ることに對する緩和の要求が、大きな波紋を投げかけた。

保守的な長老たちは、金銀錢の受領は違法であると主張したので、これを不満とする比丘たちは独自の教団をつくった。仏教界は保守的な比丘と、革新的な比丘の二派に分裂し、保守派を上座部（ビルマ、タイ、スリランカ）、革新派を大衆部（大乘仏教）と称した。

教団の分裂は二派にとどまらず、時代を経るうちに、更に新しい異説が生じて分派は細分化していくことになった。

無聊を慰めるために霊の存在についても考えたが、私には分からない。多くの戦死者を出した私にも、霊が浮かんで来たことはない。戦闘中は余りにも死が多く、そのようなことを考える余裕もなく、責任感に追いかけていただけであった。霊はその人の心の持ち方の問題で、見える人には見え、見えない人には見えない、と言う以外にはないだろう。

また死後の世界があるのか、ないのか。釈尊はどのように考えていたのだろうか。釈尊の言葉に「過去を追うな。未来を願うな。未来はまだやってこない。だから今日なすべきことを熱心にせよ」というのがある。つまり死後の世界については、「ある」とも「ない」とも答えていない。

私は世界の80ヶ国以上を訪れ、いろいろな宗教を見聞してきた。そして図書館に通ってそれらの宗教に就いて知識を得た。しかし体力が衰えた4～5年前からその楽しみも無くなり、忘れたことの方が多いようだ。

私は死と直接関係する実戦に従軍した期間は約4年間で、「突撃」したことは3回である。突撃はそんなに機会がある訳ではなく、突撃を経験したことは幸運(?)だったかも知れない。そして突撃で敵兵を斬殺したのは1回しかないが、その時の状況は克明に覚えている。それだけに生や死の問題についても考えた積もりである。

ヨーランにも、お前たちは「明日、これこれのことをする」と言っはならない、と命令形で書かれている。ただ「アッラ」（神）と言えよよろしい。「もし神がお望みなら私はこれこれのことをします」と言いなさいと。それは明日以降のことは全て神の領域の問題だという態度である。

キリスト教でも同様で、「明日のことを思い煩うな。今日一日の苦勞は今日一日で足れり」という言葉がある。

このようなことから考えると、我々には明日以降のこと、ひいては死後の世界のことを考える必要がない。考えるなというのが宗教の態度か？。

『菊兵団ビルマ巡礼慰霊団と握手』

午後4時にラングーンのエクアトリアル・ホテルに帰着し、10日振りに文化生活を取り戻したような実感を味わった。身体の不自由な身を危惧しながら、徘徊老人のようにしてビルマ中部を一周した姿は、限りなく老境を楽しんでいるように見えたことだろう。しかし限りなく疲れ果てしまった。

ガイドの好意により休憩する暇もなく、希望者は外国人専用の土産品店に案内するということになり、冥土の土産でもと思って参加者に加わった。

痛む身体の無理を承知でバスに乗車し、土産品店に到着して、物色しながら一巡した。食指の動くような物はなく、ペグーのモン族の小間物と、タウンギーにあったシャン族の梅干しの有無をたずねると、外人専用の店らしく展示されていた。しかし5倍以上の値段が付いていたのは驚きであった。

夕食はインヤレーク湖畔の「ヤダナガーデン」（室の公園の意）で撮ることになり、車はホテルを発ってビルマらしい夜景を眺めてレストランに着くと、屋内は観光客で満席の状態であった。

民族舞踊やビルマの豎琴の演奏、曲芸を觀賞しながら、中華料理に箸を運んだ。ふと偶然ながら後方のテーブルに視線を移動すると、そこに「ビルマ慰霊訪問団」と印した法被（ハッピー）を着用する一団が見えた。

以心伝心と言うのか、自然に私は席を立て一団の席に近寄り、自己紹介をして何兵団の方ですかと質ねると、菊兵団（18師団）の一行であった。

ただそれだけの会話で心は通じ合い、立ち上がって知己のように固い握手を交わした。本当にビルマ戦線の従軍者は誰彼と言わず、戦友といった感じが湧いてくる。ビルマの各戦線とも悲惨な戦闘を強いられた関係から、ビルマ戦友会連合会の団結は強く、慰霊に関しては日本一ではないだろうか。

菊18師団は私の所属した龍56師団と兄弟師団で、日本最強とまで言われた北九州編成の師団であった。彼等一行はこれからミートキーナ（ミッチーナ）の慰霊に飛ぶようであったが、彼の地は北ビルマの要衝で、米支連合軍（新編軍）と闘った水上少将（龍兵団歩兵団長）の自決の地である。

一行の中の歩55聯隊の軍医（81才でビルマ訪問11回）は、私の大隊の軍医の名前を聞いてきた。中尾、重松軍医だと答えたが、軍医団も団結しているようである。又、58期の人も自己紹介して挨拶に来た。彼等はいつ頃から第一線の戦場に出たのかは不明だが、初陣ながらビルマの死闘激戦場に出陣したのは、可哀想で気の毒でもあった。

我々一行のビルマのコースを話し、慰霊碑の建立されていた地名を述べてメークテーラの話に移ると、彼の地には菊兵団の慰霊碑も立っているとのことであった。菊兵団は本当に振り回されて戦闘したのである。

今夕の晩餐会で菊兵団の彼等と出会う機会のあったことは大収穫である。これは泣き慰霊たちが両者の間に入り、仲介してくれたのではないだろうか。

日本人墓地参拝（ビルマ平和記念碑）

帰国のために深夜ラングーンを出発する1月16日（金）は、終日フリータイムであった。午前中はOPとして国立博物館の見学に参加する者が大半を占めていた。しかし、私には成さなければならないことが残っていた。それは私の心の安らぎのために、日本人墓地を参拝することであった。

戦争によって不幸な死をとげ、若くして霊となられた巨大な数の死者の魂を、生き残った者の責任として、慰霊申し上げる義務がある。しかし、国家は慰霊を等閑にしており、御遺族の無念の心境は察するに余りありである。

前回に訪れた時には、ラングーン市内に「タムエ」と「チャンドー」の二つの日本人墓地があり、私はタクシーを飛ばして両方とも参拝した。

ビルマ戦友会で組織する「全ビルマ英霊顕彰会」が毎月発行する会誌には、去年の3月から墓地移転のための撤去作業が始まっていると、次のように報道されていた。

【ビルマは長い間、アジアでも最も貧しい国の一つと言われてきたが、近年は著しい経済の発展を遂げ、特にラングーン市内の発展は素晴らしく、目を見晴らせるものがある。

その発展に伴いラングーン市当局は、今まで市内にあった二つの日本人墓地を、ラングーン空港（ミンガラドン）の北東約10kmの「北オカラッパ」という地に移転を決定し、全ビルマ英霊顕彰会に協力を要請してきた。

ビルマ英霊顕彰会はラングーン市の発展のために快く承諾し、要請された移転費用の半分の募金協力も快諾した。そして予想した以上の募金が集まったことから、余剰金をもって霊園の造園に使用することになった。

私は以上のような概要だけは情報として知っていた】

ラングーン市内の地図を調べて日本人墓地の位置を確認すると、人民公園とヤンゴン大学（インヤレーク西側）の間であった。

ホテルのフロントにタクシーを依頼すると、ボーイはタクシーを呼び止めて玄関に誘導し、運転手に行き先を告げて9時に出発した。

20年前の地図にはタムエ、チャンドー墓地は明瞭に標示されていたが、今は「日本人墓地」としか標示していなかった。

記憶に残る墓地の光景を彷彿として思い浮かべながら車窓を覗くと、市街地は延々と続いて人も車も氾濫し、道路は四通八達して建



築ラッシュで高層建築が並び建ち、想像以上の発展を遂げていた。

どこまでも市街地が延びていて、20分を経過してもあの鬱蒼とした森の影が見えてこない。運転手は車を止めて同業の運転手に道を訊ねながら右へ左へと廻り、停車したところには十字架が立っていた。そこはイギリス人墓地で、墓守は何か指示していたようである。

下手な英語で運転手に地図で位置を指示したが、不明であったのか、彼は土地の住民に聞きに走った。20年前のことだから分からないのが普通かも知れないが、前の時には墓地に直行してくれたことを覚えている。

今ではビルマを訪れる日本人は観光客ばかりで、慰霊に日本人墓地を参拝する人は少なく、1%にも満たないのではないだろうか。そのために運転手も知らないのであった。

イギリス人墓地の墓守は、思い出したのか大声で運転手を呼び戻し、今度は親切に位置を教えたようである。タクシーは家屋の少なくなった荒地の中をゆっくりと走った。

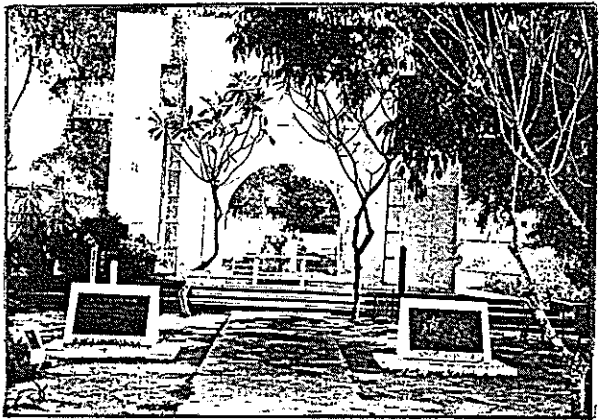
数十台のトラックが駐車していた広場で停車して、彼は再び彼等に詳しく位置を訊ね、今度は理解できたのか、荒れ地の細い道路をのろのろ運転し、自信があるように停車した。

辺り一帯は繁っていた筈の大樹はすべて伐採され、昔日の面影は消えていた。タクシーの停車で急いで出迎えてくれた墓守は、日本語で「ようこそいらっしゃいませ」と笑顔で挨拶してくれた。本当に有り難う。

今日散るか明日は駄目かと闘っていたあの時から半世紀が過ぎ、今こうして再び参拝することが叶えた喜びが、自然にこみ上げてきた。

墓守は門の代わりにしていた道路の横棒をはずして案内してくれ、木が疎らに繁っている参道を、私は悲しみに深く沈む悲愁の気持ちで、肅々と歩き墓前に近づいて行った。

(右上は変わり果てた旧チャンドウー墓地、右下は初めて見る政府が建造した記念堂)



その参道の傍らには私の墓参を喜んで迎えるかのように、ハイビスカスのような真っ赤な花が咲いていた。

すると我が家に、毎年の夏に忘れずに咲き、ビルマのいろいろなことを思い出させてくれる「夜香樹」の、強い芳香が匂ってくるような気がした。この樹は我が戦友がビルマから直接持ち帰ったものである。

参道の突き当たりの奥まった地に立っていた白亜の記念堂は、四本柱のコンクリート製で、20年前のこのチャンドウー墓地には無かった。

前には「日本人合同慰霊之碑」や釈迦仏像、それに個人家族が建立した墓石もあったが、既にこれらは上記したように移転していた。（上の中央に菊の献花があるのは墓石、下は右手前にある碑文）

白亜の記念碑の中央に大理石の墓石が安置され、墓守が毎日供えてくれる生き生きとした菊の花が献花されていた。そこで私は持参してきた線香及び蠟燭をお供えして心から御冥福を祈り、恭しく拝礼した。

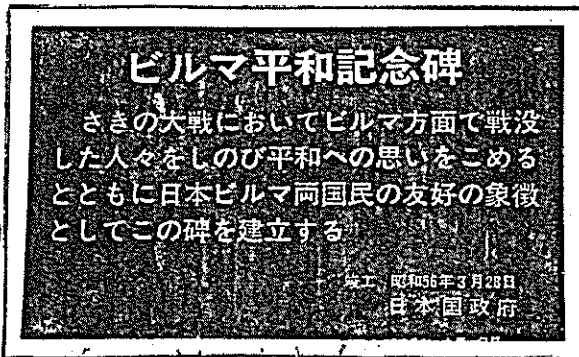
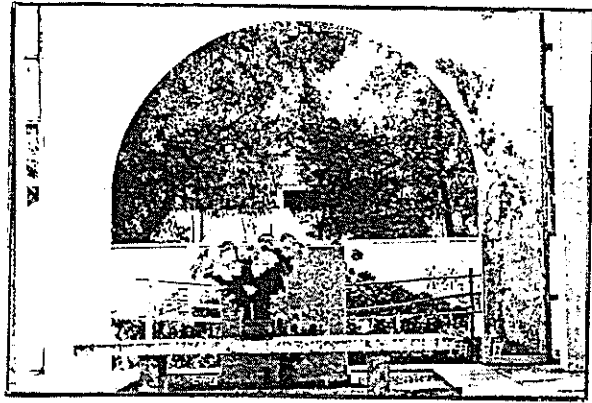
地の果てのように思ったビルマの戦場を思い出していると、生者必滅とはいえ朝露の如く若き命を捧げられた英霊に対し、本当に人生の儚さを感じて目頭が熱くなってきた。

記念碑の前には、日本政府が建立した「ビルマ平和記念碑」（上の写真）と、第33軍司令官本多政材中将の辞を刻んだ石碑が立っていた。

今ここに残っている記念碑は、大理石造りのために移転することは出来ず、新しい墓苑が完成した暁には取り壊される運命にあるらしい。

取り壊される前に参拝できたことは喜ばしいと感じながら、参道を引き返した。そのとき墓守の妻が出てきて、参道の横に据えた机の上に一冊のノートを出してきた。それは記帳のノートであった。私は頁を開いて末尾のところに「龍第56師団歩兵第146聯隊第2大隊長 寺前信次」と記帳し、喫緊の課題であった日本人墓地の参拝を終えたのである。

もう二度と脚を運ぶことの出来ない年齢に達してしまったと思うと、何となく後ろ髪を引かれる想いが胸を圧迫し、再び墓石に向かって頭を垂れた。



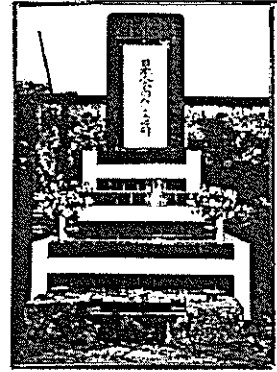


20年前の写真から

左は「タムエ」墓地

右は「チャンドウ
墓地」

19万の英霊が眠る
慰霊碑に哀悼の誠を
捧げる



ラングーンを中心部から参拝の時間を含め、往復約1時間の距離に過ぎない日本人墓地には、ビルマの山野で骨を埋められた19万人もの英霊が祀られている。それに日本の旅行社や添乗員は計画内に入れ、何故案内しないのかと憂鬱な気分になってきた。今日の日本が在るのは誰のお陰であるのか、国民全体で考えるべきである。

これは何ら宗教とは関係はない。民族の問題である。英霊たちが己の尊い生命までを犠牲にして国を守ろうとした日本は、経済的に裕福になったために精神的に頹廢墮落してしまった。さぞかし英霊たちは地団駄ふんで、祖国を悲しい目で見つめていることだろう。

国のために死んだ人を国が祀り、慰霊しない国は世界に唯一つしかない。それは日本である。総懺悔しなければならないと、私の心中は奔馬や野猿が騒ぐように心の乱れは抑えられない状態で、「意馬心遠」の心境であった。

前にも記したが、明治以来、富国強兵を国是として謳歌し、天皇の命令で戦場に出陣して闘い、唯一つしかない生命を犠牲にして、靖国神社に祀られた英霊に対し、今まで通り、なせ命令者が参拝しないのであろうか、と思うようになってきた。政治的に利用されることとは別問題で、民族問題である。

そして靖国神社の参拝は純然たる日本の国内問題である。中国や韓国、北朝鮮の横槍や苦言に対して、内政干渉であると何故反駁できないのか。国を代表する人は、鏡餅の上のミカンのような只の飾りであって良いのだろうか。誠に残念至極で腸(ハラワタ)が煮えくり返る思いであった。

中国数千年の歴史は、暴を以て暴に易(か)え、互いに憎しみ合うことの繰り返りであった。近代に至るまで仇敵意識は中国人の遺伝になってしまった。戦後の中国首脳は、自国の歴史を熟読玩味したことがあるのだろうか。

国の代表者の靖国神社への参拝が、何故に軍国主義であるのだろうか。犠牲となった英霊たちの心情を忘却しては、国家の将来は危ない。昨今の首相や大臣たちは戦後の偏向教育で育った人達である。これで果たしてこの不況

を脱し再び繁栄できるのだろうか。

戦争を語る者は未だ多いようだが、戦闘（武器を使って直接に敵と戦うこと）を語る者は極めて少なくなってしまった。年老いてやっと生きている半死半生の私も最近、戦闘を思い出す時間が少なくなった。これが人間であり、歳月と言うものだろう。だからこそ勉めて靖国神社や慰霊碑等に参拝するのである。

永久にビルマの地に眠る魂魄に別れを告げてタクシーに乗車すると、懐旧の情にかられてインヤレークの一周を依頼し、ホテルに帰着したのは11時過ぎであった。

ショッピングと物価

一行と合流して昼食はエクアトリアル・ホテルのレストラン「金鳳楼」で摂り、その後は再び自由行動となった。墓地の慰霊もすませて特別な用件もなく、妻と二人でアウンサン・マーケットへとタクシーに乗車した。

ラングーンの司令部に赴任した当時、よく歩いた所もすっかり近代化の波が押し寄せ、新しい高層建築物が櫛比して建っていたが、パゴダや役所の位置は昔と変わらず、私にとっては懐かしい所ばかりであった。

マーケットに着くと中学生ぐらいの少年が日本人の客を待ち受け、「何を買いますか」と上手な日本語で話し掛けてきた。いくらかでも小使いを頂戴したい魂胆である。広々としたマーケットの中で種々雑多な物を探すのには、彼等を利用することが一番で、実に良くできた組織である。

ショッピングは女性の妻が専門である。ここで私はビルマ中部を一周した期間中に、ガイドが説明していた物価のことを思い出し、若干記してみることにする。但し私の難聴はひどく、聞き間違いが多いかも知れない。

10日間、ビルマの各地を旅して誰しも驚くことは、先ず「第一」に、パゴダがどのような山間僻地に行っても、立派なものが建っていたことである。戦争中と比較すれば何万倍、20年前とは数百倍の増加で仰天した。

次いで「第二」は物価が安いことである。勿論、マーケットのあったのはラングーンとマンダレーの二大都市だけで、その他の観光都市は買い物をするのにも品物は少ない。

「第三」は予想以上に物資が豊富で、日用雑貨類は溢れている感じであった。しかし程度の高い電化製品等は極めて少ないようであった。

新聞報道等を見てきたところによると、この数年間に物価は年率30%以上も高騰しているようであった。しかし、買い物をする日本人にとっては、いくら円安だドル高だと騒いでもビルマは買物天国で、笑いが止まらないほど物価の安いことに驚くのであった。

それは世界でも生活費の最も高い国の日本と、世界で最貧国のレツテルが貼られているビルマと比較すれば、当然な現象かも知れない。各々の国民の収入の差を考えれば、明瞭に説明が付く。

日本人の一世帯の平均家族の数を4人として月収を40万円と仮定する。ビルマでも最高収入と推定される大学教授の月収は約5000チャットである。一行がビルマを訪れたときの相場は、1ドルが240チャットであったから、日本円に換算して教授の月収は2600円である。

したがってビルマの物価は、日本の物価の約150分の1である。だからそれに相当する日本円を持っていけば生活できるだろうか、現実問題としては、そうはいかないようである。

ここ2～3年の物価上昇率は30%と言われているが、しかし物価上昇率は品物によって異なり、ガソリン価格の急激な高騰は只事ではないらしい。

ビルマのガソリンには政府の決めた公定価格がある。しかし政府からの配給量は1車につき毎週2ガロン(米国では1ガロンは3、785%)の割り当てしかない。その不足分は全てヤミ価格に頼らなければならない。ヤミ価格は公定価格の7～8倍もすると言われている。

この価格は日本の1%90円に近く、2600円の月給だけでは買える値段ではない。ガソリンの高騰は直ちに運賃の高騰となり、その結果、総ての物価に影響を及ぼすから、今後の物価の動きは予断を許さない。

ビルマ米は場所によって二毛作、三毛作も可能だから、米価は上昇しないかと言うと、程度の差こそあれ上昇しているようだ。そして農村人口は80%も占めているが、農村の生活は不安定ではないようである。そのためにパゴダがあれ程までに建てられたのであろうか。

アセアン諸国がビルマに経済協力して、ホテルやレストランをはじめ煙草、ビールなどの工場を建設しており、更にこれから参入しようとする各国の企業も、あるようだと言っている。そのためにラングーン市内の家屋はどんどん借り上げられ、住宅不足となって家賃は急騰していると言う。

ビルマのサラリーマンの大部分を占める国家公務員の給料は、驚くほど低い。そのことは私も報道などで承知していた。最高の大学教授や局長クラスでも約5000チャットだから、普通の人は3000チャット以下であろう。私がチャイティーヨ登山で乗った駕籠が、往復で2400チャットだったから、公務員の給料は極端に低いようである。

昔の生活をするするには4人家族で毎月2万チャットは欲しいと言われている。従ってこの給料では如何に食糧自給率の高いビルマでも、生活ができないことは明白で、別に何らかの収入の方法を考えなければならない。

同居している家族が働くことは当然で、夫婦共稼ぎが多いのもうなずける。マーケットで案内兼通訳に励んでいた少年たちも同じで、学校の先生も課外授業や家庭教師をして、収入の道を計らなければならない。

公務員で副業のある者は限られているが極めて少なく、副業のない多数の者は、公務員の立場を利用して他の収入を考えざるを得ないのが実情である。そのために行政が腐敗するのは当然の結果であろう。

人権や民主化の問題を抱えるビルマは、国際通貨基金（IMF）の支援は望めない。それだけに直接投資の減少は深刻である。直接投資の回復のためにも、綱紀肅正は急務であると思われる。

ビルマはまた外貨準備高が激減して通過が暴落のため、軍政は外貨の流出を防ぐ目的で昨年、タイ、中国との国境貿易を禁止し、ヤミの両替商を摘発した。

しかし力で相場を抑え続けることは困難である。輸入規制の影響から、ラングーン市内の病院や薬局では、医薬品の姿が消え始めたというから、国民生活はますます苦しくなっている。経済の困窮は軍政に何らかの反省を促すだろうか。

日本の本格的な援助停止や欧米の経済制裁が、ボディーブロのようにジワジワと効いてきている。援助を再開させ、経済制裁を解除させるため、軍政はアウン・サン・スーチー女史との対話を再会し、スーチー女史も政府の立場を理解し、歩み寄って現状を打破する精神が必要ではないだろうか。

日本政府が決めた対ビルマ円借款の一部再開に、日本の野党は批判的である。ラングーン国際空港滑走路改修事業などを巡る25億円の円借款を、在ビルマ日本大使館は、「老朽化が激しく、かねてから危険性が指摘されていた」として、「人道援助」の枠組みだと位置づけている。

日本は勿論のこと、ASEAN首脳会議は、ビルマの経済発展のため何らかの手を打って欲しいものである。

ビルマの人々も悲観して気を落としてはならない。70～80年前の日本は、現今のビルマと同様な最貧状態であったばかりでなく、戦争で負けて国土は焦土と化し、最悪の「どん底」に落ち込んでしまった。それが復興して現在に至っているのである。

日本や中国の大乗仏教は、伽藍が必要だから金がかかると言われている。しかし小乗仏教（上座部仏教）のビルマは貧しいと言いながら、20年前に訪れた時より、驚くべき数の寺院や仏塔（パゴダ）が増加していた。莫大な金をかけているのではないか。私はビルマ人のその底力を信じている。

私は信じております。花吹雪のように散華した19万の若い将兵が鎮座ましますビルマには、政治的にも経済的にもその他の部門に於いても、パゴダのような黄金の後光が輝くことであろうと、祈る次第であります。

永遠の別れ

幽鬼の世界が展開した凄惨きわまる戦いの庭と我々は、目に見えない宿命の糸で繋がっていた。その万感の思いが遺るビルマとも、いよいよ離別しなければならぬ時を迎えると、戦闘の後の寂寥感を噛みしめたのと同様に、本当に寂しい心境に立たされ、難破船が沈んで行くような感じさえ覚えるのであった。

何時ごろ出来たのであろうか。別れの夕食は日本食レストラン「ジェー・ドリーム」と云う食堂であった。店に入ると煌々とした電灯の光に照り出された、和服を着用したビルマ娘が出迎え、日本語の看板には「夢」と書かれていた。

ラングーンで寿司・天麩羅をはじめ日本食が食べられるとは、全く夢のようである。それが正夢となり、店の名称としては最高である。

やはり我々の食にも帰趨本能のようなものがあるのか、久しぶりの和食に不思議な充実した幸福感を、味わうことが出来たのである。

(右は看板の「夢」と、下は店の外観)

座布団の位置が相向いになったガイドに聞くと、ビルマの年間観光客は4万5千人で、そのうち日本人は3万8千人である。日本人達よ！先輩の骨が埋もれているビルマには、どしどし訪れて慰霊碑に参拝して欲しいのである。

23:30発の全日空1182便まで時間があり過ぎ、如何にして時間を消費するかと苦勞するガイドは、落ち着くところはシュエダゴン・パゴダはなく、バスは夜空に燦然として輝く黄金の塔に向かった。

ライトアップされたパゴダと四本の参道は眩く輝き、聖なる引力に引き寄せられる善男善女は、夜間でも後を絶たない状態であった。しかしパゴダの贅沢さと、ビルマの人々の質素な生活との落差が余りにも大きく、彼等のあの素朴な笑顔が一段と神秘的に映っていた。

訪れている人達は、この世に生を受けて以来、仏の教えは人間を苦の世界から救う教えだと叩き込まれてきた。だから「布施」は人のためにするのではなく、あくまでも自分のためにする行為だと自覚しているのである。

搭乗機に乗り込んだ疲労困憊の我が体は、満席の一つに腰を卸すや否や欲も得もなく、唯一の楽しみは、太陽がアラカンの彼方へ沈む夢を見て、爆睡することだと眠り、目覚めた時は関空到着の17日早朝、7:30であった。



あとがき

馬鹿げた戦闘体験記は意味がないと云う人もいるが、人生行路の航海にも役立った個人の歴史であり、子孫のためにも書き遺しておきたい。しかし、私と共に闘った我が大隊将兵以外の人には、興味が湧かないのは当然である。

又、「軍ノ主トスル所ハ戦闘ナリ故ニ百事皆戦闘ヲ以テ基準トスベシ、」としていた旧陸軍と、「国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略及び間接侵略に対し我が国を防衛することを主たる任務・・・」とした現在の自衛隊とは、目的が異なり、日と同じくして論じることが出来ない。特に精神的要素の要求は旧陸軍の比ではなく、戦闘記は自衛隊の諸君にとっては参考にならないかも知れない。

ビルマを地の果てとして一顧だにしなかった日本人が、搭乗機を埋め尽くして満席にしていた光景は、我々ビルマ戦線従軍者にとっては喜ばしいことであった。訪れた彼等は必ずビルマは治安がよく、静かで、人々は優しく純朴で、決して豊かではないが清潔で、何よりも対日感情が良いことに気付いたことであろう。

戦後の日本とビルマとの情報は関係者以外は一方通行で、ビルマの人々が日本に思いを寄せる一方、日本人は余りにもビルマを知ろうとしなかった。そして、今回再び訪ねてみると、ビルマ人の日本に対する知識は豊富で、そのうえ日本語を話す人の多いことに驚かされた。

更に気付いたことの一つは、ビルマは他のアジア諸国と一線を画して、独自の文化を守っていることである。中国では少数民族のチベット語、ウイグル語、蒙古語等の使用は凡て禁止している。しかし、ビルマではビルマ語のほかに、少数民族の言葉が厳然として使用され、遺されていた。

又、文字も古来からの独自の文字（丸い文字の連続）を守り続け、ビルマ族もシャン族もカレン族もモン族も皆、一体であることを守り通してきた。これは文化を大切に作る心の現れではないだろうか。中国では略字のあまり古文が読めない状態で、そこに政府の魂胆が隠されているようだ。

長い間の社会主義体制のもとで近代化が遅れた結果、ビルマは古き良き時代のアジアの真髄を見ることの出来る、唯一の国だと称賛したい。だから、ビルマは心のアジアと云えるだろう。

多民族、植民地政策の負の遺産に悩んできた発展途上国では、必要最低限のものを確保するため、軍や共産党の独裁が行われた。ビルマもその道を歩んで来たが、これからは良貨が悪貨を駆逐するように改善されるだろう。

過去の大戦を回顧するとき、屍を馬革で包む覚悟で出陣した我々にとって、

大東亜戦争（太平洋戦争）の侵略的側面は、どのように弁解しても否定できない。しかし、侵略を通じて生まれたビルマとの連帯感まで、否定してはならないと思っている。

歴史的に見れば、日本ほどアジアを白人支配から離脱させることに貢献した国はない。又一方、その国の開放を助けたり、多くの事柄に対して範を示してやった諸国民から、日本ほど「誤解」を受けている国はないようである。死を賭して闘った者にとっては、誠に残念でたまらない。

大東亜戦争を契機に独立した多くの東南アジアの人々から、「日本人より難う」という声を、素直に受け取れない日本人のいることも承知している。

それらのことは、それらの国々の辿ってきた歴史の無理解から来ていると思う。そのためにもビルマを始め、それらの国を訪れて現実を直接見聞して欲しいのである。

大東亜戦争中、ビルマは日本、イギリス、中国軍（蒋介石軍）の激しい戦いの場となり、国土は荒廃した。この3年8ヶ月の間、兵站（補給）を考えなかった日本軍の徹発は苛酷であった。日本軍は夜盗と大差なかったことは事実で、今いくら援助しても限りがないのである。

戦争中のビルマの人々が所有していた貨幣は、二度にわたって無価値の紙屑と化した。そして又、日本では戦史上、稀にみる無謀だったインパール作戦を始めとした諸作戦を、軍国主義批判の格好の材料として犠牲者の数を強調するが、残念ながら、8万人ものビルマ人が亡くなったことを言う人は少ない。我々はお詫びと御冥福を祈らなければならない。

実際、日本の軍政の劣悪を感じたのと同時に、ビルマの人々には戦争は基本的に、自分達のものではないと感じていたに違いない。イギリスの植民地政策の極悪だけでなく、日本の軍政の悪も又、戦後の復興を妨げる原因となったことは確かである。

それにも拘わらず、戦後、僅かな賠償で列国に先駆けて対日平和条約を締結し、今日まで限りない友情を示してくれているのがビルマであった。

現在のビルマは終戦後の日本と同じ経済状態である。そういう時代を知らない、或いは偏向教育で教えられなかった世代の日本人は、ビルマの歴史を学ぼうとせず、今日の日本の尺度でビルマを見るのは理解できない。

戦争中に彼の地で傷つき、或いは部隊からはぐれた日本兵を保護し、無事に祖国へ送り返した例も少なくない。また「ビルマの豎琴」の水島上等兵のようにビルマの大地に残り、ビルマ人として生活を送った日本兵も多いのである。

戦後の日本は平和憲法のもと、専ら経済復興のみに力を注いで先進国へと成長した。しかし反対に、自ら進んで精神的に武装解除を行い、大切な心、即ちビルマの国を始めとした諸国との連帯感を失ってしまっている。

現在のビルマは、欧米先進国の制裁下にあるにも拘わらず、今回訪れた

実感では、最近急速に発展して存在感を増してきている。この機会に日本も奮起して、ビルマの復興に力を貸してやって欲しいと切望している。

大ローマは滅び、大蒙古も、大英帝国やフランスも往時の面影はうすくなり、日本やアメリカも何時までも良いことばかりではない。ビルマの皆さん、ビルマには限りない将来があるのだと、自信をもって頑張るって欲しいと念願している。

瀕死の重傷を負いながら幽鬼の世界を思わせる凄惨な瞬間、瞬間と戦い、九死に一生を得て生き抜いてきた私は、棺を蓋うまで決してビルマの戦を忘れない。これが英霊に対する義務であり、責任であると思っている。

大正一桁生まれの私は満州事変、支那事変（日中）、大東亜（太平洋）戦争と続く戦乱の中で少年期、青年期を過ごした。直接戦闘に参加して満州・支那本部大陸を馳駆し、一時は学校勤務を体験して再びビルマ作戦に従軍し、今次大戦の最激戦を体験した。

戦いに敗れて復員するや、職業軍人（？）と言われて悪玉のように非難的に曝された。しかし、この言葉は敗戦後に付けられた名称で、私は一度たりとも職業だと意識したことはない。

明治憲法下では、兵役は国民の三大義務（兵役・納税・教育）の一つで、積極的に国民の義務を果たすためだと信じていた。死を賭した武士道的な純真な心で、国家のために奉仕する信念を徹底して教育され、陸士を受験して軍人になった。当時の青年の熱誠燃える心を知らずに非難することは、誠に卑怯千万と言わなければならない。

敗戦という冷厳な現実には、職業軍人に公職追放という苛酷な烙印を押した。その上、戦犯とまで言われた戦後は、戦場に劣らない辛酸苦汁を舐めさせられた。それ以上に、戦死された靖国の英霊と御遺族の心中は無念であったとご推察申し上げる。そのためにも生存者の我々の戦後は、慰霊一心であった。

戦闘を回顧するとき、個人によって幾多の幸運、悲運、必然、偶然、成功、失敗など、種々雑多であると思う。しかし結局のところ、我が国は何が原因で負けたかと反省すると、「金と物と人材」の総合戦力で負けたのである。

戦争に必要な要素は「3つのM」と言われている。それは兵力（MAN）、兵器（MACHINE）、資金（MONEY）である。しかし我々はアメリカを筆頭とする連合軍に対し、勝のだという必勝の信念だけで戦わされ、勝利を裏付ける根拠は何もなかった。最前線で桁外れの敵戦力を身を以て体験した我々は、そのように考えている。

強がりの精神力だけでは、国を挙げての総力戦では戦えない。ノモハンの大敗を隠し続け、資源と資金の経済力を計算せず、軍の中枢部で声高く開戦を叫んだ洞察力欠如の人達が、その後の軍を指導する適任者ではなかつたといいたいのである。

作戦や戦闘は誤解と誤算が付きまとう連続だが、戦闘の本質を誤解して「魂さえあれば」と空威張りし、無為無策に肉弾を以て鉄壁の敵陣に突撃させる式の凡愚が、太平洋戦争の負けた主因の一つである。

インパールを始めとしたビルマ作戦の悲劇の原因は明らかである。作戦計画の不備、兵力の分散、補給の無視と軽視、地形の不利（我が軍は地形の利用は考慮外）、制空権の喪失など、作戦開始の前から成功は無かった。

人間は体験の動物だと言われていた。いざ戦闘ともなれば、必ず自分が参加した戦闘に教訓を求める。だからこそ戦闘の経験が重要な要素となるのである。戦術よりも兵器の優劣や火力の優劣の方が先決問題で、肉は鉄に勝てないのである。

戦前の天皇は神格化されていたため、「上官の命令は天皇の命令」であった。「馴致」という辞は慣れさせるという意だが、旧軍では理屈抜きで、上官の命令には絶対服従であった。これが日本軍を精神的に最強のものにした要素である。しかし一方では、無駄な犠牲を出した原因ともなった。

馴致をよいことにして特定の人達が軍の要職に長く座り、政治の世界と同様に陸軍という組織や戦争指導まで、余りにも私物化し過ぎたのである。

エリートを自認する人達は、近代化された軍の可能性と必要性を推測することが出来ず、その判断力は全く当たらず、飛行機・戦車の時代になっていた近代戦の様相と、その補給能力の重要性を全く理解していなかった。

「脱皮できない蛇は死ぬ」と言われるように、日露戦争に大勝利したと思っただ日本陸軍は、慢心と驕りに徹して脱皮できず、今次大戦に大敗を喫した。その敗戦の原因の一つは、実際の戦闘の経験も少なく、いたずらに学歴や平時的成績、出身別などを基礎にした人事の弊害であった。

他の役所と同じく重んじられるのは平時向きの能吏であった。戦時の軍でも同じく、「血統」「毛並み」「コネ」及び「仕える時の身の処し方の巧さ」が、出世するための絶対条件であったと推察できる。そして、陸士・陸大の卒業時の席次が後々まで評価の基準となっていた。自己保身と栄達以外に眼中になかった平時的秀才は、戦闘に関する見識に欠けた愚劣、無能な優等生と言われても仕方がないだろう。

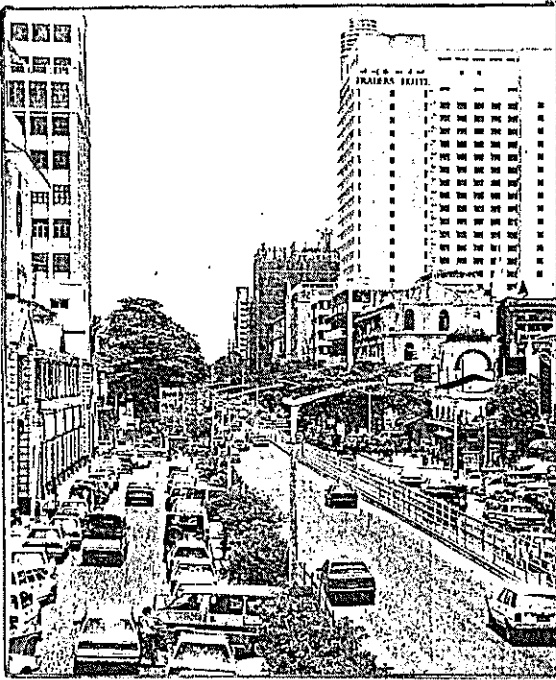
「軍の主とする所は戦闘なり」と謳った旧陸軍の綱領は、「戦勝」を主としなければならなかった。責任と服従が軍人の使命だと忠実に実行してきた我々は、戦勝を度外視したため無駄死にさせられたのである。

頭も心も空になり、幼児化して考える力もなくなった老人の私が、今頃になって何を愚痴り、ほざくのかと失笑を買うかも知れないが、これも草蒸す屍となった多くの死が頭に浮かぶからである。

慰霊巡礼・鎮魂の旅の終わりに当たり、支離滅裂で愚劣な蛙鳴蝉噪の文を書いた。しかし、これがビルマに対する愛着と軍の反省すべき一端である。

最後に平和の礎となられた御英霊に心から哀悼の誠を捧げます。

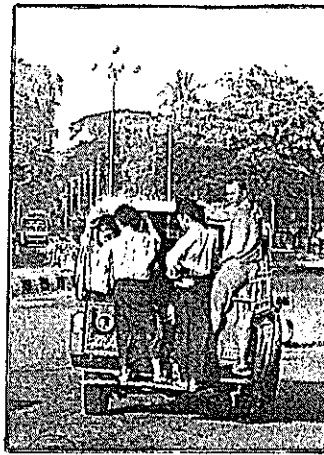
ラングーン市の街風景



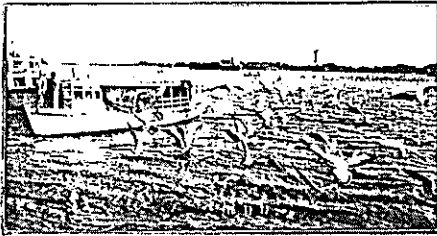
インレー湖の酋長族



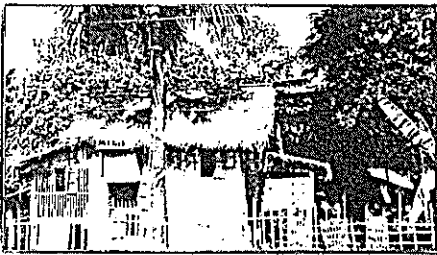
ミニ・トラックバス



ラングーン港風景



ビルマの農家の家屋



パガンのアーナンダ寺院

